續國譯漢文大成

文學部　四十二

309
65

始

續國譯漢文大成

文學部 第四十二册（第十一帙の二）

白樂天詩集三の二

吉田待郎氏 寄贈本

昭和廿六年 帝國圖書館

309
65

白樂天詩後集　卷三

格詩　凡五十八首

詠興五首　并に序

詠興五首　并序

七年四月、予罷河南府。歸履道第。廬舍自給。衣儲自充。無欲無營。或歌或舞。頹然自適。蓋河洛間一幸人也。遇興發詠。偶成五章。各以首句命爲題目。

【訓讀】七年四月、予河南府を罷め、履道の第に歸る。廬舍自ら給し、衣儲自ら充ち、欲する無く營む無く、或は歌ひ或は舞ひ、頽然として自適す。蓋し河洛間の一幸人なり。興に遇ひて詠を發し、偶五章を成す。各首句を以て命じて題目と爲す。

【字解】【一】七年四月　太和七年四月、樂天、病を以て河南尹を免ぜられ、再び賓客分司を授けらる。【二】履道　洛陽の里名。第は邸なり。【三】衣儲　衣食といふが如し。【四】頽然自適　靜に心に任せて日を送ること。

〔一〕

解印出公府

解印出公府。抖擻塵土衣。
百吏放爾散。雙鶴隨我歸。
歸來履道宅。下馬入柴扉。
馬嘶返舊櫪。鶴舞還故池。
雞犬何忻忻。鄰里亦依依。
年顏老去日。生計勝前時。
有帛禦冬寒。有穀防歲飢。
飽於東方朔。樂於榮啓期。
人生且如此。此外吾不知。

【字解】【一】解印　官を辭すること。公府　役所。河南府。【二】抖擻　掃ひ除くこと。【三】舊櫪　もとの廐。【四】忻忻　よろこぶ貌。【五】依依　なつかしき貌。【六】東方朔　漢の武帝に事ふ。嘗て帝に謂うて曰く、侏儒は飽いて死せんと欲し、臣朔は饑ゑて死せんと欲すと。【七】榮啓期　孔子泰山に遊び榮啓期の鹿裘帶索し琴を鼓して歌ふを見、問うて曰く、先生何をか樂むと。曰く吾が樂最も多し。天萬物を生じ人を貴しとなす。吾、人たるを得たるは一樂なり云云と。

【詩意】印を解き官を辭して役所を去り、衣の塵を掃ひ除き、部下の官吏等を退散せしめ、二羽の鶴を隨へて我が履道里の邸に歸つた。かくて馬ももとの廐に歸り鶴ももとの池に還つた。雞犬も吾が歸つたことを欣び、近鄰の人も特に懷しさを感ずるやうに見える。吾は嘗て此を去つた時から見れば大分ふけたけれども、生計は以前よりも裕福になり、寒さを防ぐ衣服もあり、飢を凌ぐ穀物もあり、東方朔よりも饒に、榮啓期よりも樂しい。これでこそ人生の滿足を得たといふもので、此外には何も求むる所はない。

〔二〕

出府歸吾廬

出府歸吾廬。靜然安且逸。
更無客干謁。時有僧問疾。
家僮十餘人。櫪馬三四匹。
慵發經旬臥。興來連日出。
出遊愛何處。嵩碧伊瑟瑟。
況有清和天。正當疎散日。
身閒自爲貴。何必居榮秩。

府を出でて吾が廬に歸る

府を出でて吾が廬に歸り、靜然として安く且つ逸す。更に客の謁を干むる無く、時に僧の疾を問ふ有り。家僮十餘人、櫪馬三四匹。慵發るときは旬を經て臥し、興來るときは日を連ねて出づ。出遊何れの處をか愛する、嵩碧伊れ瑟瑟たり。況んや清和の天有り、正に疎散の日に當るをや。身閒なれば自ら貴たり、何ぞ必ずしも榮秩に居らん。

心足卽非貧。豈唯金滿室。
吾觀權勢者。苦以身徇物。
炙手外炎炎。履氷中慄慄。
朝飢口忘味。夕惕心憂失。
但有富貴名。而無富貴實。

【字解】【一】 嵩嶺　嵩山の綠。瑟瑟は綠色の石。【二】 清和天　四月頃をいふ。【三】 槃秩　高位。【四】 炙ノ手　手をかざせば熱さを感ずる程勢焰の盛なるをいふ。炎炎は熱の强き貌。【五】 履ノ氷　薄氷をふむが如く危きこと。中慄慄は心中常に懼れを抱くこと。

【詩意】 役所を去つて吾が家に歸り、始めて身心の安逸を悟つた。面會を求める客もなく、たまに僧が病氣見舞に來るぐらゐのものだ。十餘人の僮僕と三四匹の馬を畜ひおき、大儀になれば十日間も寐て居り、氣が向けば毎日でも遊びに出る。どこが一番氣に入つてゐるかといへば、何と謂つても嵩山の綠の瑟瑟たるさまが一等である。今は清和の氣候で、おまけに閑散の身と來てゐるから愉快なことは此上なしだ。世に身の閑暇なほど貴いことはあるまい。位の高いことなどは問題ではない。また心の滿足が何よりの富だ。金が堂に滿ちてゐるばかりが富ではない。世の權勢家を觀るに、身を苦めて名利を貪り、外觀だけは勢威赫赫であるが內心は常に疑懼を抱き、飢ゑては味を忘れて貪り食ひ、名利を失ふことを惕れては心常に憂へ、富貴といふは名ばかりで少しも其實はない。

【餘論】 唐宋詩醇に云く「胸に眞得あり、手に信せて拈來し、自ら天趣饒し。此種の詩境は的に是れ淵明より脫化して出づ。ただ繁簡古近の別なからざるも、必ず字句形迹を以て之を求むるは、是れ耳食の見なり」と。

〔三〕

池上有小舟

池上有小舟。舟中有胡牀。
牀前有新酒。獨酌還獨嘗。
熏若春日氣。皎如秋水光。
可洗機巧心。可蕩塵垢腸。
岸曲舟行遲。一曲進一觴。
未知幾曲醉。醉入無何鄉。
貪緣潭島間。水竹深青蒼。
身閒心無事。白日爲我長。

池上に小舟あり

池上に小舟有り、舟中に胡牀有り。
牀前に新酒有り、獨り酌みて還獨り嘗む。
熏ずること春日の氣の若く、皎たること秋水の光の如し。
機巧の心を洗ふ可く、塵垢の腸を蕩ふ可し。
岸曲りて舟の行くこと遲く、一曲に一觴を進む。
未だ知らず幾曲にて醉ふを、醉ひて無何の鄉に入る。
潭島の間に貪緣すれば、水竹深くして青蒼。
身閒にして心無事、白日我が爲に長し。

我若未忘世。雖閒心亦忙。　我若し未だ世を忘れずんば、閒なりと雖も心亦忙し。
世若未忘我。雖退身難藏。　世若し未だ我を忘れずんば、退くと雖も身藏れ難し。
我今異於是。身世交相忘。　我今是に異なり、身世交〻相忘る。

【字解】【一】胡牀　牀几。こしかけ。【二】機巧心　名利を求むる俗心。【三】無何鄉　莊子逍遙游篇に無何有鄉とあり。【四】貪緣　つきまとふ。

【詩意】池上に小舟があり、舟の中に牀几があり、牀几の前に酒がある。獨りで酌んで獨りで飲む。酒の香は春の氣の如く、光は秋の水の如くで、之を飲めば俗念枯腸を一洗することが出來る。岸の曲るに隨つて遲遲として舟を進め、一曲ごとに一杯を傾くれば、幾曲で醉ふか知らぬが、醉へば憂を忘れて無何有鄉に入り、潭や島の間に緣り沿へば水竹の綠が滴るやうである。身も心も無事安泰で特に日の長いのが嬉しい。併し我若し世を忘れなければ、如何に身は閒でも心は忙しいであらう。また世が若し我を忘れなければ、たとひ官を退いても我が身を藏しておくことは出來まい。所が今然らずして身も世も相忘れてゐるから、かくの如く無事安泰でゐられるのである。

〔四〕

四月池水滿　四月池水滿つ
四月池水滿。龜游魚躍出。　四月池水滿ち、龜游び魚躍り出づ。
吾亦愛吾池。池邊開一室。　吾も亦吾が池を愛し、池邊に一室を開く。
人魚雖異族。其樂歸於一。　人魚族を異にすと雖も、其樂は一に歸す。
且與爾爲徒。逍遙同過日。　且爾と徒と爲り、逍遙して同じく日を過さん。
爾無羨滄海。蒲藻可委質。　爾滄海を羨むこと無く、蒲藻に質を委す可し。
吾亦忘青雲。衡茅足容膝。　吾も亦青雲を忘れ、衡茅膝を容るるに足る。
況吾與爾輩。本非蛟龍匹。　況んや吾と爾が輩と、本蛟龍の匹に非ず。
假如雲雨來。祇是池中物。　假如雲雨來るも、祇是れ池中の物なり。

【字解】【一】滄海　大海。【二】蒲藻　池中に生ずる草。【三】青雲　高位高官に喩ふ。【四】衡茅　衡門茅屋。【五】池中物　三國志に、周瑜曰、劉備非ㇾ久用爲ㇾ人用ㇾ者、蟠蛟龍得ㇾ雲雨、終非ㇾ池中物ㇾ也とある。

【詩意】四月になつて池の水が滿ち、龜や魚が遊んだり躍つたりしてゐる。吾も吾が池を愛して、其傍に一室を構へた。人と魚とは種類を異にしてはゐるが、其樂には相違のある筈はないのだから、吾と汝と仲間になり逍遙して俱に日を送らう。汝も大海などを羨まずに、蒲や藻の間に身を託してゐるがよい。吾も榮達などを希はず、草廬の中に安んじて暮さう。まして吾も汝も固より蛟龍の類ではないから、たとひ、雲や雨を得ても大飛躍は出來ず、生涯この池の中に埋もれ果てるのが柄相當なのであるから。

〔五〕

小庭亦有月

小庭亦有月。小院亦有花。
可憐好風景。不解嫌貧家。
菱角執笙簧。谷兒抹琵琶。
紅綃信手舞。紫綃隨意歌。
菱・谷・紫・紅。皆小鬟獲名也。
村歌與社舞。客哂主人誇。
但問樂不樂。豈在鐘鼓多。
客告暮將歸。主稱日未斜。
請客稍深酌。願見朱顏酡。
客知主意厚。分數隨後加。
堂上燭未秉。座中冠已峩。
左顧短紅袖。右命小青蛾。
長跪謝貴客。蓬門勞見過。
客散有餘興。醉臥獨吟哦。
幕天而席地。誰奈劉伶何。

小庭にも亦月あり

小庭にも亦月有り、小院にも亦花有り。
憐む可し好風景、貧家を嫌ふを解せず。
菱角笙簧を執り、谷兒琵琶を抹す。
紅綃手に信せて舞ひ、紫綃意に隨ひて歌ふ。
村歌と社舞と、客哂ひ主人誇る。
但問ふ樂むと樂まざると、豈鐘鼓の多きに在らんや。
客は告げて暮に將に歸らんとす、主は稱す日未だ斜なら[ずと。]
請ふ客稍や深く酌め、願くは朱顏の酡きを見ん。
客は主意の厚きを知り、分數隨ひて後に加はる。
堂上燭未だ秉らず、座中冠已に峩し。
左に短紅袖を顧み、右に小青蛾に命ず。
長跪貴客に謝し、蓬門見過を勞す。
客散じて餘興有り、醉臥して獨り吟哦す。
天を幕として地を席とす、誰か劉伶を奈何せん。

【字解】【一】小院　なかには。【二】笙簧　樂器の名。【三】抹　かきならす。【四】朱顏　紅顏。【五】分數　杯の數。【六】燭未秉　燈火を點ぜぬこと。【七】冠已峩　冠をかぶつて歸る支度をすること。【八】短紅袖　少婢をいふ。【九】小青蛾　前に同じ。【一〇】蓬門　茅屋といふが如し。見過は來訪なり。【一一】劉伶　晉の大酒家の名。樂天自ら比して謂ふ。

【詩意】我が小庭にも月もあれば花もある。花月の好風景が貧家をも嫌はず風情を添へてくれるのは誠に愛すべき限である。菱角は笙簧を吹き谷兒は琵琶をかきならし、紅綃は手に任せて舞ひ紫綃は意の儘に歌つた。鄙歌と田舍踊ではあるが、客は微笑して鑑賞し、主人(樂天自ら謂ふ)は得意になつてゐる。要は人が樂めばよいので鐘鼓の多いばかりが能ではない。やがて客は「日が暮れるから」と歸らうとすると、主人は「まだまだ日も高いから、もつと杯を重ねなされ」と引留めた。客は主人の厚意にほだされて杯の數を重ねたが、火ともし頃になつて冠をかぶつて歸支度を整へた。因つて主人は左右の少婢に命じなどして跪いて客に謝し、茅屋に來訪せられた勞を慰した。客が歸つた後で天を幕とし地を席として醉臥し、高らかに詩を吟じた。ただ獨り醉吟してゐる劉伶を誰も奈何ともすることが出來なかつた。

秋涼閒臥

殘暑晝猶長。早涼秋尙嫩。
露荷散清香。風竹含疎韻。
幽閒竟日臥。衰病無人問。
薄暮宅門前。槐花深一寸。

【字解】【一】嫩　わかきこと。【二】露荷　露を帶びた蓮。【三】疎韻　まばらな響。【四】竟日　終日。

【題義】秋の初に閒臥してゐるさまを述べた詩である。

【詩意】秋とはいふものの、まだ暑氣が名殘を留め日足も長い。露を帶びた蓮が清香を散じ、風に吹かれる竹が折折清韻を發する。暇に任せて終日寨てゐるが、誰も來り訪ふ者もない。夕方門前に出て見れば槐の花が落ちて一寸も積つてゐる。

酬思黯相公見過弊居戲贈

軒蓋光照地。行人爲徘徊。
呼傳君子出。乃是故人來。

思黯相公の弊居に見過し戲に贈るに酬ゆ

軒蓋光地を照し、行人徘徊を爲す。
呼びて君子の出づるを傳ふ、乃ち是れ故人來る。

訪我入窮巷。引君登小臺。
臺前多竹樹。池上無塵埃。
貧家何所有。新酒三兩盃。
欵曲語上馬。從容復遲廻。
留守不外宿。日斜宮漏催。
但留金刀贈。未接玉山頹。
家醞不敢惜。待君來即開。
村妓不辭出。恐君驟然哈。

我を訪ひて窮巷に入る、君を引きて小臺に登る。
臺前に竹樹多く、池上塵埃無し。
貧家何の有る所ぞ、新酒三兩盃。
欵曲に語りて馬に上り、從容として復遲く廻る。
留守外に宿せず、日斜にして宮漏催す。
但だ金刀の贈を留め、未だ玉山の頹るるに接せず。
家醞敢て惜まず、君が來るを待ちて卽ち開く。
村妓辭せずして出づ、恐らくは君が驟然として哈はんこ「とを。」

【字解】【一】思黯相公　牛僧孺、字は思黯、太和四年同平章事たり。因つて相公といふ。見過は來訪といふが如し。【二】軒蓋　馬車の日蔽。【三】行人　道をあるいてゐる人。【四】君子　高貴の人。思黯相公を指す。【五】故人　舊友。【六】欵曲　ねんごろに。【七】留守　官名。東都留守なり、居守ともいふ。卷四にも和二思黯居守獨飲偶醉見示六韻一と題する詩がある。時に牛僧孺は東都留守であつたのであらう。【八】宮漏　水時計。【九】玉山頹　酔ひつぶれること。【一〇】家醞　手作りの酒。【一一】驟然　大笑する貌。

【題義】前宰相牛僧孺が樂天の宅を訪問して戲に贈つた詩に酬いた作である。

【詩意】馬車の光がきらきらと閃き道行く人が右往左往する。何事かと見て居れば高貴の御方の御出

ましだといふ。一體誰だらうと思つた所が吾が故人の牛相公の御來臨であつた。相公は我を訪うて駕を窮巷に枉げさせられたので、我は相公を案内して小臺に登つた。臺の前には竹樹が茂つて居り池は塵さへ留めず水が澄んでゐる。折角の御來臨ではあるが貧家のことで何も差上げるものもなく、ただ二三杯の新酒を勧めた。相公は歡談良久うして馬に上り別を惜んで歸らうとせられた。相公は東都留守の官に在るので外泊することは出來ず、日も西に傾き時刻も移つた所から、ただ置土産に金刀をくれたばかりで、醉倒する程歡醉もされずに御歸りになつたのは誠に遺憾である。手作りの酒を惜しげもなく勧め、村妓が遠慮もなくでしやばりなどしたので、相公には定めて大笑されたであらう。

再授賓客分司

優穩四皓官。清崇三品列。
伊予再塵忝。内愧非才哲。
俸錢七八萬。給受無虛月。
分命在東司。又不勞朝謁。
既資閒養疾。亦賴慵藏拙。
賓友得從容。琴觴恣怡悅。

再び賓客分司を授けらる

優穩なり四皓の官、清崇なり三品の列。
伊れ予再び塵し忝くし、内才哲に非ざるを愧づ。
俸錢七八萬、給受虛月無し。
分命東司に在り、又朝謁を勞せず。
既に閒に疾を養ふを資り、亦慵くして拙を藏するに賴る。
賓友從容するを得、琴觴怡悅を恣にす。

乘籃城外去。繫馬花前歇。
六遊金谷春。五看龍門雪。
吾若默無語。安知吾快活。
吾欲更盡言。復恐人豪奪。
應爲時所笑。苦惜分司闕。
但問適意無。豈論官冷熱。

籃に乘りて城外に去り、馬を繫ぎて花前に歇ふ。
六たび金谷の春に遊び、五たび龍門の雪を看る。
吾若し默して語る無くんば、安んぞ吾が快活を知らん。
吾更に言を盡さんと欲するも、復恐らくは人の豪奪せん。
應に時の笑ふ所となるべし、苦だ分司の闕くるを惜む。
但問ふ意に適するや無や、豈官の冷熱を論せん。

【字解】【一】四皓官　漢の高祖の時、商山の四皓が太子の賓客になつた。因つて太子賓客の官をいふ。【二】三品　三位。【三】給受　俸錢を頂戴する。【四】分命在東司　東都分司の官に任ぜられたこと。【五】從容　くつろぎ樂むこと。【六】金谷　地名。洛陽の西に在り、昔、石崇の園を開き、豪奢を極めし處。【七】龍門　山の名。伊闕ともいふ。洛陽の南に在る。【八】豪奪　强奪といふが如し。【九】冷熱　閒散なると權要なると。

【題義】太和七年四月、病を以て河南尹を免せられ、再び太子賓客・分司東都の官を授けられたことを述べた詩である。

【詩意】太子賓客といふ官職は位も高く呑氣でもある。自分は菲才を以て再び此官に任せられ、毎月七八萬錢の俸給を頂戴し、且東都に分司してゐるので朝謁の勞をも免れ、靜に病を養ひ拙陋の身を藏してゐることも出來、友達と俱にくつろぎ琴酒を弄して樂を恣にすることも出來る。又籃に乘つたり馬に乘つたりして郊外に遊び、金谷の春や龍門の雪を賞することも出來る。誠に無上の幸福と謂

つて宜しい。若し默して此樂を語らなければ、誰も吾が樂を知らずにゐるであらう。併しあまり語り過ぎると此官を人に强奪される恐がある。世人からは笑はれるかも知れないが、自分は切に此官を免せられることを惜んでゐる。自分に取つては官職が快いか否かが問題なので、權力のあるなしは論ずる所ではないのだ。

把酒

把酒仰問天。古今誰不死。
所貴未死間。少憂多歡喜。
窮通諒在天。憂喜卽由己。
是故達道人。去彼而取此。
勿言未富貴。久忝居祿仕。
借問宗族間。幾人拖金紫。
勿憂漸衰老。且喜加年紀。
試數班行中。幾人及暮齒。
朝餐不過飽。五鼎徒爲爾。

酒を把る

酒を把りて仰ぎて天に問ふ、古今誰か死せざらん。
貴ぶ所は未だ死せざる間、憂少くして歡喜多きを。
窮通は諒に天に在り、憂喜は卽ち己に由る。
是故に達道の人、彼を去りて此を取る。
言ふ勿れ未だ富貴ならずと、久しく祿仕に居るを忝くす。
借問す宗族の間、幾人か金紫を拖く。
憂ふる勿れ漸く衰老するを、且年紀を加ふるを喜ぶ。
試みに班行の中を數ふるに、幾人か暮齒に及べる。
朝餐は飽くに過ぎず、五鼎は徒爲爾。
夕寢止だ安きを求む、一衾而已矣。
此外皆長物。於我雲相似。
有子不留金。何況兼無子。

【字解】【一】窮通　窮達なり。【二】金紫　金印紫綬。高位高官。【三】年紀　年齢。【四】班行　同僚。【五】暮齒　老年。【六】五鼎　澤山の食饌。【七】長物　餘計な物。無用の長物。

【題義】酒杯を把つて天に問うたといふ意。

【詩意】杯を把つて天に問うた。昔から死なずに濟んだ人は一人もあるまい。だから生ある中に憂を少くし歡喜を多くすることが何よりも大事だ。窮達は天に在り憂喜は己に由るのだ。故に道に通じた人は憂を捨てて歡喜を取つた。予は未だ富貴にはならないが忝くも久しく官職にゐて俸祿を食んでゐる。宗族の間にも自分ほど高位に昇つた者はないのだ。段段衰老するのは憂ふるに足らない。寧ろ年齢の加はるのを喜んでゐる。吾が同僚の中でも予ほど老年になるまで生きた者が幾人あるか。珍味佳肴も高が一飽に過ぎない。孤衾の中に安眠するのが何よりの幸福といふものだ。其外は皆無用の長物で、我に取つては浮雲も同樣である。自分は子があつても金などを遺してやらうとは思はぬ。まして金も子もないから心に懸る雲もない。

首夏

格詩　把酒　首夏

林靜蚊未生。池靜蛙未鳴。
景長天氣好。竟日和且清。
春禽餘哢在。夏木新陰成。
兀爾水邊坐。翛然橋上行。
自問一何適。身閒官不輕。
料錢隨月用。生計逐日營。
食飽慙伯夷。酒足愧淵明。
陶潛詩云。飲酒常不足。
壽倍顏氏子。富百黔婁生。
有一卽爲樂。況吾四者并。
所以私自慰。雖老有心情。

【字解】【一】竟日　終日。【二】餘哢　あまりの鳴聲。【三】兀爾　勤かざる貌。【四】翛然　ゆったりとして。【五】料錢　唐制職官俸祿の外、別に食料を給す。之を料錢といふ。【六】伯夷　首陽山に餓死せし人。【七】淵明　晉の陶淵明。【八】顏氏子　孔子の弟子顏回、不幸短命にして死す。【九】黔婁生　古の賢士の名。

【題義】初夏の情景を敍した詩である。

【詩意】林が靜で蚊もまだ出ず、池も靜で蛙もまだ鳴かない。日が長く天氣もよく終日清和である。春禽の歌も名殘を留め夏木立の陰も濃になつた。我は爲す事もなく、或は水邊に坐し、或は橋上をさまよひなどしてゐる。因つて自ら問ふ。何と愉快なことであらう。身は閑職に在つて月月俸祿を賜はり、日日の生計には少しの心配もなく、食は飽き酒は足り、顏回の倍も生きて黔婁よりは百倍も富んでゐる。食・酒・壽・富四者の中の一つあつても樂いのに、自分は此四者を兼有してゐる。故に私に自ら慰めて老いたりと雖も悅んでゐるのである。

代鶴

我本海上鶴。偶逢江南客。
感君一顧恩。同來洛陽陌。
洛陽寡族類。皎皎唯兩翼。
貌是天與高。色非日浴白。
主人誠可戀。其奈軒庭窄。
飲啄雜雞羣。年深損標格。
故鄉渺何處。雲水重重隔。

鶴に代る

我は本海上の鶴、偶江南の客に逢ふ。
君が一顧の恩に感じ、同じく洛陽の陌に來る。
洛陽には族類寡し、皎皎唯兩翼。
貌は是れ天と與に高く、色は日に浴するに非ずして白し。
主人誠に戀ふ可し、軒庭の窄きを其奈せん。
飲啄して雞羣に雜り、年深くして標格を損す。
故鄉渺として何の處ぞ、雲水重重として隔る。

誰念深籠中。七換摩天翮。

誰か念はん深籠の中、七び摩天の翮を換へんとは。

【字解】【一】江南客　蘇州刺史たる白樂天をいふ。【二】君　白樂天を指して言ふ。【三】放類　同類の鶴。【四】皎皎　白きさま。【五】主人　白樂天を指して言ふ。【六】軒庭　のきさきや庭。【七】籠格　器量。【八】七換摩天翮　天を摩して上る翮を七回換へる。即ち七年を經ること。

【題義】鶴に代つて其意中を述べた詩である。

【詩意】吾は本海邊の鶴であつたが、偶然江南に客たりし白樂天に逢ひ、遂に其恩に感じて俱に洛陽に歸つて來た。洛陽には吾が族類は至つて寡く、ただ吾等二羽在るのみである。（後集卷三、解印出二公府一及び後集卷八、有二雙鶴一留在二洛中一、忽見二劉郎中一依然鳴顧。劉因爲二鶴歎二篇一寄レ予。予以二一絶句一答レ之參照。）吾が貌は天と俱に高く、吾が色は浴せずとも潔白である。吾が主人の白樂天は吾が慕つて離るるに忍びぬ所の人であるが、其邸庭の狹いのには閉口する。吾は其庭内に久しく雞羣と相伍してゐるので、近頃では大分器量が低下したやうに思はれる。故郷は雲水遠く隔り、殆ど其の何處なるかを辨せぬ位である。籠の中に畜はれて七年にならうとは思ひもかけぬ所であつた。

立秋夕有レ懷夢得

露簟荻竹青。風扇蒲葵輕。
一與故人別。再見新蟬鳴。

立秋の夕夢得を懷ふあり

露簟は荻竹青く、風扇は蒲葵輕し。
一たび故人と別れ、再び新蟬の鳴くを見る。

是夕涼颸起。閒境入幽情。
廻燈見棲鶴。隔竹聞吹笙。
夜茶一兩杓。秋吟三數聲。
所思渺千里。雲水長洲城。

【字解】【一】夢得　劉禹錫、字は夢得。【二】露簟　露の降つたゴカムシロ。【三】蒲葵　草の名、之を編んで團扇にする。【四】故人　舊友。劉夢得を指す。【五】所レ思　吾が思ふ所の人、即ち劉夢得。【六】長洲　蘇州なり。時に劉夢得は蘇州刺史であつた。

【題義】立秋の晩に蘇州に居る劉禹錫を懷うて作つた詩である。

【詩意】露がおりて簟の荻や竹が青く涼しげに見え、風を送る蒲葵の團扇も輕い秋となつた。一たび君と別れてから早くも二年目の新秋を迎へたのである。今日は立秋だといふので吹く風も特に涼しく感ぜられ、閑靜な境地の感興を惹くことが一入深い。燈を廻らして塒についた鶴を見たり、竹藪の外から漏れる笙の音を聞いたりして、澁茶を啜り詩を吟じて、雲水千里を隔つる長洲城に居る君の下に遙に想を馳せてゐる。

哭崔常侍晦叔

頑賤一拳石。精珍百鍊金。

崔常侍晦叔を哭す

頑賤なり一拳の石、精珍なり百鍊の金。

名價既相遠。交分何其深。
中誠一以合。外物不能侵。
逶迤二十年。與世同浮沈。
晩有退閒約。白首歸雲林。
垂老忽相失。悲哉口語心。
春日嵩高陽。秋夜清洛陰。
丘園共誰卜。山水共誰尋。
風月共誰賞。詩篇共誰吟。
花開共誰看。酒熟共誰斟。
惠死莊杜口。鍾歿師廢琴。
道理使之然。從古非獨今。
吾道自此孤。我情安可任。
唯將病眼淚。一灑秋風襟。

名價既に相遠し、交分何ぞ其れ深き。
中誠一に以て合ふ、外物侵す能はず。
逶迤たり二十年、世と同じく浮沈す。
晩に退閒の約有り、白首雲林に歸る。
老に垂んとして忽ち相失ふ、悲い哉口に心を語る。
春日嵩高の陽、秋夜清洛の陰。
丘園誰と共にかトせん、山水誰と共にか尋ねん。
風月誰と共にか賞せん、詩篇誰と共にか吟せん。
花開くも誰と共にか看ん、酒熟するも誰と共にか斟まん。
惠死して莊口を杜ぢ、鍾歿して師琴を廢す。
道理之をして然らしむ、古より獨り今のみに非ず。
吾が道此より孤なり、我が情安んぞ任ふ可けん。
唯病眼の涙を將て、一たび秋風の襟に灑ぐ。

【字解】〔一〕一拳石　一個の石。中庸に今夫山、一拳石之多とある。樂天自ら喩ふ。〔二〕交分　交誼といふが如し。〔三〕中誠　心中の誠。〔四〕逶迤　引曳く貌。〔五〕退閒　官を退いて閑居すること。〔六〕嵩高　嵩山。〔七〕清洛　洛水。〔八〕惠死莊杜口　惠施が死んでからは莊周も相手がなくなつたので口を閉ぢて談論しない。〔九〕鍾歿師廢琴　鍾子期が死んでからは、よく其技を解してくれる者がないので、伯牙も琴を彈ぜぬやうになつた。

【題義】常侍は官名。崔玄亮、字は晦叔の死を哭した詩である。

【詩意】我は一個の頑石の如き取柄のない男で君は百錬の精金の如き傑士である。されば聲價は非常な相違であるが、どういふものか交誼が深く、よく心が一致和合して何物も侵害することが出來ず、二十年の間同じく相浮沈して來た。晩年になつたら官を退いて雲林の間に歸隱しようと約してゐたが、今老年に垂んとして君と死別し、獨り悲しく胸中の思を語るのみである。今後は春の日の嵩山の陽、秋の夜の洛水の陰、誰と共に丘園を卜し誰と共に山水を尋ねよう。風月を賞する相手もなく詩篇を吟ずる友もなく、花が咲いても酒が熟しても共に樂む人がなくなつてしまつた。昔惠施が死んでからは莊周は口を閉ぢて論せず、鍾子期が死んでからは伯牙は琴を彈かなかつたといふが、それは誠に道理である。昔から其通りで唯今に始まつたことではない。吾も共に道を樂む相手がなくなつて實に心細さを痛感し、病眼の涙をば秋風寒き襟に灑がざるを得ないのである。

新秋曉興

濁暑忽已退。清宵未全長。

新秋曉に興く

濁暑忽ち已に退き、清宵未だ全く長からず。

(一)晨缸耿殘焰。宿閣凝微香。
(二)喔喔雞下樹。輝輝日上梁。
枕低茵(三)席軟。臥穩身入牀。
睡足景猶早。起初風乍涼。
展張小屏障(四)。收拾生衣裳。
還有惆悵事。遲遲未能忘。
拂鏡梳白髮。可憐氷照霜。

【字解】【一】晨缸　朝まで殘る燈火。【二】喔喔　雞の鳴く聲。【三】茵席　しとね、寢臺の上の敷物。【四】小屏障　小屏風。【五】生衣裳　單衣、夏著。

【題義】新秋の時節に朝早く起きた情景を述べた詩である。

【詩意】夏の炎暑は已に退いたが、秋の夜長にはまだならない。夜が明けても殘燈の光尙ほ明かに、寢室には香のかをりがまだ漂つてゐる。曉を告ぐる雞も既に木から下り、日は輝輝として梁の上へまで昇つた。枕を低くして床上に横臥せる吾は、蒲團が軟なので身が寢臺の中まで落ち込みさうである。睡も足りたので少し早目に起きて見た所が、時節柄とて風の涼しきを感じた。因つて小屏風を立てまはし夏著を取片附けなどした。その外に悲むべき事件があつて、いつまでも心に懸つて忘れられない。そは他にあらず、鏡を拭つて髮を梳れば、氷の霜を照すが如く、憐れにも吾が白頭が鏡に寫つたことである。

秋日與張賓客舒著作同遊龍門醉中狂歌。凡二百三十八字

秋日張賓客・舒著作と同じく龍門に遊び、醉中狂歌す。凡て二百三十八字

秋天高高秋光清。
秋風嫋嫋秋蟲鳴。
嵩峯餘霞錦綺卷。
伊水細浪鱗甲生。
洛陽閒客知無數。
少出遊山多在城。
商嶺老人自追逐。
蓬丘逸士相逢迎。
南出鼎門十八里。

秋天高高として秋光清く、
秋風嫋嫋として秋蟲鳴く。
嵩峯の餘霞錦綺卷き、
伊水の細浪鱗甲生ず。
洛陽の閒客知んぬ無數、
出でて山に遊ぶこと少く多くは城に在り。
商嶺の老人自ら追逐し、
蓬丘の逸士相逢迎す。
南鼎門を出づること十八里、

【字解】【一】嵩峯　嵩山。洛陽の東南五十里に在る。【二】伊水　川の名。洛陽の附近に在る。【三】知　知らずの意。【四】商嶺老人　張賓客を指す。後集卷十二、早春招張賓客を見よ。【五】蓬丘逸士　舒著作を指す。【六】鼎門　洛陽の門の名。

莊店邐迤橋道平。
不寒不熱好時節。
鞍馬穩快衣衫輕。
竝轡踟躕下西岸。
扣舷容與遶中汀。
開懷曠達無所繫。
觸目勝絶不可名。
荷衰欲黄荇猶綠。
魚樂自躍鷗不驚。
翠藻蔓長孔雀尾。
彩船櫓急寒鴈聲。
家醞一壺白玉液。
野花數把黄金英。
晝遊四看西日暮。

莊店邐迤橋道平なり。
寒からず熱からず好時節、
鞍馬穩快衣衫輕し。
轡を竝べ踟躕して西岸より下り、
舷を扣き容與して中汀を遶る。
懷を開くこと曠達にして繫かる所無く、
目に觸るること勝絶にして名く可からず。
荷衰へて黄ならんと欲し荇は猶綠なり、
魚は樂みて自ら躍れども鷗は驚かず。
翠藻蔓長ず孔雀の尾、
彩船櫓急なり寒鴈の聲。
家醞一壺白玉の液、
野花數把黄金の英。
晝遊四たび西日の暮るるを看、

【七】邐迤　斜に續く貌。
【八】容與　徘徊といふが如し。
【九】荷　蓮の葉。荇は水草の名。
【一〇】家醞　手作りの酒。

夜話三及東方明。
暫停盃觴輟吟詠。
我有狂言君試聽。
丈夫一生有二志。
兼濟獨善難得并。
不能救療生民病。
卽須先濯塵土纓。
況吾頭白眼已暗。
終日戚促何所成。
不如展眉開口笑。
龍門醉臥香山行。

夜話三たび東方の明かなるに及ぶ。
暫く盃觴を停めて吟詠を輟めよ、
我に狂言有り君試に聽け。
丈夫一生に二志有り、
兼濟獨善得て并せ難し。
生民の病を救療する能はずんば、
卽ち須らく先づ塵土の纓を濯ふべし。
況んや吾頭白くして眼已に暗し、
終日戚促何の成す所あらん。
如かず眉を展べ口を開きて笑ひ、
龍門に醉臥して香山に行かんには。

【一一】丈夫　男子。二志とは兼れて天下の民を濟ふと、退いて獨り己の身を善くするとをいふ。
【一二】戚促　齷齪といふが如し。
【一三】香山　龍門山の東に在る。

【題義】秋、張賓客（賓客は官名、太子賓客なり）舒著作（著作は官名、著作郎か。舒は姓）と俱に龍門（洛陽の南に在る山の名、伊闕ともいふ）に遊び、醉うて狂歌した詩である。

【詩意】秋の空が高く澄み風そよぎ蟲鳴き、嵩山の霞は綺錦の卷くが如く、伊水の浪間には魚が躍つ

てゐる。洛陽には定めて無數の閑人が居るに相違ないが、出でて山に遊ぶ風流人は少く、多くは市中にくすぶつてゐる。吾は張賓客・舒著作と三人相攜へて、南の方鼎門を出づること十八里、人家の斜に連り道の平な處を進み行けば、熱からず寒からざる好時節で、馬の歩みも速に衣の袖も輕い。相俱に轡を竝べて西岸より下り、舟に棹して中汀を遶れば、氣も晴れ晴れとして心に繫る雲もなく、目に觸るる所皆名狀すべからざる絶景である。蓮の葉は既に枯れて黄色になつたが荇はまだ綠を漂はし、魚は樂んで躍れども鷗は驚かず、碧の藻は孔雀の尾のやうに長く伸び、櫓の音は雁の聲のやうに急である。白玉の液の如き酒を酌み、黄金の英の如き野花を把り、四日三晩遊び續けた。吾は杯を停め吟詠を輟めさせて兩人に向つて言つた。「男子の一生に二つの願がある。卽ち兼濟と獨善とである。併し此二つを兼ね行ふことは出來ないから、民の疾苦を救ひ天下を兼濟することが出來ないならば、須らく先づ塵に汙れた冠の纓を濯つて獨善の計を爲すがよい。況んや已に老境に入つて終日齷齪するとも何事も成すことは出來ないのであるから、愁眉を展べ口を開いて笑ひ、龍門山にでも香山にでも行樂醉臥するがよいのである」と。

(一)履信池櫻桃島上醉後走筆送別舒員外。

兼寄宗正李卿考功崔郎中

履信池の櫻桃島の上にて醉後筆を走らせて舒員外を送別し、兼ねて宗正李卿・考功崔郎中に寄す

櫻桃島前春。　　櫻桃島前の春、
去春花萬枝。　　去春花萬枝。
忽憶與宗卿閒飲日。　　忽ち憶ふ宗卿と閒飲せし日、
又憶與考功狂醉時。　　又憶ふ考功と狂醉せし時。
歲晚無花空有葉。　　歲晚れて花無く空しく葉有り、
風吹滿地乾重疊。　　風吹き地に滿ち乾きて重疊す。
蹋葉悲秋復憶春。　　葉を蹋み秋を悲み復春を憶ふ、
池邊樹下重殷勤。　　池邊の樹下重ねて殷勤。
今朝一酌臨寒水。　　今朝一たび酌みて寒水に臨む、
此地三回別故人。　　此地三回故人に別る。

【字解】【一】履信池　履信は長安の街名。そこに在る池の名であらう。櫻桃島は池中の島の名。

【二】殷勤　れんごろに思慕すること。

【三】故人　舊友。

櫻桃花來春千萬　櫻桃花は來春千萬朶、
朶。
來春共誰花下坐。　來春誰と共にか花下に坐せん。
不論崔李上青雲。　論せず崔・李の青雲に上るを、
明日舒三亦拋我。　明日舒三も亦我を拋たん。

【題義】履信池の櫻桃島の上で醉後筆を走らせて舒員外（舒は姓、員外は官名）を送別し、兼ねて宗正卿（皇族の事を掌る官名）李氏・考功郎中（官名）崔氏に寄せた詩である。

【詩意】この櫻桃島には過ぎし春の頃萬朶の花が咲いて、宗正卿と閑飲したり、考功郎中と狂醉したりしたものであつた。今や歳も晩れて花はなく空しく葉を留むるのみで、その葉も風に吹き落され乾枯らびて地に滿ちてゐる。その落葉を蹋み秋を悲むにつけても復春を憶ひ、池邊の樹下を思慕する情が深い。今朝も舒員外を送るについて酒を酌んで此池に臨んだが、ここは三たび舊友と別れる感慨に堪へない處である。（曾て宗正と別れ、考功郎中と別れ、今亦舒員外と別れる。）櫻桃の花は來年の春も千朶萬朶の花を開くであらうが、併し誰と共に花下に坐して其花を賞するであらう。崔郎中や李卿の高官に昇り去つたことは謂ふまでもなく、明日は舒三までも我を棄てて此地を去るのである。實に惜別の情に堪へないではないか。

【題】青雲　高位高官に譬ふ。
【題】舒三　舒員外なり。三は輩行。

秋池獨泛

蕭疎秋竹籬。清淺秋風池。　蕭疎なる秋竹の籬、清淺なる秋風の池。
一隻短舫艇。一張斑鹿皮。　一隻の短舫艇、一張の斑鹿皮。
皮上有野叟。手中持酒巵。　皮上に野叟有り、手中に酒巵を持つ。
半酣箕踞坐。自問身爲誰。　半酣にして箕踞して坐し、自ら問ふ身を誰とか爲す。
嚴子垂釣日。蘇門長嘯時。　嚴子釣を垂るる日、蘇門長く嘯く時。
悠然意自得。意外何人知。　悠然として意自得す、意外何人か知らん。

【字解】【一】蕭疎　さびしくまばらなこと。【二】舫艇　小舟。【三】斑鹿皮　まだらの鹿の皮の敷物。【四】酒巵　さかづき。【五】箕踞　兩足を伸ばして坐すること。【六】嚴子　後漢の嚴光、字は子陵、少き時光武と同じく遊學す。光武の位に即くや、名姓を變じ身を隱して見えず。帝物色して之を得、諫議大夫に除せしむ。就かず。富春山中に耕す。後人その釣處を名づけて嚴陵瀨といふ。【七】蘇門　山の名。晉の阮籍嘗て孫登を蘇門山に訪ふ。登言はず。籍因つて長嘯して退く。半嶺に至り聲あり鸞鳳の音の如く岩谷に響くを聞く。則ち登の嘯くなり。【八】悠然　おちつきて閑暇ある貌。

【題義】秋池上に舟を泛べて獨り樂んだ情味を述べた詩である。

【詩意】物淋しく疎な竹籬を遶らした中に水の澄んだ池がある。池上に一隻の小舟を泛べ、中に鹿の皮の敷物を敷き、一人の野老（樂天自ら謂ふ）が手に酒杯を持つて坐し、醉のまはるにつれて居ずまゐをくづし、兩足をなげ出して自問自答してゐる。一體俺は何人であるか。澤中に釣を垂れた嚴光か

蘂門山に長嘯した孫登にも比すべき者で、獨り心に樂を抱き、外人の窺ひ知る事の出來ぬものがある」と。

冬日早起閒詠

氷塘耀初旭。風竹飄餘霰。
幽境雖目前。不因閒不見。
晨起對爐香。道經尋兩卷。
晩坐拂琴塵。秋思彈一遍。
此外更無事。開樽時自勸。
何必東風來。一盃春上面。

【字解】【一】道經　老子道德經、上下二卷あり。【二】秋思　琴曲の名、一遍は一曲なり。【三】東風　春風。

【題義】冬朝早く起きて閒生活を敍した詩である。

【詩意】旭が氷のはりつめた池塘を照し、風にそよぐ竹からは殘りの霰がはらはらと落ちる。幽寂の境地が眼前に在つても閒情がなければ其味はわかならない。吾は朝は早く起きて香爐に對し、上下二卷の老子道德經を讀み、夕には琴上の塵を拂つて秋思の曲を彈ずるを常としてゐる。其外には此れといふ仕事もなく、時時樽を開いて自ら酒を酌んでゐる。たとひ東風は吹かずとも、酒さへ飲めば春色が顏に漲つて來る。

歲暮

慘澹歲云暮。窮陰動經旬。
霜風裂人面。冰雪摧車輪。
而我當是時。獨不知苦辛。
晨炊廩有米。夕爨厨有薪。
夾帽長覆耳。重裘寬裹身。
加之一盃酒。煦嫗如陽春。
洛城士與庶。比屋多飢貧。
何處爐有火。誰家甑無塵。
如我飽煖者。百人無一人。
安得不慙愧。放歌聊自陳。

歲暮

慘澹として歲云に暮れ、窮陰動もすれば旬を經。
霜風人面を裂き、冰雪車輪を摧く。
而も我是時に當り、獨り苦辛を知らず。
晨炊廩に米有り、夕爨厨に薪有り。
帽を夾みて長く耳を覆ひ、裘を重ねて寬く身を裹む。
加之一杯の酒、煦嫗たること陽春の如し。
洛城は士と庶と、比屋多く飢貧なり。
何の處にか爐に火有る、誰が家か甑に塵無き。
我の如く飽煖なる者、百人に一人も無し。
安んぞ慙愧せざるを得ん、放歌して聊か自ら陳ぶ。

【字解】【一】熙熙　暖かなこと。【二】洛城　洛陽の都。【三】比屋　かどなみ。戸ごとに。

【題義】歳暮の感を述べた詩である。

【詩意】淋しく歳が暮れ行き陰惨な天氣が十日も打續いてゐる。風は人の面を裂くばかりに寒く、氷雪は車輪を摧くほど堅くはりつめてゐる。かかる時節にも吾は何の苦もなく安らかに日を送り、米もあり薪もあつて活計に事缺かず、煖に著て酒さへ飲んでゐるので、その暖なことは春のやうである。顧つて思ふに洛陽の人は士人も庶民も多くは貧窮で、爐には火なく甑には塵が積り、俺のやうに飽食煖衣してゐる者は百人に一人もない。無能無才で此幸を得てゐるのは誠の慙愧に堪へない。因つて放歌高吟して此事を陳べる次第である。

南池早春有懐

朝遊北橋上。晩憩南塘畔。
西日雪全銷。東風氷盡泮。
篥篥魚尾掉。瞥瞥鵝毛換。
泥暖草芽生。沙虚泉脈散。
晴芳冒苔島。宿潤侵蒲岸。

南池の早春懐あり

朝に北橋の上に遊び、晩に南塘の畔に憩ふ。
西日雪全く銷え、東風氷盡く泮く。
篥篥として魚尾掉ひ、瞥瞥として鵝毛換はる。
泥暖にして草芽生じ、沙虚しくして泉脈散ず。
晴芳苔島を冒し、宿潤蒲岸を侵す。
洛下日初長。江南春欲半。
時光共抛擲。人事堪嗟歎。
倚棹忽尋思。去年池上伴。

【字解】【一】西日　夕日。【二】東風　春風。【三】篥篥　掉ふ貌。【四】瞥瞥　ちらちらする貌。【五】宿潤　久しきうるほひ。【六】洛下　洛陽。【七】時光　時節、光陰。章應物の詩に濟濟衆君子、高宴及三時光とある。

【題義】早春洛陽の南池に遊び懐ふ所を述べた詩である。

【詩意】朝に北橋の上に遊び夕に南池の邊に憩へば、日は西に傾いて雪全く消え、東風がそよそよと吹いて氷も盡く解けた。ちらちらと魚の尾の動くのや鵝鳥の去來するのも面白く、泥の暖な處に草の芽が生え、沙の軟な處を泉がちよろちよろと分流し、春の光が苔島を冒し、水の潤ひが蒲岸を侵して、今や洛陽の南池は日が永く春も半ならんとする好氣節である。ただ光陰の人を抛擲して冉冉と推移するのは悲嘆に堪へない。因つて棹に倚つて去年俱に此池上に遊んだ友の死を坐に追懐した。

古意

脈脈復脈脈。美人千里隔。
不見來幾時。瑤草三四碧。

古意

脈脈復脈脈、美人千里に隔たる。
見ざるより來た幾時ぞ、瑤草三四碧なり。

玉琴聲悄悄、鸞鏡塵羃羃。
昔爲連理枝。今作分飛翮。
寄書多不達。加飯終無益。
心腸不自寬。衣帶何由窄。

【字解】【一】 脈脈　情を含んで語らんと欲する貌。古詩十九首に脈脈不得語とある。【二】 美人　夫を指して言ふ。【三】 瑤草　玉の如く美しき草。【四】 悄悄　悲しげな貌。【五】 鑒鏡　鏡。羃羃は分布覆被の貌。【六】 加飯　摂生加養すること。

【題義】 古詩十九首などの風貌に模して作つた詩だから古意と題したので、夫に離れて寡居する妻の事を詠じたのである。

【詩意】 情を含んで語らんと欲するも吾が夫は遠く離れてゐて語ることは出來ない。一たび別れてから早くも三四年を經た。憂を霽らさうと琴を彈ずれば琴の音も悲しげに響き、身だしなみも怠りがちなので鏡には塵が積つてゐる。昔は連理の枝となつてゐたが、今は分れ飛ぶ鳥となつてしまつた。手紙をやつても多くは屆かず、思に瘠せる身を加養すれども其甲斐もない。心は常に憂へて寬からず、身は益〻瘠せて著物の身幅が廣くなるばかりである。

山遊示小妓

山に遊び小妓に示す

雙鬟垂未合。三十纔過半。
本是綺羅人。今爲山水伴。
春泉共揮弄。好樹同攀翫。
笑容花底迷。酒思風前亂。
紅凝舞袖急。黛慘歌聲緩。
莫唱楊柳枝。無腸與君斷。

【字解】【一】 雙鬟　わげ。頭髮を環して飾とせるもの。【二】 綺羅　あやぎぬ、うすぎぬ。【三】 楊柳枝　歌曲の名。

【題義】 俱に山に遊びて小妓に示した詩である。

【詩意】 お前は纔に年十五を過ぎた少女でまだ鬟を結ぶに堪へずして頭髮を垂れてゐる。もと綺羅を纏ふ身であるが今日は我に伴つて山水の遊をなし、俱に春泉を弄したり好樹に攀ぢたりして、花の下に笑ひさざめき、風に臨んで酒を酌み、紅袖を翻へして舞ひ、翠黛を傾けて歌ひなどしてゐる。併しどうぞ楊柳枝の曲を歌ふことはやめてくれ。お前に楊柳枝の曲を歌はれたら、吾が腸は爲に寸斷するであらうから。

神照禪師同宿

神照禪師と同宿す

格詩　山遊示小妓　神照禪師同宿

八年三月晦。山梨花滿枝。
龍門水西寺。夜與遠公期。
晏坐自相對。密語誰得知。
前後際斷處。一念不生時。

【字解】【一】八年　太和八年。【二】龍門　洛陽の南に在る山の名。【三】遠公　晉の高僧慧遠なり。僧侶を呼ぶには、名の上の一字を略し、公の字を添ふるを常とす。神照禪師に比す。期は會なり。【四】晏坐　安坐なり。【五】密語　佛教の祕密の宗旨を語り合ふこと。

【題義】神照禪師と俱に山寺に宿したことを述べた詩である。

【詩意】太和八年三月晦日の山梨の花が咲き滿ちてゐる時、龍門山の水西の寺に夜神照禪師と會宿した。靜に坐して佛教の祕密の宗旨を語り合へば、前後の差別も忘れ果て一念發動せず、誰あつて吾が心境を悟り得る者はあるまい。

張常侍相訪

西亭晚寂寞。鶯散柳陰繁。
水戸簾不卷。風牀席自翻。

張常侍相訪ふ

西亭晚に寂寞、鶯散じて柳陰繁し。
水戸簾卷かず、風牀席自ら翻る。

忽聞車馬客。來訪蓬蒿門。
況是張常侍。安得不開樽。

【字解】【一】蓬蒿門　茅屋といふが如し。

【題義】張常侍の來訪を喜んだことを述べた詩である。

【詩意】夕方になつて西亭のあたりが物淋しく、鶯も去つて徒に柳が茂つてゐる。水に枕んだ戸口の簾を卸せども、風が來て自づと席を吹き上げる。忽ち馬車を驅り吾が茅屋を訪れた客があると聞き、迎へて見れば張常侍であつた。こんな珍客の御入來とあつては、何はなくとも先づ一獻差上げずばなるまい。

忽ち聞く車馬の客、來り訪ふ蓬蒿の門。
況んや是れ張常侍、安んぞ樽を開かざるを得ん。

早夏遊宴

雖慵興猶在。雖老心猶健。
昨日山水遊。今朝花酒宴。
山榴艷似火。玉蘂飄如霰。
榮落逐瞬遷。炎涼隨刻變。
未收木綿褥。已動蒲葵扇。

早夏遊宴

慵しと雖も興猶在り、老いたりと雖も心猶健なり。
昨日は山水に遊び、今朝は花酒に宴す。
山榴は艷にして火に似たり、玉蘂は飄りて霰の如し。
榮落は瞬を逐ひて遷り、炎涼は刻に隨ひて變ず。
未だ木綿の褥を收めず、已に蒲葵の扇を動かせり。

且喜物與人。年年得相見。

且つ喜ぶ物と人と、年年相見るを得るを。

【字解】【一】山櫧　つつじの花。初夏に紅花を開く。【二】玉蘂　花の名。唐人甚だ此花を重んず。【三】蒲葵　草の名。之を編みて團扇を作る。

【題義】夏の初に遊宴したことを述べた詩である。

【詩意】老いて惰くはあれども心も健に感興も深いので、毎日のやうに山水の間に遊び花下に酒宴を張つて樂んでゐる。今や初夏のこととて躑躅の花は火の燃えるやうで、玉蘂の花は霰の散るやうである。花も瞬く間に或は榮え或は衰へて行くが、氣候の寒暖も刻刻に移り變つて、まだ木綿の褥を片附けないのに、はや蒲葵の扇を使つてゐる。それにしても吾が身はいつも達者で年年此等時節時節の物と相見るを得るのは誠に嬉しい。

感白蓮花

白白芙蓉花。本生吳江濱。
不與紅者雜。色類自區分。
誰移爾至此。姑蘇白使君。
初來苦顦顇。久乃芳氛氳。

白蓮花に感ず

白白たる芙蓉の花、本吳江の濱に生ず。
紅なる者と雜らず、色類自ら區分せり。
誰か爾を移して此に至らしむる、姑蘇の白使君。
初めて來るとき苦だ顦顇、久くして乃ち芳氛氳たり。
月月葉換葉。年年根生根。
陳根與故葉。銷化成泥塵。
化者日已遠。來者日復新。
一爲池中物。永別江南春。
忽想西涼州。中有天寶民。
埋沒漢父祖。孳生胡子孫。
已忘鄉土戀。豈念君親恩。
生人尚復爾。草木何足云。

月月に葉は葉を換へ、年年に根は根を生ず。
陳根と故葉と、銷化して泥塵と成る。
化する者は日に已に遠く、來る者は日に復新なり。
一たび池中の物と爲り、永く江南の春に別る。
忽ち想ふ西涼州、中に天寶の民有るを。
漢の父祖を埋沒して、胡の子孫を孳生す。
已に鄉土を戀ふを忘る、豈君親の恩を念はんや。
生人尚復爾り、草木何ぞ云ふに足らん。

【字解】【一】芙蓉花　蓮花をいふ。【二】姑蘇白使君　蘇州刺史白樂天。【三】顦顇　やせ衰へる。【四】氛氳　香氣の發散する貌。【五】陳根　古い根。故葉は古い葉。【六】西涼州　西方涼地の名。【七】天寶　唐の玄宗の年號。【八】胡　えびす。

【題義】この白蓮はもと吳江の濱に生じたもので、少しも紅の色などを雜へず、色合も種類も世の常のものとは全く別である。蘇州刺史白樂天が此地（洛陽なり）に移し植ゑたもので、初めは大分瘠せ枯れてゐたが今では生氣を回復して盛に香氣を放ち、もとの根や葉は迹形もなく消滅し、段段と新しい根や葉が代り、一たび此池に植ゑてからは永く江南の春に別れてしまつた。これについて思ひ當

ることは、西涼州には天寶の時代に移住した民があつて、今では漢人たる父祖は死亡し去り、胡人として子孫が殘つてゐるさうだが、已に故郷たる漢土を思慕する情もなく、君親の恩をも忘れてしまつたさうだ。人でさへ此通りであるから草木の昔を忘れるのは言ふまでもない。

詠所樂　樂む所を詠ず

獸樂在山谷。魚樂在陂池。
蟲樂在深草。鳥樂在高枝。
所樂雖不同。同歸適其宜。
不以彼易此。況論是與非。
而我何所樂。所樂在分司。
分司有何樂。樂哉人不知。
官優有祿料。職散無羈縻。
懶與道相近。鈍將閒自隨。
昨朝拜表廻。今晚行香歸。
歸來北窓下。解巾脫塵衣。
冷泉灌我頂。暖水濯四肢。
體中幸無疾。臥任清風吹。
心中又無事。坐任白日移。
或開書一篇。或引酒一巵。
但得如今日。終身無厭時。

獸の樂は山谷に在り、魚の樂は陂池に在り。
蟲の樂は深草に在り、鳥の樂は高枝に在り。
樂む所同じからずと雖も、同じく其の宜きに適するに歸す。
彼を以て此に易へず、況んや是と非とを論せんや。
而して我何の樂む所ぞ、樂む所は分司に在り。
分司何の樂有る、樂い哉人知らず。
官優にして祿料有り、職散にして羈縻無し。
懶は道と相近く、鈍は閒と自ら隨ふ。
昨朝表を拜して廻り、今晚香を行ひて歸る。
歸來北窓の下、巾を解きて塵衣を脫す。
冷泉我が頂に灌ぎ、暖水四肢を濯ふ。
體中幸に疾無し、臥して清風の吹くに任す。
心中又事無し、坐して白日の移るに任す。
或は書一篇を開き、或は酒一巵を引く。
但今日の如くなるを得ば、身を終るまで厭ふ時無し。

【字解】【一】陂池　池沼。【二】分司　官名。太子賓客東都分司。【三】羈縻　束縛なり。【四】拜表　上書すること。【五】行香　佛寺に參詣する。

【題義】己の樂む所を詠じた詩である。

【詩意】獸の樂は山谷に在り、魚の樂は池沼に在り、蟲の樂は草叢に在り、鳥の樂は高枝に在り。その樂は各〻異つてはゐるが其性の宜しきに適することは皆同じであつて、彼と此とを易へることは出來ない。まして孰か是に孰か非なるかを問ふべきではない。さて我の樂は何ぞと謂ふに、吾が樂は分司の職に在る。人は知るまいが分司の職は高い官職で俸祿もあり、閑散で何の束縛もない。されば吾が懶惰の性は道に近く、遲鈍の質は閒に適してゐる。かくて朝には章奏を上り夕には佛に禮し、北窓の下に歸り來れば頭巾や著物を脫ぎ捨て、頭から冷水をかぶり湯で手足を濯つて休

息する。幸に無病息災なので清風の吹くに任せて寐ね、心中何の思ひ累ふこともなく、坐して時の移るに任せ、或は書物を讀んだり酒を飲んだりして樂んでゐる。こんな生活が出來れば此れで一生を終るとも毛頭異存はない。

思舊

閒日一思舊。舊遊如目前。
再思今何在。零落歸下泉。
退之服硫黃。一病訖不痊。
微之鍊秋石。未老身溘然。
杜子得丹訣。終日斷腥羶。
崔君誇藥力。經冬不衣綿。
或疾或暴夭。悉不過中年。
唯予不服食。老命反遲延。
況在少壯時。亦爲嗜慾牽。
但耽葷與血。不識汞與鉛。
飢來呑熱物。渴來飲寒泉。
詩役五臟神。酒汨三丹田。
隨日合破壞。至今粗完全。
齒牙未缺落。肢體尙輕便。
已開第七秩。飽食仍安眠。
且進盃中物。其餘皆付天。

思舊

閒日一たび舊を思ふ、舊遊目前の如し。
再び思ふに今何に在る、零落下泉に歸せり。
退之は硫黃を服すれども、一たび病んで訖に痊えず。
微之は秋石を鍊りしも、未だ老いずして身溘然たり。
杜子は丹訣を得て、終日腥羶を斷つ。
崔君は藥力に誇り、冬を經て綿を衣ず。
或は疾み或は暴に夭し、悉く中年を過ぎず。
唯予服食せず、老命反つて遲延なり。
況んや少壯の時に在り、亦嗜慾の爲に牽かる。
但だ葷と血とに耽り、汞と鉛とを識らず。
飢ゑ來れば熱物を呑み、渴し來れば寒泉を飲む。
詩は五臟の神を役し、酒は三丹田を汨る。
日に隨ひて合に破壞すべし、今に至るまで粗完全なり。
齒牙未だ缺落せず、肢體尙輕便なり。
已に第七秩を開き、飽食仍安眠す。
且盃中の物を進め、其餘は皆天に付す。

【字解】【一】閒日　閒暇の日。【二】零落　死亡すること。下泉は黃泉。【三】退之　韓愈の字。【四】微之　元稹の字。【五】溘然　忽ち死すること。【六】丹訣　道家燒丹の法。【七】腥羶　なまぐさき肉類。【八】崔君　崔元亮であらう。【九】葷血　肉食すること。【一〇】汞鉛　汞は水銀。道家用ひて以て丹藥を鍊る。所謂鉛汞の術是れなり。【一一】三丹田　丹田に三あり。臍下に在る者を下丹田となし、心下に在る者を中丹田となし、兩眉間に在る者を上丹田となす。抱朴子に見ゆ。【一二】第七秩　六十より七十に至る十年。【一三】盃中物　酒なり。

【題義】舊を思ひて感ずる所を敍した詩である。

【詩意】暇な時に昔の事を回想すれば舊遊はまだ目の前にあるやうに思はれるが、さて當時倶に遊んだ友達を追想すれば、多くは黃泉の客となつてしまつた。韓愈は常に硫黃を服用してゐたが、一たび

病んで終に癒えず、元稹は秋石を錬つて服用したが、老年にもならないうちに忽ち死んでしまひ、杜子は燒丹の法を得て肉食を廢し、崔君は藥力に誇つて冬でも綿を著なかつたが、一は疾み一は暴に夭死して、俱に中年を越すことは出來なかつた。ただ予は服藥などはしなかつたが反つて今日まで生き延びてゐる。況んや血氣の頃は嗜慾に牽かれて肉食に耽り、仙藥を錬ることなどは全く識らず、飢ゑれば熱い物でも構はずに食ひ、喉がかわけば寒泉でも何でも飲み、詩を作る爲に五臟の神を勞らし、酒の爲に丹田を害した。されば程なく身を傷ふべき筈であるのに、今日まで殆ど完全で、齒も缺けなければ肢體も自由で、六十の坂を越しても、ウンと食つてグッスリ眠る。おまけに神酒をあげて其他の萬事は一切天に任せて置く。

寄盧少尹

老誨心不亂。莊戒形太勞。
生命既能保。死籍亦可逃。
嘉肴與旨酒。信是腐腸膏。
艷聲與麗色。眞爲伐性刀。

盧少尹に寄す

老は心の亂れざるを誨へ、莊は形の太だ勞するを戒む。
生命既に能く保たば、死籍も亦逃る可し。
嘉肴と旨酒とは、信に是れ腸を腐する膏なり。
艷聲と麗色とは、眞に性を伐る刀たり。

補養在積功。如裘集衆毛。
將欲致千里。不得差一毫。
心不亂。形太勞。至差一卷。皆出老莊及諸道書仙方雜誡。

補養は功を積むに在り、裘の衆毛を集むるが如し。
將に千里を致さんと欲せば、一毫を差ふを得ず。

顏回何爲者。簞瓢纔自給。
肥醲不到口。年不登三十。
張蒼何爲者。染愛浩無際。
妾媵塡後房。竟壽百餘歲。
蒼壽有何德。回夭有何辜。
誰謂具聖體。不如肥瓠軀。
遂使世俗心。多疑仙道書。
寄問盧先生。此理當何如。

顏回は何爲る者ぞ、簞瓢纔に自ら給す。
肥醲口に到らず、年は三十に登らず。
張蒼は何爲る者ぞ、染愛浩として際無し。
妾媵後房に塡ち、竟に壽百餘歲。
蒼の壽きこと何の德か有る、回の夭すること何の辜か有る。
誰か謂ふ聖體を具ふと、肥瓠の軀に如かず。
遂に世俗の心をして、多く仙道の書を疑はしむ。
盧先生に寄せ問ふ、此理當に何如なるべき。

【字解】【一】老　老子。【二】莊　莊子。【三】死籍　死人を登錄する帳簿。【四】伐性　壽命を斷つ。【五】草瓢　論語に、子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在二陋巷一、人不レ堪二其憂一、回也不レ改二其樂一、賢哉回也とある。【六】肥醲　肥肉美酒。【七】張蒼　漢の文帝の時丞相たること十餘年なり。【八】妾媵　妾婢。後房は婦人の居る處。【九】具二聖體一　孟子公孫丑上篇に子夏、子游、子張、皆有二聖人之一體一、冉牛、閔子、顏淵、則具レ體而微とある。【一〇】肥瓠　大きなヒサゴ。【一一】寄問　此詩を寄せて質

問する。

【題義】盧少尹（一に盧少卿に作る）に寄せた詩である。

【詩意】老子は心の亂れざることを誨へ、莊子は身を勞することを戒め、「身を大切にして生命を保てば死を免れることも出來る。佳肴と美酒とは人の腸を腐らす膏であつて、聲のよい美人は人の壽命を斷つ刀である。身心の補養は永く功を積むに在る、丁度衆毛を集めて裘を成すと同じである。されば長壽を保たんと欲する者は一毫も此敎に差ふべからず」などと誨へてゐる。さて彼の顏回は如何にと謂ふに、一簞の食と一瓢の水とで飢を凌ぎ、肥肉を食ひ美酒を飲むなどいふことは全くなかつた。然るに三十にもならずに夭死したではないか。張蒼は如何にと謂ふに、愛慾の念の強い男で妾婢が後房に滿つるほどであつたが、百餘歲の長壽を保つた。一體張蒼は何德があつて長壽を保ち、顏回は何辜があつて夭死したのであらう。孟子は顏回をほめて聖人の體を具ふなどと謂つてゐるが、あんな生き方は大きな瓠にも劣るではないか。こんな譯で仙道の書などに說き立ててゐる所は少しもあてにならないから、遂に世人をして疑惑を抱かしめるのである。因つて此は如何なる道理に由るのか、此詩を寄せて盧先生にお尋ね申す。

池上清晨候皇甫郎中

池上清晨、皇甫郎中を候す

曉景麗未熱。晨飈鮮且涼。
曉景麗にして未だ熱からず、晨飈鮮にして且つ涼し。

池幽綠蘋合。霜潔白蓮香。
池幽にして綠蘋合ひ、霜潔くして白蓮香し。

深掃竹間逕。靜拂松下牀。
深く竹間の逕を掃ひ、靜に松下の牀を拂ふ。

玉柄鶴翎扇。銀甕雲母漿。
玉柄鶴翎の扇、銀甕雲母の漿。

屏除無俗物。瞻望唯清光。
屏除して俗物無し、瞻望唯清光。

何人擬相訪。嬴女從蕭郎。
何人か相訪はんと擬する、嬴女蕭郎に從ふ。

【字解】【一】晨飈　曉風。【二】鶴翎　鶴の羽。【三】銀甕　銀の瓶。雲母漿は飲物の名。侍兒小名錄に見ゆ。【四】屏除　除き去る。【五】清光　皇甫郎中の淸らかな姿。【六】嬴女　秦の穆公の女弄玉。蕭郎は蕭史なり。よく簫を吹き鳳鳴をなす。穆公弄玉を以て之に妻はす。遂に弄玉に簫を吹くことを敎ふ。後弄玉は鳳に乘り、蕭史は龍に乘りて飛昇し去る。事、列仙傳に見ゆ。ここは蕭郎を皇甫郎中に比したのである。

【題義】池上の曉に皇甫郎中（後集卷一の皇甫賓客と同一人で、皇甫は姓、名は湜、輩行は七、賓客及び郎中は官名）を訪うた詩である。

【詩意】曉景麗しくして未だ熱からず、風も涼しい。池には綠蘋が茂り合ひ霜の如く潔白な蓮花が香氣を放つてゐる。皇甫郎中は竹間の逕を掃ひ淸め、松下の牀の塵を拂つて、玉の柄の鶴の羽で作つた扇を持ち、銀瓶の雲母漿を飲んでゐる。身のまはりの俗物は盡く除き去つてあるから、遮る物もな

く郎中の高潔な容姿を仰ぎ望むことが出來る。何人が郎中を訪ひ來るのみであらう。恐らく弄玉のやうな仙女が訪ひ來るのみであらう。

詠懷

我知世如幻。了無干世意。
世知我無堪。亦無責我事。
由茲兩相忘。因得長自遂。
自遂意何如。閒官在閒地。
閒地唯東都。東都少名利。
閒官是賓客。賓客無牽累。
嵇康日日懶。畢卓時時醉。
酒肆夜深歸。僧房日高睡。
形安不勞苦。神泰無憂畏。
從官三十年。無如今氣味。
鴻雖脫羅弋。鶴尚居祿位。
唯此未忘懷。有時猶內愧。

詠懷

我は世の幻の如くなるを知り、了に世に干むる意無し。
世我が堪ふる無きを知り、亦我を責むる事無し。
茲に由りて兩ながら相忘れ、因りて長く自ら遂ぐるを得たり。
自ら遂ぐる意何如、閒官にして閒地に在り。
閒地は唯東都、東都は名利少し。
閒官は是れ賓客、賓客は牽累無し。
嵇康日日懶く、畢卓時時醉へり。
酒肆より夜深けて歸り、僧房に日高けて睡る。
形安くして勞苦せず、神泰にして憂畏無し。
官に從ふこと三十年、今の氣味に如くもの無し。
鴻は羅弋を脫すと雖も、鶴は尚祿位に居る。
唯此れ未だ懷に忘れず、時有りて猶內に愧づ。

【字解】【一】東都　洛陽。【二】賓客　官名。太子賓客なり。【三】嵇康　三國魏の人。丰姿俊邁にして、嘯むる時は孤松の獨立するが如く、醉へば玉山の將に頹れんとするが如し。氣を導き性を養ひ養生篇を著せり。中散大夫に拜せらるれども就かず、常に琴を彈じて自ら樂む。樂天自ら比して謂ふ。【四】畢卓　晉の人。吏部郎となる。常に酒を飲みて職を廢す。比舍の酒釀熟す。卓盜んで之を飲む。樂天自ら比して謂ふ。【五】酒肆　酒屋。【六】羅弋　網と、いぐるみの矢。【七】祿位　左傳に衛懿公好鶴、鶴有乘軒者、注に軒は大夫の車とある。樂天自ら鶴に比し、幸に祿位を得たるを謂ふ。

【題義】胸中の感懷を詠じた詩である。

【詩意】我は世の夢幻に同じきを知れる故、敢て世に求むる所はない。世も亦我の堪ふる所にあらざるを知れる故、何も我に要求する事はない。因つて世と我と相忘れ、遂に己の個性を滿足させることが出來た。個性を滿足させるとは何事ぞと謂ふに、閒散の官を得て閒地に居ることである。洛陽は名利の少い閒地で、太子賓客は束縛のない閒官である。かくて嵇康のやうに毎日ぶらぶらして、畢卓のやうに時時醉ひ、夜深に酒屋から歸つて日の高く昇るまで僧房に睡り、身心俱に勞苦もなければ憂畏もない。官に就いてから三十年になるが今ほど氣樂なことは嘗てなかつた。恰も網を逃れた鴻の如く祿位を得た鶴の如き境界である。併し未だ全く祿位の念を忘れぬことは、自ら省みて窃に愧づる所である。

北窓三友

今日北窓下。自問何所爲。
欣然得三友。三友者爲誰。
琴罷輒舉酒。酒罷輒吟詩。
三友遞相引。循環無已時。
一彈愜中心。一詠暢四肢。
猶恐中有間。以醉彌縫之。
豈獨吾拙好。古人多若斯。
嗜詩有淵明。嗜琴有啓期。
嗜酒有伯倫。三人皆吾師。
或乏儋石儲。或穿帶索衣。
絃歌復觴詠。樂道知所歸。
三師去已遠。高風不可追。
三友游甚熟。無日不相隨。

北窓の三友

今日北窓の下、自ら問ふ何の爲す所ぞ。
欣然として三友を得たり、三友は誰とか爲す。
琴罷みて輒ち酒を擧げ、酒罷みて輒ち詩を吟ず。
三友遞に相引き、循環して已む時無し。
一彈中心に愜ひ、一詠四肢を暢ぶ。
猶中に間有らんことを恐れ、醉を以て之を彌縫す。
豈獨り吾のみ拙にして好むならんや、古人も多く斯の若し。
詩を嗜む淵明有り、琴を嗜む啓期有り。
酒を嗜む伯倫有り、三人皆吾が師なり。
或は儋石の儲に乏しく、或は帶索の衣を穿つ。
絃歌して復觴詠し、道を樂みて歸する所を知る。
三師去ること已に遠し、高風追ふ可からず。
三友游甚だ熟し、日として相隨はざるは無し。

左擲白玉巵。右拂黃金徽。
興酣不疊紙。走筆操狂詞。
誰能持此詞。爲我謝親知。
縱未以爲是。豈以我爲非。

【字解】【一】四肢　手足。【二】彌縫　間隙をうめあはせること。【三】啓期　榮啓期なり。列子天瑞篇に孔子遊二於太山一、見二榮啓期鹿裘帶索、鼓琴而歌一云云とある。【四】伯倫　晉の劉伶、字は伯倫、酒を嗜にして放逸なり。嘗て酒德頌を著せり。【五】三人皆吾師　論語に三人行必有二我師一焉とある。【六】儋石儲　少しの米のたくはへ。【七】帶索　なはを帶にすること。【八】徽　琴の音の高下を定むる標識の處。【九】親知　親交ある友。

【題義】北窓の三友、卽ち琴と酒と詩とに親んで自ら樂むことを述べた詩である。

【詩意】今日北窓の下に何を爲しつつあるかと問はば、欣然として三友を得たりと答ふるであらう。三友とは誰ぞ。琴と酒と詩とである。三友遞に相引き循環して已む時はない。一たび琴を彈じて心に愜へば、一たび詩を詠じて四肢を暢ばし、その間に隙の生ずるを恐れて酒を以てうめあはせる。僕のやうな愚拙の身を以て此三者を好むのは怪しからぬといふ非難もあるかも知れぬが、此三者を好むのは僕ばかりではない。古人も多くはさうであつた。詩を嗜めるには陶淵明があり、琴を嗜めるには榮啓期があり、酒を嗜めるには劉伶があつた。此三人は皆吾が師である。何れも貧にして儋石の儲もなく、索の帶をしめてゐたが絃歌觴詠して道を樂んでゐた。三師已に沒して其高風は復伺ふことは

出來ない。然し三友と我とは日増しに親交を加へて一日として離れることはない。左に白玉の杯を掉ひ、右に黄金の琴徽を拂ひ、興酣なるに至れば紙を疊まずに筆を走らせて狂詞を書く。此詩を持つて行つて我が親交ある友に示さば、たとひ之を是とせずとも別に非ともせぬであらう。

吟四雖　雜言

酒酣後。歌歇時。
請君添一酌。聽我吟四雖。
年雖老。猶少於韋長史。
命雖薄。猶勝於鄭長水。
眼雖病。猶明於徐郎中。
家雖貧。猶富於郭庶子。
省躬審分何僥倖。
値酒逢歌且歡喜。
忘榮知足委天和。
亦應得盡生生理。

四雖を吟ず　雜言

酒酣なる後、歌歇む時。
請ふ君一酌を添へ、我が四雖を吟ずるを聽け。
年老いたりと雖も、猶韋長史より少く、
命薄しと雖も、猶鄭長水より勝れり。
眼病めりと雖も、猶徐郎中より明かに、
家貧しと雖も、猶郭庶子より富めり。
躬を省み分を審にするに何ぞ僥倖なる、
酒に値ひ歌に逢ひては且つ歡喜す。
榮を忘れ足るを知りて天和に委す、
亦應に生生の理を盡すを得べし。

【語義】老いたりと雖も、命薄しと雖も、眼病めりと雖も、家貧しと雖もの四件を詠じた詩である。

【詩意】酒酣に歌罷む時、願はくは更に我に一杯の酒を勸め、我が四雖の吟を聽き給へ。我は年老いたりと雖も韋長史よりは少く、運拙なしと雖も鄭長水より勝り、眼を病むと雖も徐郎中よりも明かに、家貧しと雖も郭庶子より富んでゐる。我が身を省み、我が分を審にするに、實に我の僥倖なことがわかる。酒に値ひ歌に逢へば則ち歡喜し、榮を忘れ足るを知つて天命に任せてゐる。結句これで天地生生の理を全うすることが出來てゐる。

分司同官中、韋長史續、年七十餘。郭庶子求、貧苦最甚。徐郎中晦、因病疾衰明。余爲河南尹時、見同年郭倉始授長水縣令。因歎四子而成此篇也。

裴侍中晉公以集賢林亭卽事詩二十六韻見贈。猥蒙徵和。才拙詞繁。輒廣爲五百言以伸酬獻

裴侍中晉公、集賢林亭卽事の詩二十六韻を以て贈られ、猥りに和を徵せらる。
才拙く詞繁く、輒ち廣めて五百言となし、以て酬獻を伸ぶ

三江路千里。五湖天一涯。
何如集賢第。中有平津池。
池勝主見覺。景新人未知。

三江路千里、五湖天の一涯。
何ぞ如かん集賢の第、中に平津池有るに。
池勝れて主覺られ、景新にして人未だ知らず。

竹森翠琅玕。水深洞琉璃。
水竹以爲質。質立而文隨。
文之者何人。公來親指麾。
疏鑿出人意。結構得地宜。
虛襟一搜索。勝槩無遁遺。
因下張沼沚。依高築階基。
嵩峯見數片。伊水分一支。
南溪修且直。長波碧逶迤。
北館壯復麗。倒影紅參差。
東島號晨光。杲曜迎朝曦。
西嶺名夕陽。杳曖留落暉。
前有水心亭。動蕩架漣漪。
後有開闔堂。寒溫變天時。
幽泉鏡泓澄。怪石山欹危。

竹森として翠琅玕、水深くして洞琉璃。
水竹以て質と爲す、質立ちて文隨ふ。
之を文にする者は何人ぞ、公來りて親ら指麾す。
疏鑿人意に出で、結構地の宜しきを得たり。
虛襟一たび搜索し、勝槩遁れ遺す無し。
下きに因りて沼沚を張り、高きに依りて階基を築く。
嵩峯數片を見、伊水一支を分つ。
南溪修くして且直く、長波碧逶迤たり。
北館壯にして復麗はし、倒影紅にして參差たり。
東島を晨光と號し、杲曜朝曦を迎ふ。
西嶺を夕陽と名け、杳曖にして落暉を留む。
前に水心亭有り、動蕩して漣漪に架す。
後に開闔堂有り、寒溫天時を變ず。
幽泉は鏡泓澄し、怪石は山欹危なり。

已上八所、各具二本名。

春葩雪漠漠。謂二杏花一。
夏果珠離離。謂二櫻桃一。
主人命方舟。宛在水中坻。
親賓次第至。酒樂前後施。
解纜始登汎。山遊仍水嬉。
沿洄無滯礙。向背窮幽奇。
瞥過遠橋下。飄旋深淵陲。
管絃去縹緲。羅綺來霏微。
棹風逐舞廻。梁塵隨歌飛。
宴餘日云暮。醉客未放歸。
高聲索彩牋。大笑催金巵。
唱和筆走疾。問答盃行遲。
一詠清兩耳。一酣暢四肢。

春葩は雪漠漠、
夏果は珠離離。
主人命じて舟を方べ、宛として水中の坻に在り。
親賓次第に至り、酒樂前後に施す。
纜を解きて始めて登り汎ぶ、山に遊びて仍ほ水に嬉む。
沿洄して滯礙無し、向背して幽奇を窮む。
瞥として遠橋の下を過ぎ、飄として深淵の陲を旋る。
管絃去りて縹緲、羅綺來りて霏微。
棹風舞を逐ひて廻り、梁塵歌に隨ひて飛ぶ。
宴餘日云に暮るるも、醉客未だ歸るを放さず。
高聲に彩牋を索め、大笑して金巵を催す。
唱和して筆走ること疾く、問答して盃行ること遲し。
一詠兩耳を清くし、一酣四肢を暢ぶ。

主客忘貴賤。不知俱是誰。
客有詩魔者。吟哦不知疲。
乞公殘紙墨。一掃狂歌詞。
維云社稷臣。赫赫文武姿。
十授丞相印。五建大將旗。
四朝致勛華。一身冠皐夔。
去年才七十。決赴懸車期。
公志不可奪。君恩亦難違。
從容就中道。俛僶來保釐。
貂蟬雖未脫。鸞鳳已不羈。
歷徵今與古。獨步無等夷。
陸賈功業少。二疏官秩卑。
乘舟范蠡懼。辟穀留侯飢。
豈若公今日。身安家國肥。

主客忘貴賤を忘る、知らず俱に是れ誰ぞ。
客に詩魔と云ふ者有り、吟哦して疲るるを知らず。
公の殘紙墨を乞ひ、狂歌詞を一掃す。
維れ云に社稷の臣、赫赫たる文武の姿。
十たび丞相の印を授けられ、五たび大將の旗を建つ。
四朝勛華を致し、一身皐夔に冠たり。
去年才に七十、決して懸車の期に赴けり。
公の志奪ふ可からず、君恩亦違ひ難し。
從容として中道に就き、俛僶として來りて保釐す。
貂蟬未だ脫せずと雖も、鸞鳳已に羈されず。
歷徵今と古と、獨歩して等夷無し。
陸賈は功業少く、二疏は官秩卑し。
舟に乘りて范蠡懼れ、穀を辟けて留侯飢う。
豈若かんや公の今日、身安くして家國肥ゆるに。

羊祜在漢南。空留峴首碑。
柳惲在江南。祇賦汀洲詩。
謝安入東山。但說攜蛾眉。
山簡醉高陽。唯聞倒接䍦。
豈如公今日。餘力兼有之。
願公壽如山。安樂長在茲。
願我比蒲稗。永得相因依。

謝靈運詩云、蒲稗相因依。

羊祜は漢南に在り、空しく峴首の碑を留む。
柳惲は江南に在り、祇汀洲の詩を賦す。
謝安は東山に入り、但蛾眉を攜ふるを說く。
山簡は高陽に醉ひ、唯接䍦を倒にするを聞く。
豈如かんや公の今日、餘力兼ねて之れ有るには。
願はくは公の壽山の如く、安樂にして長く茲に在らんことを。
願はくは我蒲稗に比し、永く相因り依るを得んことを。

【字解】【一】三江　吳淞江、婁江、東江をいふ。其他異說紛紛たり。【二】五湖　太湖をいふ。異說多し。【三】集賢　洛陽の里名。第は邸なり。【四】琅玕　石の玉に似たるもの。【五】琉璃　寶物の名。【六】勝槃　すぐれた景色。【七】嵩峯　嵩山の峯。【八】伊水　洛陽の附近を流るる川の名。【九】逶迤　斜に流るる貌。【一〇】參差　齊一ならざる貌。【一一】杲曜　明なる貌。朝曦は旭日。【一二】杳靄　小晴き貌。暮暉は夕日。【一三】漣漪　さざなみ。【一四】春葩　春の花。漠漠は廣き貌。【一五】離離　列る貌。【一六】宛　曲折に隨つて宛轉する貌。坻は小洲。【一七】羅綺　薄絹をまとへる美人。霏微は去來する貌。【一八】樂廉　文選注に、李善曰、七略曰、漢興、魯人虞公善雅歌、發聲震動梁上塵とある。【一九】彩牋　彩色ぜる紙。【二〇】金巵　黃金の杯。【二一】一掃　書きなぐる。【二二】社稷臣　國家の重臣。夔度を指して言ふ。【二三】勛華　勛榮。【二四】皐夔　舜の時の大臣、皐陶及び夔。【二五】懸車　致仕すること。【二六】違　違ひ難し。【二七】俛僶　勉むる貌。保釐は書經畢命篇に命二畢公一保二釐東郊一とある。安んじ治むること。【二八】貂蟬　侍中のかぶる冠。【二九】鸞鳳　英俊に喩ふ。ここは夔度に喩ふ。【三〇】等夷　匹敵す

る者。【三一】陸賈　漢の高祖の臣。【三二】二疎　漢の疎廣・疎受、太子大傅たりしも一旦年七十に滿てるを以て、官を辭して鄉に歸る。【三三】留侯　漢の張良、留に封ぜらる。晩年穀を避けて仙を學ぶ。【三四】峴首　山の名。【三五】蛾眉　美人。【三六】接䍦　白帽なり。山簡襄陽を鎮せし時、兒童歌つて曰く、倒著二白接䍦一舉レ鞭向二葛疆一と。

【題義】侍中は官名。裴晉公は晉國公裴度である。裴度は晩年洛陽の集賢里に邸宅を構へた。此詩は其の林亭卽事と題する、二十六韻五十二句の詩を樂天に贈り、和韻を求めたので、其れに酬いたのである。

【詩意】三江や五湖は、風景は美しからうけれども、惜しいかな天涯千里の外に在る。されば洛陽の集賢里の邸中に在る平津池の、近くして景色のよいのには及ぶまい。此池の勝概をば主人公（裴度を指す）は早く覺られたが世人は未だ知らない。竹が林立して翠琅玕の立てるが如く、水は深くして琉璃の洞のやうである。水と竹とが此園庭の質で、此に樣樣の文飾が施してある。その文飾は總て主人公が親ら指揮してさせたもので、疏鑿は人の意表に出で、結構は地形の宜しきに叶ひ、すべての勝概が遺憾なく現れてゐる。低い處には沼を掘り高い處には階基を築き、階に登れば嵩山數片の峯を望むべく、沼は伊水を分けて引いたものである。南方の溪は碧波を湛へて長く且直く、北方の館は紅の影を倒に水にうつしてちらついてゐる。東方の島は晨光と名づけられ、旭日を迎ふるに宜しく、西方の嶺は夕陽と名づけられ、夕日を留むるに宜しい。前には水心と名づくる亭があつて蓮の間に架せられ、後には開園と名づくる堂があつて寒溫氣候を異にする。幽泉は鏡の如く澄み、怪石は山の如く峙ち、春は花が咲き滿ちて一面に雪が積つたやうに見え、夏は果實が珠を連ねたやうになる。（以上は林亭結構の勝を詳敍したのである。）主人公は此池に舟を泛べ、水中の小坻に宴飲を張らしめたので、賓客が續續と來り會し、酒と音樂とが前後に設けられ、山に登つたり水に泛んだりして各〻樂を盡した。忽ち遠橋の下を過ぎ、速に深淵の陲を旋り、少しも滯礙する所なく向背して幽奇を窮めた。管絃の聲は縹緲として去り、綺羅を纏へる美妓は靡微として去來し、舞ふ者あり歌ふ者あり、日が暮れ客が醉うてもまだ歸さないので、高聲に彩牋を求むる者あり、大笑して玉杯を勸むる者あり、唱和して筆を走らす者もあれば、推問答して一向杯をささない者もある。詩を吟じて兩耳を淸め、酣醉して四肢を暢べ、主人も客も身分の貴賤を忘れ、自他を忘れて有頂天になつてゐる。（以上は宴飲の樂を極言したのである。）客の中に一人の詩魔（樂天自ら謂ふ）がゐて、詩を吟じて疲るるを知らず、主人公の殘りの紙と墨とを乞うて狂詞を書きなぐつた。また此主人公は所謂社稷の臣で、文武の才を兼ね、十たび丞相に任ぜられ五たび大將を命ぜられ、四朝（憲宗、穆宗、敬宗、文宗）に歷仕して勳功を立て、公卿の首位に居たが、去年七十になつたので致仕の志を決した。天子の强ひて引き留めようとせられる恩命默し難く、公の志も固くして奪ふことが出來なかつた。因つて中道を取り東都留守となつて洛陽に來た。未だ貂蟬を脫するには至らなかつたが、併し職責係累はなくなつた。（以上は自己と主人とを併せ敍したのである。）此の如き偉人は古來の歷史に徵するも、殆ど其匹儔を見ない。陸賈は功績が少く、二疏は官位が卑く、范蠡は禍の及ばんことを懼れて舟に乘つて去り、張良は

穀を辟けて飢ゑた。皆公に比すべくもない。晉の羊祜は漢水の南の襄陽を鎮し、民の敬慕する所となつて、峴山に碑を建てられ、梁の柳惲は吳興の太守となり、吏民の懷く所となつたが、ただ、汀洲採蘋・白蘋・日煖江南春の詩を賦した。謝安は東山に隱居し毎に妓を以て隨へた。晉の山簡は征南將軍となり襄陽を鎮せし時、屢〻高陽池に遊んだが、唯醉うて白帽を倒にかぶつたと謂はれてゐる。いづれも裴公の今日餘力を以て此樂を兼有するには及ばない。（以上古人を歷擧して陪襯とした。）願はくは公の壽山の崩れざるが如く、安樂にして長く此に在り、我は蒲稗の如くに其れに依託してゐたいものである。（祝頌の意を以て結んだ。）

晚歸香山寺因詠所懷

晚に香山寺に歸り因つて所懷を詠ず

我年日已老。我身日已閒。
我が年は日に已に老い、我が身は日に已に閒なり。
閒出都門望。但見水與山。
閒に都門を出でて望めば、但水と山とを見る。
關塞碧巖巖。伊流清潺潺。
關塞は碧にして巖巖、伊流は清くして潺潺。
中有古精舍。軒戶無扃關。
中に古精舍有り、軒戶に扃關無し。
岸草歇可藉。逕蘿行可攀。
岸草は歇ひて藉く可く、逕蘿は行きて攀づ可し。
朝隨浮雲出。夕與飛鳥還。
朝には浮雲に隨ひて出で、夕には飛鳥と還る。
吾道本迂拙。世途多險艱。
吾が道本迂拙、世途險艱多し。
嘗聞嵇呂輩。尤悔生疎頑。
嘗て聞く嵇呂が輩、尤悔疏頑より生ず。
巢悟入箕潁。皓知返商巔。
巢は悟りて箕潁に入り、皓は商巔に返るを知る。
豈唯樂肥遯。聊復祛憂患。
豈唯肥遯を樂むのみならんや、聊か復憂患を祛る。
吾亦從此去。終老伊嵩間。
吾も亦此れより去り、伊嵩の間に終老せん。

【字解】【一】伊流　伊水の流。【二】古精舍　古寺。【三】扃關　とじまり。【四】嵇呂　嵇は嵇康。呂は呂安。嵇康は三國魏の人、景元中司馬昭の害する所となる。呂安は嵇康と友として善し、一たび相思ふ毎に千里駕を命ず。亦司馬昭の殺す所となる。【五】尤悔　他人のとがめ、己の後悔。【六】巢　巢父。堯の時の高士。山居して世利を營まず。堯天下を讓れども受けず。箕潁は高士傳に許由聞堯致天下而讓焉、乃退而遁於中嶽、潁水之陽、箕山之下とある。されば箕潁に入りしは、許由にして巢父にあらず。【七】皓　商山の四皓とて秦の時商山に隱居せし四人の高士。【八】肥遯　隱居なり。易に肥遯无不利とある。【九】伊嵩　洛陽の附近に在る山と川。

【題義】日暮に香山寺に歸り感懷を述べた詩である。

【詩意】年を取るに隨つて身に暇が多くなつたので、暇を見ては都門を出て山水の間に遊んでゐる。仰いで關山を望めば碧巖巖として聳え、俯して伊水を見れば清潺潺として流れてゐる。其中に戶締もしてない古寺がある。岸の草は藉いて憩ふべく、逕の蘿は攀ぢて登るべし。因つて予は屢〻此山に遊んで留宿し、朝には浮雲と俱に此寺を出で、夕には飛鳥と共に此寺に還る。予は本來迂拙の性である

から、世路の險艱が殊に多い。聞けば嵇康や呂安が尤悔に遇うたのも疎頑の性の致す所なさうだ。故に巢父は之を悟つて箕穎に隱れ、四皓は商山に隱れたのである。必ずしも隱遁を好んだからではない。一つには身の憂患を除く爲である。されば予も此より去つて伊嵩の間に身を終らうと思ふ。

張常侍池涼夜閒讌贈諸公

張常侍の池に涼夜閒讌し諸公に贈る

竹橋新月上。水岸涼風至。
對月五六人。管絃三兩事。
留連池上酌。欸曲城外意。
或嘯或謳吟。誰知此閒味。
廻看市朝客。矻矻趨名利。
朝忙少遊宴。夕困多眠睡。
清涼屬吾徒。相逢勿辭醉。

竹橋新月上り、水岸涼風至る。
月に對する五六人、管絃三兩事。
留連して池上に酌む、欸曲す城外の意。
或は嘯き或は謳吟す、誰か此閒味を知らん。
市朝の客を廻看すれば、矻矻として名利に趨る。
朝に忙しくして遊宴すること少く、夕に困みて眠睡する[こと多し。]
清涼は吾徒に屬す、相逢ひて醉を辭する勿れ。

【字解】【一】欸曲　打解けて語り合ふ。【二】市朝客　朝廷に仕ふる官吏。
【題義】張常侍の池の邊で涼夜に閒宴した時一座の諸公に贈つた詩である。
【詩意】竹の橋には宵月が上り、池の岸には涼風が吹いて來る。五六人の人が月に對し、二三種の管絃を奏し、池邊に酒酌みかはして、城外清遊の樂を語り合ひ、或は長嘯したり或は謳吟したりする。この閒味は人の窺知を容れぬ所である。翻つて官界に居る者を看れば常に名利に奔走し、遊宴する暇もなく困睡に沈んでゐる。かかる清涼の氣味は唯吾等閒人の專有物である。茲に相逢うたからには醉を辭せずにウント飲まうでは御座らぬか。

和皇甫郎中秋曉同登天宮閣言懷六韻

皇甫郎中が秋曉同じく天宮閣に登り懷を言ふに和す、六韻

碧天忽已高。白日猶未短。
玲瓏曉樓閣。清脆秋絲管。
張翰一盃酣。嵇康終日懶。
塵中足憂累。雲外多疏散。
病木斧斤遺。冥鴻羈緤斷。
逍遙二三子。永願爲閒伴。

碧天忽ち已に高く、白日猶未だ短からず。
玲瓏たり曉の樓閣、清脆なり秋の絲管。
張翰一盃の酣、嵇康終日の懶。
塵中憂累足り、雲外疏散多し。
病木は斧斤遺し、冥鴻は羈緤斷ゆ。
逍遙たる二三子、永く閒伴と爲らんを願ふ。

【字解】【一】絲管　管絃。【二】張翰　晉の吳の人、洛陽に入り齊王閒の大司馬東曹掾となる。秋風の起るに由りて吳中の菰菜蓴羹鱸魚膾を思ひ、遂に駕を命じて歸る。【三】嵇康　三國魏の人、中散大夫に拜せらるれども就かず、常に琴を彈じて自ら樂む。

【四】 廊中　俗世間。【五】 斧斤　なの、まさかり。【六】 冥鴻　天上を翔ける鴻。自由の身に喩ふ。繒繰は縛つてある糸。【七】 閒伴　閒遊の伴侶。

【題義】 皇甫郎中（前に見ゆ）が秋の朝、樂天と俱に天宮閣に登り、感懷を述べた詩に、樂天が和したのである。

【詩意】 已に秋に入りて天は高く澄んでゐるが、日はまだ短くはならない。曉に天宮閣に登れば樓閣は玲瓏と照り輝き、閣上に奏する管絃の音が清く柔かに響き渡る。吾は古の張翰や嵇康にも比すべき身で、常に酒を飲んで爲す事もなく日を送つてゐる。兎角塵の世は累が多いが、浮世離れた身には閒暇が多い。吾は蝕んだ木のやうなもので誰あつて伐る者もなく、天上に翔る鴻のやうで何等の繒もない。願はくは諸君の仲間にはひつて永く俱に逍遙自適したいものである。

送呂漳州

今朝一壺酒。言送漳州牧。
半自要閒遊。愛花憐草綠。
花前下鞍馬。草上攜絲竹。
行客飲數盃。主人歌一曲。

呂漳州を送る

今朝一壺の酒、言に漳州の牧を送る。
半は自ら閒遊を要し、花を愛し草綠を憐む。
花前鞍馬を下り、草上絲竹を攜ふ。
行客數盃を飲み、主人一曲を歌ふ。

端居惜風景。屢出勞僮僕。
獨醉似無名。借君作題目。

【字解】【一】 漳州牧　漳州刺史なり。【二】 絲竹　管絃なり。【三】 行客　呂漳州を指す。【四】 主人　樂天自ら謂ふ。【五】 端居　平居といふが如し。

【題義】 漳州刺史呂氏の去るを送る詩である。

【詩意】 今朝一壺の酒を擧げて漳州刺史たる君の去るのを送る。一半は君を送るのであるが、一半は自分の閒遊の爲で、花の紅なるを愛し草の綠なるを賞して、花の前には馬を下り、草の上には管絃を奏し、旅立つ君は數杯を飲み、見送る我は一曲の歌を歌つた。家に閑居してゐれば風景の移るのが氣になるので、屢出遊すれば僮僕に厄介をかけることになる。また獨りで醉うては名儀が立たないので、君を送るといふ名儀を借りて出遊した次第である。

短歌行

世人求富貴。多爲奉嗜欲。
盛衰不自由。得失常相逐。
問君少年日。苦學將干祿。

短歌行

世人の富貴を求むるは、多くは嗜欲に奉せんが爲なり。
盛衰自由ならず、得失常に相逐ふ。
問ふ君少年の日、苦學して將に祿を干めんとす。

負笈塵中遊。抱書雪前讀。
布衾不周體。藜茹纔充腹。
三十登宦途。五十被朝服。
奴溫已挾纊。馬肥初食粟。
未敢議歡遊。尚爲名檢束。
耳目聾暗後。堂上調絲竹。
牙齒缺落時。盤中堆酒肉。
彼來此已去。外餘中不足。
少壯與榮華。相避如寒燠。
青雲去地遠。白日經天速。
從古無奈何。短歌聽一曲。

【字解】【一】塵中　俗世間。【二】抱書雪前讀　晉の孫康家貧にして燭なし。常に雪に映じて書を讀む。【三】藜茹　野菜なり。【四】挾纊　綿を著る。左傳に楚子伐蕭、申公巫臣曰、師人多寒、王巡三軍、拊而勉之、三軍之士皆如挾纊とある。【五】檢束　束縛なり。【六】絲竹　管絃。【七】盤中　皿の中。【八】彼　富貴を指す。此は嗜欲を指す。【九】外　嗜欲を充すべき物。中は嗜欲の情。【一〇】寒燠　寒暖なり。【一一】青雲　高位高官に喩ふ。

【題義】短歌行は樂府の曲名である。

【詩意】世人が富貴を求めるのは、以て己の嗜慾を充たさんが爲である。併し人の身の盛衰は思ふままにならず、一方を得れば一方を失ひ、兩得し難いものである。君に尋ねるが君も若い時に苦學して祿を干めんとし、笈を負うて塵世をかけまはり、雪に照らして書物を讀み、著物にも食物にも不自由を忍び、三十になつて始めて官途に就き、五十になつて朝官に列なることが出來たのであらう。されば己の召使ふ所の奴僕さへ溫かに著るやうになつてから自分も暖かに著、肥えた馬に乘ることの出來る身分になつてから厚祿を食み、己の名の爲に束縛されて自由に歡遊することをも敢てせず、耳聾し目暗くなつて始めて堂上に管絃を弄することが出來るやうになり、齒が拔け落ちてから酒肉に飽くことが出來るやうになつたのであらう。つまり富貴になつた時は已に嗜慾の去つた時で、嗜慾を充たす物の餘りある頃は嗜慾の念は已に消亡してしまつたのである。斯の如く少壯と榮華とは寒と暖との同時に來ないのと同じで、兩者を併せ得ることは出來ないのである。青雲の上に登ることは難く、歲月の遷るのは速い。これは古來人力の如何ともし難い所である。君よ願はくは吾が此短歌一曲を聽き給へ。

詠懷

高人樂丘園。中人慕官職。

高人は丘園を樂み、中人は官職を慕ふ。

一事尚難成。兩途安可得。
一事すら尚成り難し、兩途安んぞ得可けんや。

遑遑干世者。多苦時命塞。
遑遑として世に干むる者は、多く時命の塞がるを苦しむ。

亦有愛閒人。又爲窮餓逼。
亦閒を愛する人有り、又窮餓の爲に逼らる。

我今幸雙遂。祿仕兼游息。
我今幸に雙び遂げ、祿仕游息を兼ぬ。

未嘗羨榮華。不省勞心力。
未だ嘗て榮華を羨まず、省みて心力を勞せず。

妻孥與婢僕。亦免愁衣食。
妻孥と婢僕と、亦衣食を愁ふるを免る。

所以吾一家。面無憂喜色。
所以に吾が一家、面に憂喜の色無し。

【字解】【一】高人　心の高尚な人。丘園は隱居の地をいふ。易經に賁三子丘園一とある。【二】中人　中材の人。【三】遑遑　あくせくする貌。【四】時命　運命。岑參の詩に時命難二自知一、功業豈暫忘とある。【五】妻孥　妻子。

【題義】感懷を詠じた詩である。

【詩意】高士は隱居を樂み、中材の人は官職を冀ふものである。併し一つの事さへ成し遂げ難いのであるから、まして隱居と官職との二途を兼ね全うすることは出來ない。故に遑遑として世利を逐ふ者は多くは運命の塞るに苦しみ、亦閒遊を貪る者は飢餓に逼られるのである。處が我は僥倖にも此兩者を併せ遂げて、祿仕と閒遊とを兼ね、未だ嘗て榮華を羨まず、自ら省みて無理に心力を勞することをしない。妻子も婢僕も亦幸に衣食の心配を免れてゐる。故に吾が一家の者は面に憂喜の色がない。

府西亭納涼歸

府の西亭に涼を納れて歸る

避暑府西亭。晚歸有閒思。
暑を府の西亭に避け、晚に歸りて閒思有り。

夏淺蟬未多。綠槐陰滿地。
夏淺くして蟬未だ多からず、綠槐陰地に滿つ。

帶寬彩解領。馬穩人攏轡。
帶寬くして彩領を解き、馬穩かにして人轡を攏る。

面上有涼風。眼前無俗事。
面上に涼風有り、眼前に俗事無し。

路經府門過。落日照官次。
路府門を經て過ぐれば、落日官次を照らす。

牽聯縲絏囚。奔走塵埃吏。
縲絏の囚を牽聯し、塵埃の吏を奔走せしむ。

低眉悄不語。誰復知茲意。
眉を低れ悄へて語らず、誰か復茲意を知らん。

憶得五年前。晚衙時氣味。
憶ひ得たり五年の前、晚衙時氣味あり。

【字解】【一】官次　官舍なり。【二】縲絏囚　囚徒なり。【三】塵埃吏　俗吏。【四】晚衙　夕方官吏の役所を退く時の儀式。

【題義】府とは河南尹の役所をいうたもののやうである。此詩は樂天が河南尹たりし頃、府の西亭に涼を納れて歸つた時の作である。

【詩意】役所の西亭に暑を避け夕方になつて官舍に歸り、思ふともなく閒思が起つた。時に夏がまだ淺いので蟬の聲もうるさい程ではなく、綠色濃き槐の陰が一面に地にさしてゐる。帶をゆるめ襟をひろげ、穩かに馬に跨つて人に手綱を持たせて歸れば、涼風が面を掠めて快く、眼前には何一つ俗事がない。やがて役所の門前を過ぐれば落日が官舍を照らしてゐた。予は職務上囚徒を牽き聯ねたり小吏を奔走せしめたりしたが、眉を低れ悄然として、物も言はないので、誰とて我が胸中を知る者はないが、自分は五年以前蘇州刺史たりし頃、晩衙の時に丁度このやうな心持のしたことを憶ひ出した。

老熱

一飽百情足。一酣萬事休。
何人不衰老。我老心無憂。
仕者拘職役。農者勞田疇。
何人不苦熱。我熱身自由。
臥風北窓下。坐月南池頭。
腦涼脫烏帽。足熱濯清流。

老熱

一飽百情足り、一酣萬事休す。
何人か衰老せざらん、我老いて心に憂無し。
仕ふる者は職役に拘せられ、農する者は田疇に勞す。
何人か熱に苦しまざらん、我熱するも身自由なり。
風に臥す北窓の下、月に坐す南池の頭。
腦涼しくして烏帽を脫ぎ、足熱して清流に濯ふ。

慵發晝高枕。興來夜汎舟。
何乃有餘適。祇緣無過求。
或問諸親友。樂天是與不。
亦無別言語。多道大悠悠。
悠悠君不知。此味深且幽。
但恐君知後。亦來從我遊。

【字解】〔一〕一酣　一醉。〔二〕餘適　餘の快適。〔三〕過求　過分の求。〔四〕悠悠　おちついてゐる貌。

【語義】老と熱とに累はされず、悠然として自適することを述べた詩である。

【詩意】身一たび醉飽すれば他に何の慾念もなく、世に衰老せぬ者はないが、我は老いても、心に憂がない。仕宦する者は職務の爲に心を拘かれ、農夫は田畑の爲に身を勞し、誰でも熱に苦しまぬ者はないが、我は熱くとも身は自由である。北窓の下に臥して涼風に當り、南池の邊に坐して月を仰ぎ、頭巾を脫いで頭を冷し、足が熱ければ清流に濯ひ、倦怠を覺ゆれば晝でも眠り、興が起れば夜でも舟を泛べ、心の快適がいくらでもある。それといふのも畢竟過分な欲求をしないからである。因つて或人が我が親友に問うた、樂天は近來機嫌がよいかどうかと。問はれた親友は別に言ふ所もなく、ただ大に悠悠として樂んでゐると答へた。吾が悠悠たる樂みの深く且幽なる味ひは他人にはわかるまい。若

しわかつたら恐らく我の仲間になつて倶に遊ぶやうになるであらう。

新秋喜涼因寄兵部楊侍郎

新秋涼を喜ぶ、因つて兵部楊侍郎に寄す

外強火未退。中銳金方戰。
外強くして火未だ退かず、中銳くして金方に戰ふ。

一夕風雨來。炎涼隨數變。
一夕風雨來り、炎涼隨ひて數〻變ず。

徐徐炎景度。稍稍涼飈扇。
徐徐炎景度り、稍稍涼飈扇ぐ。

枕簟忽淒清。巾裳亦輕健。
枕簟忽ち淒清、巾裳亦輕健。

老夫納秋候。心體殊安便。
老夫秋候を納れ、心體殊に安便なり。

睡足一屈伸。搔首摩挲面。
睡足りて一たび屈伸し、首を搔きて面を摩挲す。

褰簾對池竹。幽寂如僧院。
簾を褰げて池竹に對すれば、幽寂僧院の如し。

俯觀游魚群。仰數浮雲片。
俯して游魚の群を觀、仰ぎて浮雲の片を數ふ。

閒忙各有趣。彼此寧相見。
閒忙各〻趣有り、彼此寧ぞ相見ん。

昨日聞慕巢。召對延英殿。
昨日慕巢、召されて延英殿に對すと聞く。

【字解】【一】火未退　炎威の衰へないこと。【二】金方戰　金は秋の氣なり。秋氣が來ること。【三】淒清　涼しきこと。【四】老夫　樂天自ら謂ふ。【五】摩挲　こする。【六】閒忙　閒暇なると多忙なると。樂天は閒にして楊侍郎は忙なり。【七】彼此　楊侍郎と樂天。【八】延英殿　宮殿の名。

【題意】秋に入りて涼しくなつたことを喜び、因つて兵部侍郎楊汝士（虞卿の弟、字は慕巢）に寄せた詩である。

【詩意】まだ暑氣は退かないけれども既に秋氣が兆してゐる。されば一雨ごとに炎威が去つて段段涼風が吹き初め、枕や簟も冷冷として衣裳の輕きを覺える。我も秋候を迎へて身心ともに安泰で、晝寢をしあきて伸びをしたり、頭を搔いたり顏を撫でたりしてから、簾を捲いて池邊の竹に對すれば、幽寂なることは僧院のやうである。俯しては游魚を觀、仰いでは浮雲を數へ、爲す事もなく日を送つてゐる。我は此の如く閒暇であるが、君は多忙で、各〻その趣を異にし、相見る機會も少い。昨日も聞けば、君は天子の御召に因つて延英殿に拜謁したさうだ。

懶放二首呈劉夢得吳方之

懶放二首、劉夢得・吳方之に呈す

青衣報平旦。呼我起盥櫛。
青衣平旦を報じ、我を呼びて起きて盥櫛せしむ。

今早天氣寒。郎君應不出。
今早天氣寒し、郎君應に出でざるべし。

又無賓客至。何以銷閒日。　又賓客の至る無し、何を以てか閒日を銷せん。
已向微陽前。暖酒開詩帙。　已に微陽の前に向ひ、酒を暖めて詩帙を開く。

【字解】【一】青衣　婢ないふ。平旦は夜の明けたこと。【三】今早　今朝。【四】郎君　旦那樣。樂天を指して言ふ。【五】閒日　閒暇の日。【六】微陽　冬の日。【七】詩帙　詩卷といふが如し。

【題義】閒暇に任せてだらしなく日を送つてゐる有樣を述べて劉夢得・(名は禹錫)呉方之二氏に呈した詩である。

【詩意】婢が夜の明けたことを告げ、我を呼び起して顏を洗ひ髮を梳らせ、さて言ふやう「今朝は大層寒いですから、旦那樣には、どちらへもおでましにならない方が宜しう御座います」と。さりとて遊びに來てくれる客もなければ、暇のつぶしやうがない。仕方なしに日向ぼつこをしながら酒を暖めて詩卷を繙くことにした。

〔二〕

朝憐一牀日。暮愛一爐火。　朝には一牀の日を憐み、暮には一爐の火を愛す。
牀暖日高眠。爐溫夜深坐。　牀暖かにして日高けて眠り、爐溫かにして夜深けて坐す。
雀羅門懶出。鶴髮頭慵裹。　雀羅門出づるに懶く、鶴髮頭裹むに慵し。
除却劉與呉。何人來問我。　劉と呉とを除却せば、何人か來りて我を問はん。

【字解】【一】雀羅　雀を捕ふる網。漢書に「下邽翟公爲二廷尉一、賓客塡レ門、及レ廢門外可レ設二雀羅一」とある。人の來り訪ふ者なく雀のみ門庭に下ること。【二】鶴髮　白髮。

【詩意】朝は日の寢牀を照らすのを好んで日の高く昇るまで眠り、暮には爐の火の赫赫たるを愛して夜の深けるまで坐し、晝は訪ふ人もなくて雀が澤山下りてゐる門を出づるに懶く、鶴のやうに白い頭髮を結ぶに慵い。こんな時には誰か來てくれればよいが、君等二人を除いては外に誰も來てくれる人はない。

六十六

病知心力減。老覺光陰速。　病みて心力の減ずるを知り、老いて光陰の速なるを覺ゆ。
五十八歸來。今年六十六。　五十八にして歸り來り、今年六十六。
鬢絲千萬白。池草八九綠。　鬢絲千萬白く、池草八九綠なり。
童稚盡成人。園林半喬木。　童稚盡く成人、園林半ば喬木。
看山倚高石。引水穿深竹。　山を看て高石に倚り、水を引きて深竹を穿つ。
雖有潺湲聲。至今聽未足。　潺湲の聲有りと雖も、今に至るまで聽きて未だ足らず。

【字解】【一】八九絲　八九回繰になつた。【二】潺湲　水の流るる聲。

【題義】六十六歳の時の閑居の情景を述べた詩である。

【詩意】病んでは心力の減退を知り、老いては光陰の特に過ぎ易きを覺える。我は五十八の時に洛陽に歸つて來て、今年は丁度六十六になる。鬢の毛は盡く白くなり、池邊の草も八九回春の綠を呈し、小供も盡く成人し庭木も大木になつた。石に倚つて山を眺め、深竹を穿ちて水を引きなどして閑居してゐるが、潺湲たる水流の聲はいくら聽いても聽き飽きない。

三適、贈道友

三適、道友に贈る

〔一〕褐綾袍厚暖。臥蓋行坐披。
〔二〕紫氈履寬穩。〔三〕蹇步頗相宜。
足適已忘履。身適已忘衣。
況我心又適。兼忘是與非。
三適今爲一。〔四〕怡怡復熙熙。
〔五〕禪那不動處。〔六〕混沌未鑿時。

褐綾袍厚暖、臥して蓋ひ行坐に披る。
紫氈履寬穩、蹇步頗る相宜し。
足適して已に履を忘れ、身適して已に衣を忘る。
況んや我心又適し、兼ねて是と非とを忘るるをや。
三適今一と爲り、怡怡復熙熙。
禪那不動の處、混沌未鑿の時。

此固不可說。爲君強言之。

此れ固より說く可からず、君の爲に強ひて之を言ふ。

【字解】【一】褐綾袍　毛布の長襦。【二】紫氈履　紫の毛氈の履。【三】蹇步　跛行なり。【四】怡怡　和悅なり。熙熙は悅樂の貌。【五】禪那　禪定なり。不動は心を一境に定住して動かぬこと。【六】混沌未鑿　混沌は一に渾沌に作る。清濁未だ分れざる自然に喻ふ。莊子應帝王篇に南海之帝爲レ儵、北海之帝爲レ忽、中央之帝爲三渾沌一、儵與レ忽謀レ報三渾沌之德一曰、人皆有三七竅一、以視聽食息、此獨無レ有、嘗試鑿レ之、日鑿三一竅一、七日而渾沌死とある。

【題義】三つの快適を述べて道友に贈つた詩である。

【詩意】毛布の袍は厚く暖かで、寢るにも歩くにも坐るにも身に纏うてゐる。紫氈の履はゆるく穩かで、我がよろめく足にも具合がよい。足は快適を得て履を忘れ、身は快適を得て衣を忘れ、心は快適を得て是非を忘れ、此三適を併せ得て和樂に滿ちてゐる。丁度禪定に入つて心が動かず、渾沌が未だ七竅を鑿たず、七情の未だ分れない時のやうである。この快適の情は到底口で說明することは出來ないが、君の爲に強ひて言つて見たのである。

洛陽春。贈劉李二賓客　齊梁格

洛陽の春、劉・李二賓客に贈る　齊梁格

〔一〕水南冠蓋地。城東桃李園。
雪消洛陽堰。〔二〕春入永通門。

水南は冠蓋の地、城東は桃李の園。
雪は洛陽の堰に消え、春は永通の門に入る。

淑景方靄靄。遊人稍喧喧。
年豐酒漿賤。日晏歌吹繁。
中有老朝客。華髮映朱軒。
從容三兩人。藉草開一樽。
樽前春可惜。身外事勿論。
明日期何處。杏花遊趙村。
洛城東有趙村。杏花千餘樹。

淑景方に靄靄、遊人稍く喧喧。
年豐にして酒漿賤しく、日晏れて歌吹繁し。
中に老朝客有り、華髮朱軒に映ず。
從容たる三兩人、草を藉きて一樽を開く。
樽前春惜む可し、身外事論ずる勿れ。
明日何れの處にか期せん、杏花あり趙村に遊ばん。

【字解】【一】水南　川の南。冠蓋は衣冠車蓋。官吏なり。【二】洛陽堰　後集卷十三に洛陽堰閑行と題する詩あり。【三】永通門　唐六典に東都城南面三門、中曰二定鼎一、左曰二長安一、右曰二厚載一、東面三門、中曰二建春一、南曰二永通一、北曰二上東一とある。【四】淑景　春景色。靄靄は花曇りの貌。【五】華髮　白髮。朱軒は朱塗の馬車。

【題義】洛陽の春遊を敍して太子賓客（官名）劉・李二氏に贈つた詩で、齊梁時代の風格に倣つて作つたものである。

【詩意】水南は冠蓋の集まる處で城東は桃李の園が多い。今や雪は洛陽堰に消え、春は永通門より入り、洛陽城中に春色が滿ちわたり、遊賞する人も多くなつた。年が豐かで酒が安いので、日の暮れるまで歌つたり吹いたりして騷いでゐる。その中に白髮の老朝客があつて、兩三人でしとやかに草を敷いて酒を酌みかはしてゐる。酒に對して春色の過ぎ易きを惜み、身外の榮華などは敢て問ふ所ではない。さて明日は何處で相會遊したらよからうか。杏花の咲き滿ちてゐる趙村がよからう。

寒食

人老何所樂。樂在歸鄉國。
我歸故園來。九度逢寒食。
故園在何處。池館東城側。
四隣梨花時。二月伊水色。
豈獨好風土。仍多舊親戚。
出去恣歡遊。歸來聊燕息。
有官供祿俸。無事勞心力。
但恐優穩多。微躬銷不得。

人老いて何の樂む所ぞ、樂みは鄉國に歸るに在り。
我故園に歸りてより來た、九度寒食に逢ふ。
故園何れの處にか在る、池館東城の側。
四隣梨花の時、二月伊水の色。
豈獨り好風土なるのみならんや、仍舊親戚多し。
出で去りて恣まに歡遊し、歸り來りて聊か燕息す。
官の祿俸を供する有り、事の心力を勞する無し。
但恐らくは優穩多く、微躬銷し得ざらんことを。

【字解】【一】故園　故鄉、洛陽を指していふ。【二】東城　洛陽の東城。【三】伊水　川の名。【四】燕息　休息なり。【五】優穩　無事安泰。【六】微躬　いやしき身。

【題義】寒食（冬至から百五日を云ふ）の頃、洛陽に於ける閑適の狀を述べた詩である。

【詩意】老いては故郷に歸るのが何よりの樂みである。吾は故郷に歸つてから洛陽の東城の側らに池館を構へて住み、既に九回寒食に逢つた。今やあたりには梨の花が咲き滿ち、伊水の色も美しい。ただ風景の好いばかりではなく親戚故舊も多くある。されば出でては歡遊を恣にし、歸れば樂樂と休息することが出來る。おまけに官祿を戴きながら心力を勞する程の仕事もないので、あまりの無事安泰さに、殆ど日の送りやうがないくらゐである。

寄李蘇州兼示楊瓊

李蘇州に寄せ兼ねて楊瓊に示す

眞娘墓頭春草碧。
心奴鬢上秋霜白。
爲問蘇臺酒席中。
使君歌笑與誰同。
就中猶有楊瓊在。
堪上東山伴謝公。

眞娘墓頭春草碧に、
心奴鬢上秋霜白し。
爲に問ふ蘇臺酒席の中、
使君の歌笑誰と同じき。
就中猶楊瓊の在るあり、
東山に上りて謝公に伴ふに堪ふ。

【字解】【一】眞娘墓　雪溪友議に、眞娘者吳國之佳人也、死葬三吳宮之側、行客感三其華麗、題詩於墓樹一とある。【二】心奴　奴の名であらう。【三】蘇臺　姑蘇臺なり、吳王の都せし處。【四】使君　官吏をいふ。【五】謝公　晉の謝安東山に隱居し、常に妓を以て相從ふ、ここは李蘇州に比す。

【題義】蘇州刺史李六に寄せ、兼ねて楊瓊（歌妓の名、卷一に見ゆ）に示した詩である。

【詩意】今や眞娘の墓の頭には春草が青青と茂つてゐるであらう。それと反對に心奴の鬢には秋の霜が白く置いてゐるであらう。蘇州刺史たる君は近頃誰を相手に酒を酌み詩を吟じてゐるであらう。多分楊瓊が君に伴つて東山の遊をなしてゐるであらう。

和裴令公一日日一年年雜言見贈

裴令公が一日日一年年といふ雜言を贈られしに和す

一日日作老翁。
一年年過春風。
公心不以貴隔我。
我散唯將閒伴公。
我無才能忝高秩。
合是人間閒散物。
公有功德在生民。

一日日、老翁と作り、
一年年、春風を過ぐ。
公の心は貴を以て我を隔てず、
我は散にして唯閒を將て公に伴ふ。
我才能無くして高秩を忝くす、
合に是れ人間閒散の物なるべし。
公は功德の生民に在る有り、

【字解】【一】一日日　一日一日の意。【二】一年年　一年一年の意。【三】高秩　高位。【四】閒散物　無用の物。

何因得作自由身。　何に因りてか自由の身と作るを得ん。
前日魏王潭上宴　前日は魏王潭の上に宴して夜を連ね、
連夜。
今日午橋池頭遊　今日は午橋池の頭に遊びて晨を拂ふ。
拂晨。
山客硯前吟待月。　山客は硯前に吟じて月を待ち、
野人樽前醉送春。　野人は樽前に醉ひて春を送る。
不敢與公閒中爭。　敢て公と閒中に第一を爭はざるも、
第一。
亦應占得第二第　亦應に第二第三を占め得る人たるべし。
三人。

【題義】裴度は太和八年に留守東都となり、九年に中書令に進んだ。因つて裴令公といふ。この詩は裴度の一日日一年年といふ雜言體の詩を贈られたのに和したのである。

【詩意】一日一日と老境に入り、一年一年と春を過ごして行く。裴公は己の貴きを恃んで我を疎外せず、我は身の閒散に任せて公に伴つて遊んでゐる。我は何の才能もなき無用の物でありながら高位を忝うしてゐるが、公は生民の爲に大功德ある人であるから、仲仲自由の身になることは出來ない。先日は魏王潭の上で連夜の宴を張り、今日は午橋池の頭で晨を侵して遊び、硯の前には山客が吟じて月の出づるを待ち、樽の前には野人が醉うて春を送つた。吾は公と閒中第一を爭ふことを敢てしないが、第二第三を占めることは出來るのであらう。

【注】午橋池　池の名。洛陽に在り。ここに裴度の別墅あり。後集巻十四に寄レ和ヲ裴令公新成ニ午橋莊絲野堂一卽事ニ と題する詩あり。
【六】山客　樂天自ら謂ふ。
【七】野人　樂天自ら謂ふ。

奉和裴令公三月上巳日遊太原龍泉憶去歲
禊洛見示之作　依ニ來體雜言一。

裴令公が三月上巳の日太原の龍泉に遊び去歲洛に禊せるを憶ひ示さるるの作に和し奉る　來體雜言に依る。

去歲暮春上巳。　去歲暮春の上巳、
共泛洛水中流。　共に洛水の中流に泛ぶ。
今歲暮春上巳。　今歲暮春の上巳、
獨立香山下頭。　獨り香山の下頭に立つ。
風光閒寂寂。　風光閒にして寂寂、

【注】【一】香山　洛陽の龍門山の東に在る山の名。
【二】旌旆　裴公の旗。悠悠は遙に隔たる貌。
【三】晉國　山西省の太原なり。丞相裴度は晉國公に封ぜられた。

旌旆遠悠悠。
丞相府。歸晉國。
太行山。礙并州。
鵬背負天龜曳尾。
雲泥不可得同遊。

旌旆遠くして悠悠。
丞相府、晉國に歸り、
太行山、并州を礙ふ。
鵬は背に天を負ひ龜は尾を曳く、
雲泥同じく遊ぶを得べからず。

【題義】裴度が三月上巳の日に太原（山西省に屬す）の龍泉に遊び、去年洛水に禊をしたことを憶うて作つた詩を示されたのに和したのである。

【詩意】去年の三月上巳の日には、共に洛水に舟を泛べて禊をしたが、今年の三月上巳には、唯獨り風光寂寂たる香山の麓に立つてゐる。公は旌旗をおし立てて太原に歸り、ただ太行山の遙に并州を礙げて聳ゆるのを見るのみで、公の風貌を仰ぐことは出來ない。公は背に天を負ひて雲中に翔り、我は尾を曳いて泥中に遊び、其遊を俱にすることの出來ないのは殘念である。

【注】太行山　山西省に在る山の名。并州は古の十二州の一。
【注】鵬　裴令公に喩ふ。龜は樂天自ら喩ふ。

憶江南詞三首

江南好。

憶江南詞　三首

江南好し、
風景舊曾諳。
日出江花紅勝火。
春來江水綠如藍。
能不憶江南。

風景舊曾て諳んず。
日出でて江花紅火に勝り、
春來りて江水綠藍の如し。
能く江南を憶はざらんや。

【題義】憶江南は曲調の名で望江南ともいふ。唐の李德裕が浙西を鎮せし時、亡妓謝秋娘を悼み此曲を作つた。

【詩意】江南は實に風景がよい。我は久しく之を諳知してゐる。日の出る時の江邊の花は、火よりも紅に、春になれば江水が藍よりも綠である。どうして江南を憶はずにゐられようぞ。

〔一〕

江南憶。
最憶是杭州。
山寺月中尋桂子。
郡亭枕上看潮頭。

〔二〕

江南を憶ふ、
最も憶ふは是れ杭州。
山寺の月中桂子を尋ね、
郡亭の枕上潮頭を看る。

【字解】〔一〕山寺　浙江省杭州に寺あり天竺寺といふ。桂子は桂樹の實。古傳說に月中に桂實ありといふ。〔二〕郡亭　州の官舍。潮頭は滿潮。浙江は潮の滿干の甚しき處として有名なり。

何日更重遊。　何れの日か更に重ねて遊ばん。

【詩意】江南の中でも殊に杭州を憶ふ情が深い。天竺寺の月中に桂子を尋ねたり、官舍に臥して潮を眺めたりした思出が深い。いつか復遊びたいものである。

〔三〕

江南憶。

其次憶吳宮。

吳酒一杯春竹葉。

吳娃雙舞醉芙蓉。

早晚復相逢。

〔三〕

江南を憶ふ、

其次は吳宮を憶ふ。

吳酒一杯の春竹葉、

吳娃雙舞醉芙蓉。

早晚復相逢はん。

【詩意】其次に憶ひ出されるのは吳宮である。一杯の春竹葉を傾けつつ、ふのを見るのは何とも言はれぬ樂みである。いつか復逢ひたいものだ。醉芙蓉の如き美女の雙び舞

【字解】【一】春竹葉　唐人多く酒を名づけて春といふ。竹葉は酒の名。

【二】吳娃　吳地の美女。李白の詩に「吳娃與二越豔一、窈窕詩三鉛紅一」とある。芙蓉は蓮花。

【三】早晚　いつか。

汎小輪二首

小輪を汎ぶ　二首

水一塘。輪一隻。

輪頭漾漾知風起。

輪背蕭蕭聞雨滴。

醉臥船中欲醒時。

忽疑身是江南客。

水一塘、輪一隻。

輪頭漾漾風の起るを知る、

輪背蕭蕭雨の滴るを聞く。

醉ひて船中に臥して醒めんと欲する時、

忽ち疑ふ身は是れ江南に客たるかと。

【題義】小舟を泛べて遊んだ詩である。

【詩意】水上に一隻の小舟を泛べて遊んだ。舳に波の音を聞いて風の起つたことを知り、艫の方に蕭蕭たる物音を聞いて雨の滴るのを知つた。醉うて舟中に臥して俄に覺め、江南に遊んでゐるのではあるまいかと自ら疑つた。

【字解】【一】漾漾　波立つ貌。

【二】蕭蕭　風雨の聲。

〔一〕

船緩進。水平流。

一莖竹篙剔船尾。

兩幅青幕覆船頭。

〔一〕

船緩かに進み、水平かに流る。

一莖の竹篙船尾を剔り、

兩幅の青幕船頭を覆ふ。

【字解】【一】一莖　一本なり。竹篙は舟をこぐ竿。

【二】兩幅　ふなばた。

【三】覆竹　覆は壓に通ず。垂れさが

亞竹亂藤多照岸。　亞竹亂藤多く岸を照らし、
如從鳳口向湖洲。　鳳口より湖洲に向ふが如し。

【詩意】舟は緩かに進み、水は平かに流れてゐる。一本の棹で船尾から漕ぎ、二幅の青幕で船頭を覆つてある。竹が垂れ下り藤が亂生してゐる處を日が靜に照らし、宛も鳳口から湖洲に向ふ時の景色のやうである。

つてゐる竹。亂藤は亂生する藤。
【鳳口・湖洲】　並に地名であらう。

白樂天詩後集　卷四

格詩　凡八十六首

題裴晉公女几山刻石詩後　并序

裴晉公が女几山にて石に刻める詩の後に題す　并に序

裴侍中晉公。出討淮西時。過女几山下。刻石題詩。末句云。待平賊壘報。天子莫指仙山示武夫。果如所言。剋期平賊。由是淮蔡迄今底寧殆二十年。人安生業。夫嗟歎不足則詠歌之。故居易作詩二百言。繼題公之篇末。欲使採詩者修史者後之往來觀者。知公之功德本末前後也。

【訓讀】裴侍中晉公出でて淮西を討せし時、女几山の下を過ぎ、石を刻みて詩を題す。末句に云ふ、賊壘を平げて天子に報ずるを待ち、仙山を指して武夫に示す莫れと。果して言ふ所の如く期を剋して賊を平げぬ。是れ由り淮蔡今に迄るまで寧きを底すこと殆んど二十年、人生業に安んず。夫れ嗟歎して足らざれば則ち之を詠歌す。故に居易詩二百言を作り、繼ぎて公の篇末に題し、採詩の者、修史の

者、後の往來して觀る者をして、公の功德の本末前後を知らしめんと欲するなり。

【字解】【一】裴晉公　裴度は功を以て晉國公に封ぜられた。女几山は河南省宜陽縣の西に在り、骨に石鼎山といふ。晉書に張軌少曆三於宜陽女几山一と見ゆ。【二】侍中　官名。門下省の長官。【三】仙山　女几山をいふ。【四】剋期　嚴に日を限ること。【五】淮蔡　即ち淮西の地方。【六】居易　白樂天の名。

何處畫功業。何處題詩篇。
麒麟高閣上。女几小山前。
爾後多少時。四朝二十年。
賊骨化爲土。賊壘犂爲田。
一從賊壘平。陳蔡民晏然。
騾軍成牛戶。鬼火變人烟。

蔡寇號三騾子軍一。陳蔡間農鋤劍者。人畜レ牛者。呼爲二牛戶一。

生子已嫁娶。種桑亦絲緜。
皆云公之德。欲報無由緣。
公今在何處。守都鎭三川。

何れの處にか功業を畫ける、何れの處にか詩篇を題せる。
麒麟高閣の上、女几小山の前。
爾後多少の時、四朝二十年。
賊骨化して土と爲り、賊壘犂かれて田と爲る。
一たび賊壘の平ぎしより、陳蔡民晏然。
騾軍は牛戶と成り、鬼火は人烟に變ず。
子を生みて已に嫁娶し、桑を種ゑて亦絲緜あり。
皆云ふ公の德、報せんと欲するに由緣無しと。
公や今何れの處にか在る、都に守とし三川を鎭す。

舊宅留永樂。新居開集賢。
公今在何官。被袞珥貂蟬。
戰袍破猶在。髀肉生欲圓。
襟懷轉蕭灑。氣力彌精堅。
登山不拄杖。上馬能掉鞭。
利澤浸入地。福降自昇天。
昔號天下將。今稱地上仙。
勿追赤松遊。勿拍洪崖肩。
商山有遺老。可以奉周旋。

舊宅永樂に留まり、新居集賢に開く。
公今何の官にか在る、袞を被りて貂蟬を珥む。
戰袍破れて猶在り、髀肉生じて圓ならんと欲す。
襟懷轉た蕭灑、氣力彌精堅。
山に登りて杖を拄へず、馬に上りて能く鞭を掉ふ。
利澤浸して地に入り、福降つて自ら天に昇る。
昔は天下の將と號し、今は地上の仙と稱す。
赤松の遊を追ふこと勿れ、洪崖の肩を拍つこと勿れ。
商山に遺老有り、以て周旋に奉ず可し。

【字解】【一】麒麟　漢の宣帝功臣を麒麟閣に圖す。凡べて十一人。【二】四朝　憲宗・穆宗・敬宗・文宗。【三】陳蔡　淮西地方。袞龍は安き服。【四】守レ都　留守東都なり。三川は劍南東西道及び山南西道をいふ。【五】永樂　長安の里の名。前集卷五に見ゆ。【六】集賢　洛陽の里の名。後集卷三に裴侍中晉公以二集賢林亭即事詩二十六韻一見レ贈云云と題する詩あり。【七】袞　天子并に三公の服。貂蟬は侍中の冠。【八】髀肉　三國志に、劉備曰、吾常身不レ離レ鞍、髀肉皆消、今不二復騎一、髀裏肉生、日月若レ馳、老將レ至矣。而功業不レ建、是以悲耳とある。【九】襟懷　心持。蕭灑は、さつぱりしてゐる貌。【一〇】赤松　古の仙人の名。【一一】洪崖　仙人の名。郭璞の詩に、左挹二浮邱袂一、右拍二洪崖肩一とある。【一二】商山　山の名。漢の惠帝の太子たりし時出でて之を助けし四人の隱君子あり、之を商山の四皓といふ。樂天自ら比するか。【一三】周旋　交遊といふが如し。

【題義】元和中、裴度が淮西の反賊吳元濟を討つ時女几山の下を過ぎ、石に刻して詩を題した。其詩の末に「賊を平げて天子に報ずるまでは、女几山に隱れて仙人を氣取つてはゐられない」といふ句があつたが、果して豫期の通り賊を平げ、生民が皆其業に安んずるやうになつた。因つて樂天が其詩の後に此詩を題したのである。

【詩意】昔漢の宣帝は麒麟閣の上に功臣の像を畫かしめたといふが、我が裴晉公は女几山の下に其詩を題した。其後四朝二十年を歷た今日に於ては賊骨は化して土となり賊壘は犁かれて田となり、賊兵も良民と成り鬼火も人烟と變じ、子を生んで其子が嫁娶し、桑を種ゑて絲や綿を作り、皆晉公の德を頌して之に報いんことを期してゐる。晉公は今や東都に留守となり兼ねて三川に節度使となり、其舊宅は長安の永樂里に在り、新宅は洛陽の集賢里に在る。又侍中に任せられて、袞龍の服を纏ひ貂蟬の冠を戴いてゐる。以前の戰功を思うて今も猶髀肉の嘆に堪へず、老いたりと雖も氣力彌〻精堅で、山に登るにも杖を用ひず、馬上でも能く鞭を振ふほどである。利澤は下民に及び功德は天に達し、昔は天下の將と號せられ今は地上の仙と稱せられてゐる。赤松子や洪崖の仲間にはひつて仙人とならずとも、商山に遺老があつて、公に從つて遊ぶことを願つてゐる。

洛陽有愚叟

洛陽に愚叟有り、白黑も分別すること無し。

洛陽有愚叟

洛陽に愚叟あり

(一)淚跡雖似狂。謀身亦不拙。
跡を浪にすること狂に似たりと雖も、身を謀るは亦拙ならず。

點檢盤中飯。非精亦非糲。
盤中の飯を點檢すれば、精に非ざるも亦糲に非ず。

點檢身上衣。無餘亦無闕。
身上の衣を點檢すれば、餘り無きも亦闕くること無し。

天時方得所。不寒復不熱。
天時方に所を得たり、寒からず復熱からず。

體氣正調和。不飢仍不渴。
體氣正に調和し、飢ゑず仍渴せず。

閒將酒壺出。醉向人家歇。
閒に酒壺を將て出で、醉ひて人家に向ひて歇ふ。

野食或烹鮮。寓眠多擁褐。
野食して或は鮮を烹、寓眠して多く褐を擁す。

抱琴榮啓樂。荷鍤劉伶達。
琴を抱きて榮啓が樂みあり、鍤を荷ひて劉伶が達あり。

放眼看青山。任頭生白髮。
眼を放ちて青山を看、頭に白髮を生ずるに任す。

不知天地內。更得幾年活。
知らず天地の內、更に幾年か活くるを得る。

從此到終身。盡爲閒日月。
此れより身を終るに到るまで、盡く閒日月と爲さん。

【字解】【一】淚跡　行を妄にする。【二】鮮　小魚。【三】榮啓　列子天瑞篇に孔子遊二泰山一見二榮啓期鹿裘帶索、鼓レ琴而歌一云々とある。【四】劉伶　晉の人、酒を縱にして放達なり。嘗て之に隨はしめ、謂うて曰く、死せば便ち我を埋めよと。

【題義】己の放達恬淡の狀を述べた詩である。

【詩意】洛陽に愚叟がある。物の黑白をも辨へず、行を妄にすることは狂人のやうであるが、一身の計は決して拙ではない。其食物を見ても相當な物を食つて居り、其著物を見ても相當の身なりをしてゐる。殊に今は天時が宜しきを得て熱からず寒からざる時節であるので、體氣が調和して飢ゑもせず渴きもしない。閒に乘じ酒を携へて出で、醉うては人家に憩ひ、鮮を烹て野に食し、褐を擁して他人の家に寄宿し、琴を鼓して樂むこと榮啓期の如く、鍤を荷うて劉伶と放達を齊うし、眼を放ちて青山を看、頭には白髮の生ずるに任せてゐる。今後幾年活きるか知れないが、此から身を終るまでを閒日月として呑氣に生を終るであらう。

飽食閒坐

紅粒陸渾稻。白鱗伊水魴。
庖童呼我食。飯熱魚鮮香。
箸箸適我口。匙匙充我腸。
八珍與五鼎。無復心思量。
捫腹起盥漱。下階振衣裳。
遶庭行數匝。却上檐下床。
箕踞擁裘坐。半身在日暘。
可憐飽暖味。誰肯來同嘗。
是歲太和八。兵銷時漸康。
朝廷重經術。草澤搜賢良。
堯舜求理切。夔龍啓沃忙。
懷才抱智者。無不走遑遑。
唯此不才叟。頑慵戀洛陽。
飽食不出門。閒坐不下堂。
子弟多寂寞。僮僕少精光。
衣食雖充給。神意不揚揚。
爲爾謀則短。吾爲謀甚長。

飽食して閒坐す

紅粒陸渾の稻、白鱗伊水の魴。
庖童我を呼びて食せしむ、飯熱くして魚鮮香し。
箸箸我が口に適し、匙匙我が腸に充つ。
八珍と五鼎と、復心に思量する無し。
腹を捫して起ちて盥漱し、階を下りて衣裳を振ふ。
庭を遶りて行くこと數匝、却きて檐下の床に上る。
箕踞して裘を擁して坐す、半身日暘に在り。
憐む可し飽暖の味、誰か肯て來りて同じく嘗めん。
是歲太和の八、兵銷して時漸く康し。
朝廷經術を重んじ、草澤賢良を搜す。
堯舜理を求むること切に、夔龍啓沃忙はし。
才を懷き智を抱く者、走りて遑遑たらざるは無し。
唯此不才の叟、頑慵にして洛陽を戀ふ。
飽食して門を出でず、閒坐して堂を下らず。
子弟多く寂寞、僮僕精光少し。
衣食充給すと雖も、神意揚揚たらず。
爾が爲に謀るは則ち短し、吾が爲に謀るは甚だ長し。

【字解】【一】陸渾　地名。もと陸渾の戎の居りし處。漢陸渾縣を置く。故城今の河南嵩縣の東北に在り、俗に方山と稱す。西に伏牛關あり。伊水伏流の處たり。【二】魴　魚の名。【三】八珍　八種の珍味。五鼎は五種の佳肴。漢の主父偃曰く、丈夫生不二五鼎食一、

死即五鼎烹と。【四】數匝　數回。【五】箕踞　兩脚を伸ばし尻をつきて坐すること。【六】日暈　ひなた。【七】太和　文宗の年號。【八】堯舜　文宗に比す。理は治なり。【九】夔龍　並に舜の相。啓沃は天子を輔佐すること。【一〇】遑遑　奔走する貌。【一一】不才叟　樂天自ら謂ふ。【一二】揭揭　得意の貌。

【題義】洛陽に閑居して飽食暖衣してゐることを述べた詩である。

【詩意】庖童が陸渾の米と伊水の魴とを我に捧げる、飯は熟く魚は香しく、一箸ごとに、我が口を悅ばし、一匙ごとに我が腹に充つる。されば更に八珍五鼎の食を貪る心などは起らない。ふくれた腹を撫でながら起つて盥漱をなし、階を下つて衣裳の塵を振ひ、數回庭前を漫歩してから檐下の臥床に就く。夜が明けると先づ床上に箕踞し、半身を旭日に當てて暖める。この飽暖の味は實に愛すべきものであるが、我と俱に此味を賞する者は誰もない。是歳は丁度太和八年で、軍も鎭まつて世も漸く穩かになり、天子は經術を重んじて草澤の間に遺賢を搜し索め、治を求むるに意を鋭くし給うて、古の夔龍にも比すべき賢相が之を輔佐し奉つてゐる。されば才智を抱く者は盡く出でて王事に鞅掌してゐるが、ただ我のみは頑慵であるから洛陽に退居し、飽食閑坐して出ないので、子弟も羽振がわるく僮僕も景氣がわるい。衣食には不自由はないが如何にも意氣が揚らない。つまり自分の爲に謀ることは申分がないが、子弟の爲に謀ることは不十分と謂はねばなるまい。

閑居自題

閑居して自ら題す

門前有流水。墻上多高樹。
竹逕遶荷池。縈廻百餘步。
波閒戲魚鼈。風靜下鷗鷺。
寂無城市喧。渺有江湖趣。
吾廬在其上。偃臥朝復暮。
洛下安一居。山中亦慵去。
時逢過客愛。問是誰家住。
此是白家翁。閉門終老處。

門前に流水有り、墻上に高樹多し。
竹逕荷池を遶り、縈廻すること百餘步。
波閒にして魚鼈戲れ、風靜にして鷗鷺下る。
寂として城市の喧無く、渺として江湖の趣有り。
吾が廬其上に在り、偃臥朝復暮。
洛下安んじて一たび居り、山中亦去るに慵し。
時に過客の愛するに逢ふ、問ふ是れ誰が家の住ぞと。
此れは是れ白家の翁、門を閉ぢて老を終る處なり。

【字解】【一】荷池　蓮池。【二】洛下　洛陽。【三】過客　通行人。

【題義】閑居の狀を述べた詩である。

【詩意】門の前には川流があり墻の上には大木が聳え立ち、竹逕が蓮池を繞り、周圍が百餘步もあらう。波穩かにして魚や鼈が戲れ、風が靜で鷗や鷺が下りてゐる。少しも都會の喧噪がなく江湖の趣がある。吾が茅屋が丁度其上に在つて、我は朝晩そこに寢ころんでゐる。一たび洛陽に安居してからは、この山中を出るのが如何にも大儀である。時折通行人が我が住居を稱美して、一體誰の住居であるかなどと尋ねる。その時は白氏の老翁が閉居終老の地だと答へる。

覽鏡喜老

今朝覽明鏡。鬚鬢盡成絲。
行年六十四。安得不衰羸。
親屬惜我老。相顧興歎咨。
而我獨微笑。此意何人知。
笑罷仍命酒。掩鏡捋白髭。
爾輩且安坐。從容聽我詞。
生若不足戀。老亦何足悲。
生若苟可戀。老卽生多時。
不老卽須夭。不夭卽須衰。
晚衰勝早夭。此理決不疑。
古人亦有言。浮生七十稀。
我今欠六歲。多幸或庶幾。
儻得及此限。何羨榮啓期。

鏡を覽て老を喜ぶ

今朝明鏡を覽れば、鬢鬢盡く絲と成れり。
行年六十四、安んぞ衰羸せざるを得ん。
親屬我が老いたるを惜み、相顧みて歎咨を興す。
而も我獨り微笑す、此意何人か知らん。
笑罷みて仍りて酒を命じ、鏡を掩ひて白髭を捋る。
爾が輩且安坐し、從容として我が詞を聽け。
生若し戀ふに足らずんば、老亦何ぞ悲むに足らん。
生若し苟も戀ふ可くんば、老は卽ち生くること多時なり。
老いざれば卽ち須らく夭すべし、夭せずんば卽ち須らく衰ふべし。
晚く衰ふるは早く夭するに勝れり、此理決して疑はず。
古人も亦言へる有り、浮生は七十稀なりと。
我今六歲を欠く、多幸或は庶幾からん。
儻し此の限に及ぶを得ば、何ぞ榮啓期を羨まん。

當喜不當歎。更傾酒一巵。

【字解】【一】成絲　白毛になつたこと。【二】行年　年齢。【三】榮啓期　春秋時代の人の名。嘗て曰く、人生有て不見日月、不免襁褓者、吾行年九十矣、何不樂也と。【四】一巵　一杯。

【題義】鏡を覽て己の老いたのを喜んだ詩である。

【詩意】今朝鏡を見た所が鬚も鬢も皆眞白になつてゐた。もう六十四だから、衰老するのも無理はない。然るに家族の者共は我が老いたるを憐み、皆歎聲を洩らした。自分は獨り微笑して悲まないが、吾が此心中を知る者は誰もない。因つて酒を命じ鏡を掩ひ白髭を撚つて言つた。「まア お前等は皆すわれ、そして俺の言ふことを聽け。若し生といふものが格別戀著するに足らぬものだとすれば、老いることは決して悲むに足らないであらう。若し又生といふものが戀著するに足るものだとすれば、老いたのは多く生きたのだから喜ぶべきことだ。老いなければ若死にする。若死にしなければ老いるにきまつてゐる。晚く衰へるのは早く若死にするよりは遙に勝つてゐる。これは疑なき道理ではないか。古人も人生七十古來稀なりと謂つてゐるが、我は今六歲不足してゐるが、幸にして七十まで生きられるかも知れない。若し七十まで生きられれば、敢て九十まで生きた榮啓期などを羨みはしない。して見れば我が老いたのは喜ぶべきであつて歎くべきではないのだ」と言つて、更に一杯の酒を飲みほした。

風雪中作

歳暮風動地。夜寒雪連天。
老夫何處宿。煖帳溫爐前。
兩重褐綺衾。一領花茸氈。
粥熟呼不起。日高安穩眠。
是時心與身。了無閒事牽。
以此度風雪。閒居來六年。
忽思遠遊客。復想早朝士。
蹋凍侵夜行。凌寒未明起。
心爲身君父。身爲心臣子。
不得身自由。皆爲心所使。
我心既知足。我身自安止。
方寸語形骸。我應不負爾。

【字解】【一】老夫　樂天自ら謂ふ。【二】兩重　ふたかさね。褐綺　毛布并に綺。【三】一領　一枚。花茸氈は花模様の敷氈してゐる毛氈。【四】閒事　無用の事。むだごと。【五】早朝　朝早く登朝する。【六】方寸　心をいふ。形骸は身なり。

【題義】風雪の時節にも安樂に日を送つてゐる有様を述べた詩である。

【詩意】歳の暮の夜寒になつて風は地を捲き雪は天に連つて降りしきる時にも、我は煖い帳の中、溫い爐の前に、二枚の夜具と一枚の毛氈とにくるまり、粥が出來たと呼ばれても起きようともせず、日の高く昇るまで安安と眠つてゐる。かくの如くにして心も身も何物にも拘牽せられず、風雪を渡り來ること既に六年である。翻つて思ふに遠遊の客や早朝の士は、凍を蹋み夜を侵して行き、寒を凌ぎ夜の明けないうちに起きなどせねばならぬ。然も心は身の君父であり、身は心の臣子であるのに、凍を蹋んだり寒を冒したりして身の自由を得ないのは、皆心の爲に使はれるからである。所が我が心は足ることを知つてゐるから、從つて我が身も止る所に安んじてゐられる。因つて我が心が身に對して言ふ、「俺は決してお前を酷使するやうなことはしないぞよ」と。

風雪中の作

歳暮れて風地を動かし、夜寒くして雪天に連る。
老夫何れの處にか宿する、煖帳溫爐の前。
兩重褐綺の衾、一領花茸の氈。
粥熟して呼べども起きず、日高くるまで安穩に眠る。
是時心と身と、了に閒事に牽かるる無し。
此を以て風雪を度る、閒居して來た六年。
忽ち遠遊の客を思ひ、復早朝の士を想ふ。
凍を蹋み夜を侵して行き、寒を凌ぎ未だ明けずして起く。
心は身の君父たり、身は心の臣子たり。
身の自由を得ざるは、皆心の爲に使はるればなり。
我が心既に足るを知り、我が身自ら止るに安んず。
方寸形骸に語る、我應に爾に負かざるべしと。

對琴酒

西窓明且暖。晚坐卷書帷。
琴匣拂開後。酒瓶添滿時。
角樽白螺盞。玉軫黃金徽。

琴酒に對す

西窓明かにして且暖かなり、晚に坐して書帷を卷く。
琴匣拂ひ開く後、酒瓶添へ滿つる時。
角樽白螺の盞、玉軫黃金の徽。

未及彈與酌。相對已依依。
泠泠秋泉韻。貯在龍鳳池。
油油春雲心。一杯可致之。
自古有琴酒。得此味者稀。
祇應康與籍。及我三心知。

【字解】【一】書帷　書齋のとばり。まどかけ。【二】琴匣　琴のはこ。【三】角樽　角で作った酒樽。白螺盞は白い貝で作った杯。【四】玉軫　軫は琴下の絃を轉ずるもの。玉のいとじめ。徽は琴音の高下を示す標識。【五】依依　相牽纏する貌。【六】龍鳳池　琴底の孔なり。上なるを龍池といひ、下なるを鳳池といふ。【七】油油　和悅の貌。【八】康　嵇康。籍は阮籍。【九】及我　及はトと訓ず。

【題義】琴と酒とに對して其樂を述べた詩である。

【詩意】夕方に書齋の帷を卷きあげて坐すれば、西の窓が明く暖かである。因つて琴の匣を開き酒瓶を滿たして琴と酒とに對すれば、まだ彈きもせず飲みもせぬうちから、早くも心が牽かれる。冴えた秋泉の如き琴の音が龍池鳳池の中に貯へられ、和悅せる春の雲の如き心が一杯の酒に由つて養はれる。古來琴と酒とに對して此味を悟り得た者は稀で、ただ嵇康と阮籍と我とが知るのみである。

雪中晏起偶詠所懷兼呈張常侍・韋庶子・皇甫郎中

雜言。

雪中晏く起き、偶〻所懷を詠じ、兼ねて張常侍・韋庶子・皇甫郎中に呈す　雜言。

窮陰蒼蒼雪雰雰。
雪深沒脛泥埋輪。
東家典錢歸礙夜。
南家貰米出凌晨。
我獨何者無此弊。
複帳重衾暖若春。
怕寒放懶不肯動。
日高睡足方頻伸。
瓶中有酒爐有炭。
甕中有飯庖有薪。
奴溫婢飽身晏起。

【字解】【一】蒼蒼　陰暗の貌。雰雰は雪の降る貌。【二】典錢　品物を質に入れて金を借ること。【三】貰米　代金を後拂にして米買ふ。

致茲快活良有因。
上無皐陶伯益廊
廟材。
的不能匡君輔國
活生民。
下無巢父許由箕
潁操。
又不能食薇飲水
自苦辛。
君不見南山悠悠
多白雲
又不見西京浩浩
唯紅塵。
紅塵鬧熱白雲冷。

茲快活を致せること良に因有り。
上は皐陶伯益が廊廟の材無く、
的に君を匡し國を輔けて生民を活かす
能はず。
下は巢父許由が箕潁の操無く、
又薇を食ひ水を飲みて自ら苦辛する能
はず。
君見ずや南山悠悠として白雲多きを、
又見ずや西京浩浩唯紅塵なるを。
紅塵は鬧熱白雲は冷かなり、

【四】皐陶・伯益　並に舜の相。廊廟材は朝廷の大臣たる材。

【五】巢父・許由　堯が天下を讓らんとせし時、辭退せし人。箕潁操は高踏的志操。高士傳に許由聞堯致天下而讓焉、乃退而遁於中嶽、潁水之陽、箕山之下とある。

【六】食薇　伯夷叔齊首陽山に隱れ薇を採りて之を食ふ。飲水は疏食をくらひ水を飲み肱を曲げて之を枕とす。

【七】南山　長安の南に在る終南山。

【八】西京　長安。浩浩は塵の立つ貌。

好於冷熱中間安
置身。
三年徼倖忝洛尹。
兩任優穩爲商賓。
非賢非愚非智慧。
不貴不富不賤貧。
冉冉老去過六十。
騰騰閒來經七春。
不知張韋與皇甫。
私喚我作何如人。

好し冷熱の中間に於て身を安置す。
三年徼倖洛尹を忝くし、
兩任優穩商賓と爲る。
賢に非ず愚に非ず智慧に非ず、
貴ならず富ならず賤貧ならず。
冉冉老い去りて六十を過ぎ、
騰騰閒に來りて七春を經たり。
知らず張韋と皇甫と、
私に我を喚びて何如なる人と作す。

【九】徼倖　僥倖に同じ。洛尹は官名、河南尹。

【一〇】兩任　河南尹と太子賓客とを兼ねること。商賓は太子賓客をいふ。書商山の四皓が漢の惠帝の太子たりし時、太子に賓從せし故事に因る。

【一一】冉冉　年月の過ぐる貌。

【一二】騰騰　遊惰に耽る貌。七春は七年。

【題義】雪の日に晏く起き偶然感懷を述べた詩で、張常侍（張仲方であらう。仲方は九齡の族孫で貞元中進士に擢んでられ、散騎常侍・京兆尹を歷て華州刺史に左遷された）韋庶子（韋は姓、庶子は官名、字は遠坊。後集卷十三、和韋庶子遠坊赴宴未夜先歸之作兼呈裴員外、參照）。皇甫郎中（皇甫湜）に呈したのである。

【詩意】あたりが眞暗で雪がちらちらと降り、壓も車輪も沒するほどに積つた。東鄰の家では質を置き南鄰の家では米をかけ買して、朝晩を過してゐる窮狀であるが、我のみはそんな苦みはなく、帳衾を暖かに重ねて春の如く、寒を怕れ無精の限を盡してびくともせず、日が高く昇るまで眠續けて伸びばかりしてゐる。瓶には酒があり爐には炭があり、甕には飯があり、庖には薪があり、召使までが暖衣飽食して朝寢してゐる。併しかかる氣樂な生活が出來るには因由があるのだ。因由といふのは外ではない。上は皐陶だの伯益だののやうな大臣たるの材なく、君を匡け國を輔け人民を活かすことが出來ず、下は巢父や許由のやうな高踏的志操がなく、薇を食ひ水を飲んだ伯夷や顏回のやうな貧生活に安んずることが出來ないからである。君見よ終南山には悠悠として白雲が浮び、長安の都には浩浩として紅塵が立籠めてゐる。紅塵は騷騷しく白雲は淋しい。我は騷騷しくもなく淋しくもない中間の洛陽に安居し、僥倖にも河南尹・太子賓客の任を忝うし、賢にもあらず愚にもあらず智慧にもあらず、富貴にもあらず貧賤にもあらず、誠に萬事に中庸を得、安閑として六十七になつた。知らず君等三人は我を喚んで如何なる人と謂ふであらう。

和裴侍中南園靜興見示

裴侍中が南園の靜興、示さるるに和す

池館清且幽。高懷亦如此。

池館清くして且幽なり、高懷も亦此の如し。

有時簾動風。盡日橋照水。

時有りて簾風に動き、盡日橋水に照らさる。

靜將鶴爲伴。閒與雲相似。

靜に鶴を將て伴と爲し、閒なること雲と相似たり。

何必學留侯。崎嶇覓松子。

何ぞ必ずしも留侯を學び、崎嶇として松子を覓めん。

【字解】【一】池館　洛陽に在る裴侍中の池館。【二】高懷　高尙な心。【三】盡日　終日。【四】留侯　漢の張良高祖に事へて功あり、留侯に封ぜらる。【五】崎嶇　山阪を跋涉する貌。松子は仙人赤松子なり。張良は晩年赤松子に從つて遊べりといふ。

【題義】侍中裴度が南園の靜興と題する詩を寄せたのに和したのである。

【詩意】池館は清且幽で誠に公の心と同じく、時時風が吹いて來て簾を動かし、終日橋が水に影をうつしてゐる。公は靜に鶴に伴つて遊び、その閑なることは雲のやうである。公の如き靜閑を占め得てゐる以上は、何も張良などのやうに崎嶇として赤松子などを覓めて山阪を登る必要はない。

春寒

今朝春氣寒。自問何所欲。
酥煖蒩白酒。乳和地黃粥。
豈唯厭饞口。亦可調病腹。
助酌有枯魚。佐餐兼旨蓄。

春寒

今朝春氣寒し、自ら問ふ何の欲する所ぞと。
酥をば蒩白の酒に煖め、乳をば地黃の粥に和す。
豈唯饞口を厭かしむるのみならんや、亦病腹を調す可し。
酌を助くるに枯魚有り、餐を佐くるに旨蓄を兼ぬ。

省躬念前哲。醉飽多慚忸。
君不聞靖節先生樽長空。
廣文先生飯不足。

【字解】【一】酥　酪なり、牛羊の乳を以て作る。蘇白は小蒜の如き野菜。【三】地黄　薬用植物の名。【三】饞口　食り食ふ口。【四】旨蓿　うまい肉。【五】靖節先生　陶淵明。【六】廣文先生　鄭虔をいふ。玄宗皇帝鄭虔を愛し廣文館博士となす。杜甫の詩に廣文先生官獨冷、廣文先生飯不足とあり。

【題義】暖飽して春寒を送ることを述べた詩である。

【詩意】今朝は氣候が寒いので、酥をば薤白の酒に煖めて飲み、乳をば地黄の粥に和して食つた。これはただ貪り食ふ口を饜かしむるのみならず、腹の病を調へることも出來る。酒の肴には乾物の魚があり、飯の菜には旨い肉がある。昔の賢人に比較すれば我の醉飽してゐるのが恥かしい。陶淵明は酒樽がいつも空で、鄭虔は飯さへ十分にも食はれなかつたではないか。

菩提寺上方晩望香山寺寄舒員外

菩提寺の上方にて晩に香山寺を望み舒員外に寄す

晩登西寶刹。晴望東精舍。
反照轉樓臺。輝輝似圖畫。
氷浮水明滅。雪壓松偃亞。
石閣僧上來。雲汀鴈飛下。
西京鬧於市。東洛閒如社。
曾憶舊遊無。香山明月夜。

【字解】【一】上方　地勢最高の處をいふ。【二】寶刹　寺。菩提寺を指して言ふ。【三】精舍　寺。香山寺を指して言ふ。【四】反照　夕日。【五】偃亞　ふしたれる。【六】西京　長安。【七】東洛　洛陽。社は僧社、僧侶の仲間。前の閒意と風する詩に、痛二夜食一閒如レ社とある。

【題義】菩提寺の高臺から夕方香山寺（前に見ゆ）を望み、舒員外に寄せた詩である。時に舒員外は香山寺に宿してゐたもののやうである。

【詩意】夕方西の菩提寺に登つて東の香山寺を望めば、夕日が樓臺の間にきらきらして畫のやうに美しく、氷が浮んで水が明滅し、雪が積つて松の枝が垂れ、石閣をば僧が上り、雲汀には雁が飛び下りなどしてゐる。君の今迄ゐた長安は市場のやうに混雜を極むる處であるが、洛陽は靜なること僧社のやうである。その洛陽の香山寺に明月の夜に宿する君は、物の數ならぬ昔の遊賞などは、トント憶ひ出しもせぬであらう。

二月一日作。贈韋七庶子　二月一日の作、韋七庶子に贈る

園杏紅蕚拆。庭蘭紫芽出。
不覺春已深。今朝二月一。
去冬病瘡痏。將養遵醫術。
今春入道場。清淨依僧律。
嘗聞聖賢語。所愼齋與疾。
遂使愛酒人。停盃一百日。
明朝二月二。疾平齋復畢。
應須挈一壺。尋花覓韋七。

園杏紅蕚拆き、庭蘭紫芽出づ。
覺えず春已に深し、今朝二月一。
去冬は瘡痏を病み、將養して醫術に遵ふ。
今春は道場に入り、清淨にして僧律に依る。
嘗て聞く聖賢の語、愼む所は齋と疾と。
遂に酒を愛する人をして、盃を停むること一百日ならしむ。
明朝二月二、疾平ぎて齋復畢る。
應に須らく一壺を挈へ、花を尋ねて韋七を覓むべし。

【字解】【一】紅蕚　紅色のはなびら。【二】瘡痏　病氣。【三】道場　寺。【四】僧律　僧侶の戒律。【五】齋與疾　論語述而篇に、子之所愼齋戰疾とある。齋は精進潔齋なり。疾は病氣。【六】愛酒人　樂天自ら謂ふ。

【題義】二月一日に作つた詩で、韋七庶子（七は輩行。前に見ゆ）に贈つたのである。

【詩意】杏の花も開き蘭の芽も生え、春も深けて早くも二月一日となつた。去年の冬は病氣に罹り療養の爲に醫術を施し、今年の春は寺に入りて戒律を守つた。嘗て聞く所に據れば聖賢は物忌と病氣とを愼しんださうだ。因つて自分も好きな酒を百日間斷つたが、明朝は二月二日で、吾が病も癒え物忌も畢るから、一壺の酒を挈へて花を尋ぬる序に君を訪れようと思つてゐる。

犬鳶　犬鳶

晚來天氣好。散步中門前。
門前何所有。偶覩犬與鳶。
鳶飽凌風飛。犬暖向日眠。
腹舒穩貼地。翅凝高摩天。
上無羅弋憂。下無羈鎖牽。
見彼物遂性。我亦心適然。
心適復何爲。一詠逍遙篇。
此仍著於迹。尙未能忘言。

晚來天氣好し、散步す中門の前。
門前何の有る所ぞ、偶〻犬と鳶とを覩る。
鳶は飽きて風を凌ぎて飛び、犬は暖かにして日に向ひて眠る。
腹は舒びて穩かに地に貼し、翅は凝りて高く天を摩す。
上に羅弋の憂無く、下に羈鎖の牽く無し。
彼物の性を遂ぐるを見て、我も亦心適然たり。
心適して復何をか爲す、一たび逍遙の篇を詠ず。
此仍迹に著し、尙未だ言を忘るる能はず。

【字解】【一】羅弋　網といぐるみの矢。【二】羈鎖　繩やくさり。【三】彼物　犬と鳶と。【四】適然　愉快な貌。【五】逍遙篇　莊子の逍遙游篇。【六】忘言　莊子外物篇に言者所以在意、得意而忘言とある。

【題義】犬や鳶の安穩に飛んだり眠つたりしてゐるのを見る心の樂を述べた詩である。

【詩意】夕方になつて天氣が好くなつたので門前を散歩した。門前には犬と鳶とがゐて、鳶は餌に飽きて天を摩するばかりに飛び揚り、犬は日向に腹を地に著けて暖かに眠り、弓矢の憂もなく繩や鎖の束縛もなく、各〻その性を遂ぐるを見て我が心も愉快になり、覺えず逍遙游の篇を誦詠した。併し此樂を尙文字の迹に著し、未だ言ふを忘るるまでには至らない。

夢劉二十八因詩問之　劉二十八を夢み詩に因つて之を問ふ

昨夜夢夢得。初覺思踟躕。　昨夜夢得を夢み、初めて覺めて思踟躕す。
忽忘來汝郡。猶疑在吳都。　忽ち汝郡に來りしを忘れ、猶吳都に在るかと疑へり。
吳都三千里。汝郡二百餘。　吳都三千里、汝郡は二百餘。
非夢亦不見。近與遠何殊。　夢に非ざれば亦見ず、近と遠と何ぞ殊ならん。
尙能齊近遠。焉用論榮枯。　尙能く近遠を齊くす、焉んぞ用て榮枯を論せん。
但問寢與食。近日兩何如。　但問ふ寢と食と、近日兩つながら何如。
病後能吟否。春來曾醉無。　病後能く吟ずるや否や、春來曾て醉へるや無や。
樓臺與風景。汝又何如蘇。　樓臺と風景と、汝又蘇に何如。

【字解】【一】踟躕　徘徊といふが如し。【二】吳都　蘇州なり。

【題義】劉二十八（名は禹錫、字は夢得、二十八は輩行。太和六年冬、禹錫は蘇州刺史に除せられ、後汝州に移り太和九年に汝州から同州に移つた）を夢みたので此詩を寄せて近況を問うたのである。

【詩意】昨夜は君を夢に見て覺めて後も心が落著かなかつた。君が今は汝州に來てゐることを忘れてまだ蘇州にゐるやうに思つた。ここから蘇州までは三千里あり、汝州までは二百餘里に過ぎないが、夢でなければ相見ることの出來ないことは遠くても近くても同じである。夢は既に遠近を齊うするからには、榮枯をも差別することはないであらう。因つて予は唯近來眠食何如、病後も尙詩を吟ずるや否や、春來尙酒を飲むや否や、樓臺と風景とが汝州と蘇州とでは孰れが勝れりやを問ふ。今君を思ふに就て此詩を寄せるから、君も手紙を書くことを荷厄介にせずに時時音信をしてくれよ。

相思一相報。勿復慵爲書。　相思ひて一たび相報ず、復書を爲るを慵しとする勿れ。

閒吟　閒吟

貧窮汲汲求衣食。　貧窮なれば汲汲として衣食を求め、
富貴營營役心力。　富貴なれば營營として心力を役す。
人生不富卽貧窮。　人生富まざれば卽ち貧窮なり、

【字解】【一】營營　汲汲に同じ。

光陰易過閒難得。
我今幸在窮富間。
雖在朝廷不入山。
看雪尋花翫風月。
洛陽城裏七年間。

光陰は過ぎ易く閒は得難し。
我今幸に窮富の間に在り、
朝廷に在りと雖も山に入らず。
雪を看花を尋ね風月を翫ぶ、
洛陽城裏七年の間。

【題義】しづかに詩を作る意。

【詩意】貧窮なれば汲汲として衣食の爲に奔走し、富貴なれば心力を勞して權勢を逐ふのが、世の習である。人は富貴ならざれば必ず貧窮であり、歳月は過ぎ易くして閒暇を得ることはむづかしい。所が我は幸にも貧窮と富貴との中間に在り、仕官してはゐるが顯職には居らず、又山林に隱遁もせず、雪花風月を賞翫して洛陽に住むこと既に七年になる。

【一】光陰　歳月。閒は閒暇。

西行

衣裘不單薄。車馬不羸弱。
藹藹三月天。閒行亦不惡。

衣裘單薄ならず、車馬羸弱ならず。
藹藹たる三月の天、閒行亦惡からず。

壽安流水館。硤石青山郭。
官道柳陰陰。行宮花漠漠。
常聞俗間語。有錢在處樂。
我雖非富人。亦不苦寂寞。
家僮解絃管。騎從攜盃杓。
時向春風前。歇鞍開一酌。

壽安流水の館、硤石青山の郭。
官道柳陰陰、行宮花漠漠。
常に俗間の語を聞けり、錢有れば在處に樂むと。
我は富人に非ずと雖も、亦寂寞に苦しまず。
家僮絃管を解し、騎從盃杓を攜ふ。
時に春風の前に向ひ、鞍を歇めて一酌を開く。

【字解】【一】藹藹　草木の繁茂せる貌。【二】閒行　閒步。【三】壽安　東京畿に其內則含德、掌臺、天祿、宣明、溫飭、迎春、壽安、永寧とあり。注に八殿皆以二休令一爲レ名とある。【四】硤石　縣名。河南省硤縣の東南に在る。【五】漠漠　茂る貌。

【題義】西方に閒行したことを述べた詩である。

【詩意】見すぼらしからぬ裝をなし、痩せこけぬ車馬を驅り、花咲く春に閒行するのもわるくはない。流水に濱する壽安宮や靑山に圍まれた硤石縣のあたりを行けば、柳が靑靑と官道を挾んで茂り、花が行宮の間に咲き滿ちてゐる。世間の人は「錢さへあれば何處へ行つても樂しい」と言ふが、我は勿論金持ではないが、さりとて貧苦に泣くほどでもなく、音樂の趣味を解する家僮や杯杓を攜ふる從者をつれて、春風の中を行き、時時馬を駐めて一酌するのは、實に愉快である。

東歸

翩翩平肩舁。中有醉老夫。
膝上展詩卷。竿頭懸酒壺。
食宿無定程。僕馬多緩驅。
臨水歇半日。望山傾一盃。
藉草坐嵬峩。攀花行踟躕。
風景共暖。體與心同舒。
始悟有營者。居家如在途。
方知無繫者。在道如安居。
前夕宿三堂。
今旦游申湖。
殘春三百里。送我歸東都。

【字解】【一】翩翩　微動の貌。【二】醉老夫　樂天自ら謂ふ。【三】定程　一定の日程。【四】一盃　一杯。【五】嵬峩　小高き貌。【六】踟躕　徘徊。【七】東都　洛陽をいふ。

【題義】東方の洛陽に歸る道中の景況を敍した詩である。

【詩意】翩翩と肩を平かにして穩かに舁かれる駕輿の中には醉老夫が居る。膝の上には詩集を披き竿の先には酒壺を懸けておく。食ふにも宿るにも定まつた日程はないので、僕馬も足に信せて緩驅し、水に臨んでは半日も休息し、山を望んでは一杯を傾け、草を敷いて阜の上に坐し、花を攀ぢて徘徊すれば、風も景色も暖かに身も心もびのびとする。是に於てか名利に營營たる者は家に居ても猶行旅に在るが如く、心に係累なければ行旅に在るも猶家に居るが如きを悟つた。昨夜は三堂に宿し、今朝は申湖に游び、三百里に亙る殘春の景が我を送つて洛陽に歸らしめた。

途中作

早起上肩輿。一盃平旦醉。
晩憩下肩輿。一覺殘春睡。
身不經營物。心不思量事。
但恐綺與里。只如吾氣味。

【字解】【一】平旦　よあけ。【二】綺與里　綺里季、角里先生。並に商山四皓中の人。

【題義】東歸（前に見ゆ）の途中で作つた詩である。

【詩意】朝起きて肩輿に乘り、夜明の景色を眺めながら一杯を傾け、夕に肩輿を下りて休息し春の睡を覺ます。身は名利の營なく心は事に屈託しないから、身心俱に安泰である。恐らくは我と此氣味を同じうする者は、綺里季と角里先生ぐらゐのものであらう。

小臺

新樹低如帳。小臺平似掌。
六尺白藤牀。一莖青竹杖。
風飄竹皮落。苔印鶴迹上。
幽境與誰同。閒人自來往。

【語義】小臺の景を敍した詩である。

【詩意】新綠の樹木が垂れて帳の如く小臺を繞り、小臺は掌のやうに平である。そこに六尺ばかりの白藤のこしかけがあり、一本の青竹の杖がある。風は新竹の皮を吹き落し、苔の上には鶴の足迹がついてゐる。この幽境をば誰と共に賞翫するかといふに、閒人があつて招かずとも時時遊びに來るのだ。

睡後茶興憶楊同州

昨晚飲太多。嵬峩連宵醉。
今朝餐又飽。爛熳移時睡。
睡足摩挲眼。眼前無一事。
信脚遶池行。偶然得幽致。
婆娑綠陰樹。斑駁青苔地。
此處置繩牀。傍邊洗茶器。
白瓷甌甚潔。紅爐炭方熾。
沫下麴塵香。花浮魚眼沸。
盛來有佳色。嚥罷餘芳氣。
不見楊慕巢。誰人知此味。

【字解】【一】嵬峩　醉ふ貌。太平廣記に、盧思道常晚醉、從姪貴日、阿父何度飲來凌晨嵬峩云云と。又歐陽修の詩に實歡正喧譁、醉醉已嵬峩とある。連宵は徹宵なり。【二】爛熳　熟眠の貌。杜甫の詩に衆鼎爛熳眠、喚起沽二醪一とある。【三】摩挲　こする。【四】婆娑　影の動く貌。【五】斑駁　まだらなこと。【六】麴塵　黃色ないふ。【七】魚眼　沸渦なり。沸き立つこと魚眼の如くなればなり。【八】白瓷　白色の磁器。【九】麴塵　淡

【題義】晝寢をした後で茶を飲み、同州刺史たる楊汝士（字は慕巢）を憶うた詩である。

【詩意】昨晩は酒を飲み過ぎたので朝まで醉ひ、今朝は飯を食ひ過ぎたのでグッスリ眠つてしまつた。眠り飽き眼をこすつて起きても此といふ仕事もないので、足に信せて池のまはりを散歩し、偶然幽致を悟つた。新樹の綠が影を搖かし、地上には青苔が斑に生えてゐる。そこに繩牀を置き、その傍で茶器を洗ひ、白瓷の甌を潔らかにし、紅爐の火を盛にして、花の浮ぶが如き沸湯を灌いで茶を煎じ、之を茶椀に盛れば淡黃色の沫が香しく滴り、嚥んだあとまで芳氣が殘る。楊慕巢を置いては世に此味を知る者はない。

題文集櫃

破柏作書櫃。櫃牢柏復堅。
收貯誰家集。題云白樂天。
我生業文字。自幼及老年。
前後七十卷。小大三千篇。
誠知終散失。未忍遽棄捐。
自開自鏁閉。置在書帷前。

文集の櫃に題す

柏を破りて書櫃を作る、櫃牢くして柏復堅し。
收め貯ふるは誰が家の集ぞ、題して白樂天と云ふ。
我生れて文字を業とし、幼より老年に及ぶ。
前後七十卷、小大三千篇。
誠に終に散失するを知るも、未だ遽に棄捐するに忍びず。
自ら開き自ら鏁閉し、置きて書帷の前に在り。

身是鄧伯道。世無王仲宣。
只應分付女。留與外孫傳。

【字解】〔一〕書帷　書齋の帷。〔二〕鄧伯道　晉の鄧攸、字は伯道、終身子なし。〔三〕王仲宣　三國魏の人、名は粲、字は仲宣、博物多識にして問へば知らざるなし。〔四〕分付　たのむ。〔五〕外孫　監察御史譙弘善の子、名は關童。

【題義】己の文集の櫃に題した詩である。

【詩意】柏樹を伐つて書櫃を作り、堅牢な書櫃が出來あがつたので、その中に我が文集を收めることにした。我は幼より文詞を作り、既に前後七十卷大小三千餘篇の詩を成した。いつかは散失するものと覺悟してはゐるが、今遽に棄て去るには忍びないので、自ら此櫃に收めて書帷の前に置くのである。我は鄧伯道と同じく子といふものを持たず、世に王仲宣の如き物覺えのよい人はないから、此集を我が女に言ひ附け外孫に授けて世に傳へようと思ふのである。

旱熱二首

彤雲散不雨。赫日吁可畏。
端坐猶揮汗。出門豈容易。
忽思公府內。青衫折腰吏。

旱熱　二首

彤雲散じて雨らず、赫日吁畏る可し。
端坐するも猶汗を揮ふ、門を出づる豈容易ならんや。
忽ち思ふ公府の內、青衫折腰の吏。

復想驛路中。紅塵走馬使。
征夫更辛苦。逐客彌顚頓。
日入尚趨程。宵分不遑寐。
安知北窓叟。偃臥風颯至。
簟拂碧龍鱗。扇搖白鶴翅。
豈唯身所得。兼示心無事。
誰言苦熱天。元有清涼地。

【字解】【一】彤雲　赤い雲。【二】赫日　照りかがやく日。可レ畏は左傳の注に夏日可レ畏、冬日可レ愛とある。【三】揮レ汗　汗を拭ふ。【四】公府　役所。【五】青衫　官服なり。折腰は腰を折りて上官の前に拜伏すること。【六】征夫　旅客。【七】逐客　貶謫せられる人。顚頓は疲せ衰へること。【八】程　一日の旅程。【九】宵分　夜分、夜半。【一〇】北窓叟　樂天自ら謂ふ。

【題義】靜に旱熱の日を送る閒適の狀を述べた詩である。

【詩意】雲散じて雨ふらず、日が燬くやうに照りつける。ぢッとしてゐてさへ汗を拭ふに暇がないくらゐだから、一歩でも門を出るのは容易でない。青衫をまとうて上官の前に拜伏する役人や、紅塵の中に馬を走らせる驛路の使やは、思ひ遣るだに氣の毒である。特に長途に辛苦する旅客や、日夜顚頓する貶客は、日が暮れても旅程を追ひ、夜半になつても寐ることも出來ない。ただ北窓の下に偃臥する我は、龍の鱗のやうな簟の上に横はつて鶴の翅の扇を搖かし、身が安泰であるばかりでなく心も亦無事である。こんな清涼の地に居れば、熱天に苦しむ人があるとは殆ど信ぜられないくらゐだ。

〔二〕

勃勃旱塵氣。炎炎赤日光。
飛禽颭將墜。行人渴欲狂。
壯者不耐飢。飢火燒其腸。
肥者不禁熱。喘急汗如漿。
此時方自悟。老瘦亦何妨。
肉輕足健逸。髮少頭清涼。
薄食不飢渴。端居省衣裳。
數匙粱飯冷。一領綃衫香。
持此聊過日。焉知畏景長。

【字解】【一】飢火　腹飢ゑて耐へ難く火の中に燒くるが如きをいふ。【二】薄食　少し食ふ。【三】端居　閒居なり。【四】粱

飯。米の飯。【六】一領。一枚。葛衫は葛の上衣。【六】長景。夏の日をいふ。左傳の注に夏日可レ長、冬日可レ愛とある。

【詩意】熱氣が盛に起り赤い日が照り輝き、飛鳥は爲に目をまはし、行人は渴して狂せんばかりである。されば壯者は飢ゑて火の腹中に燒くるが如く、肥者は熱に耐へずして息が急に汗が流れる。こんな時は結句老いて瘦せてゐる方がましである。肉が輕く足も達者で、髮が少く頭も涼しく、少し食へば飢ゑることもなく、閒居して衣裳を省き數匙の冷飯を食つて一枚の葛衫をひつかけてゐる。かうしてゐれば夏の熱さなどは少しも畏るるに足らない。

偶作二首

戰馬春放歸。農牛冬歇息。
何獨徇名人。終身役心力。
來者殊未已。去者不知還。
我今悟已晚。六十方退閒。
猶勝不悟者。老死紅塵間。

【字解】【一】歇息　休息する。

偶作　二首

戰馬は春放たれて歸り、農牛は冬に歇息す。
何ぞ獨り名を徇ふ人のみ、身を終るまで心力を役する。
來る者は殊に未だ已まず、去る者は還るを知らず。
我今悟ること已に晚く、六十方に退きて閒なり。
猶勝れり悟らざる者の、紅塵の間に老死するに。

【題義】ふと感ずる所を述べた詩である。

【詩意】戰馬は春になつて放たれて歸り、農牛は冬になつて休息してゐる。ただ名利を求むる人は生涯心力を勞し、來る者は已むことを知らず、去る者は還るを忘れてゐる。我は悟ることが晚く、六十になつて始めて閒地に退いた。それでも永く紅塵の間に老死して、生涯悟らずに終る者よりは遙にましである。

〔一〕

名無高與卑。未得多健羨。
事無小與大。已得多厭賤。
如此常自苦。反此或自安。
此理知甚易。此道行甚難。
勿信人虛語。君當事上看。

〔一〕

名は高と卑と無く、未だ得ざれば多く健羨す。
事は小と大と無く、已に得れば多く厭賤す。
此の如くなれば常に自ら苦しめり、此に反すれば或は自ら安し。
此理知ること甚だ易きも、此道行ふこと甚だ難し。
人の虛語を信ずる勿れ、君事上に當りて看よ。

【字解】【一】健羨　うらやむ。【二】厭賤　いとひいやしむ。

【詩意】名は高卑に拘らず、未だ得ざれば多く之を羨み、事は小大を論せず、已に得れば厭ひ賤むも

のである。名利を貪れば常に自ら苦しみ、名利を棄つれば心が安らかになる。此道理は知り易いけれども、行ふは容易でない。人の虚語を信ぜず、自ら事に當つて實驗せられよ。

池上作　西溪南潭、皆池中勝處也。

西溪風生竹森森。
南潭萍開水沈沈。
叢翠萬竿湘岸色。
空碧一泊松江心。
浦派縈廻誤遠近。
橋島向背迷登臨。
澄瀾方丈若萬頃。
倒影咫尺如千尋。
泛然獨遊邈然坐。
坐念行心思古今。
菟裘不聞有泉沼。
西河亦恐無雲林。
豈如白翁退老地。
樹高竹密池塘深。
華亭雙鶴白矯矯。
太湖四石青岑岑。
眼前盡日更無客。
膝上此時唯有琴。
洛陽冠蓋自相索。
誰肯來此同抽簪。

西溪・南潭、皆池中の勝處なり。

西溪風生じて竹森森、
南潭萍開いて水沈沈。
叢翠萬竿湘岸の色、
空碧一泊松江の心。
浦派縈廻して遠近を誤り、
橋島向背して登臨に迷ふ。
澄瀾方丈萬頃の若く、
倒影咫尺千尋の如し。
泛然獨り遊びて邈然として坐す、
坐念行心古今を思ふ。

【字解】【一】森森　茂盛の貌。
【二】萍　うきぐさ。沈沈は盛なる貌。
【三】叢翠　叢竹の綠。湘岸は湘水の岸。竹の名産地なり。
【四】空碧　池水の色。湖澤を泊といふ。松江は太湖の支流、今の吳淞江。
【五】方丈　一丈四方の廣さ。
【六】坐念行心　坐しては念ひ行きては思ふ。
【七】菟裘　春秋の時の魯の邑。魯の隱公が隱居所を此に營みしより、後人官を退きて隱居するの義とす。
【八】西河　今の陝西省富同州府の地。春秋の時子夏此に居る。
【九】白翁　樂天自ら謂ふ。
【一〇】華亭　地名。今の江蘇省松江縣西の平原村。晉の陸機將に死せんとする時嘆じて曰く、華亭鶴唳可二復聞一乎と。矯矯は勇む貌。
【一一】太湖　湖名。笠澤、五湖等の名あり、江蘇浙江二省に跨る。岑岑は聳ゆる貌。
【一二】盡日　終日。
【一三】冠蓋　冠と車蓋。高位高官の人をいふ。
【一四】抽簪　官を辭するをいふ。

菟裘には聞かず泉沼有るを、
西河亦恐る雲林無きを。
豈如かんや白翁退老の地、
樹高く竹密にして池塘深きに。
華亭の雙鶴白くして矯矯、
太湖の四石青くして岑岑。
眼前盡日更に客無し、
膝上此時唯琴有り。
洛陽は冠蓋自ら相索む、
誰か肯て此に來りて同じく簪を抽かん。

【題義】樂天の洛陽の邸内に在る池の邊で作つた詩である。

【詩意】西溪の竹が風に吹かれて綠を漂はし、南潭の水が茫茫として碧を湛へ、浦曲が縈廻して人を遠近を誤らしめ、橋や島が向背して登臨に迷はしめる。澄瀾の廣さは方丈に過ぎないが萬頃もあるかと思はれ、倒にうつる影は咫尺に過ぎないが千尋もあるかと思はれる。舟を泛べて獨り遊び、坐

しては念ひ行きては思ひて古今を回想するに、隱公の菟裘にも此の如き泉沼があつた事を聞かず、子夏の閑居してゐた西河にも恐らく此の如き雲林は無かつたであらう。されば我が退老の地の樹高く竹茂り池深きには比すべくもなかつた。況んや我が家には二羽の鶴の矯矯たるもあり、四個の太湖石の青青と聳ゆるもあり、眼前には終日來客もなく、膝の上には唯琴のあるのみである。洛陽は官人の常に相索むる處であるが、誰か此に來て俱に退老する人はないであらうか。

何處堪避暑

何處堪避暑。林間背日樓。
何處好追涼。池上隨風舟。
日高飢始食。食竟飽還遊。
遊罷睡一覺。覺來茶一甌。
眼明見青山。耳醒聞碧流。
脫襪閒濯足。解巾快搔頭。
如此來幾時。已過六七秋。
從心至百骸。無一不自由。

何れの處か暑を避くるに堪ふる

何れの處か暑を避くるに堪ふる、林間日に背く樓。
何れの處か涼を追ふに好き、池上風に隨ふ舟。
日高くして飢ゑて始めて食し、食し竟りて飽きて還遊ぶ。
遊罷めて睡一たび覺め、覺め來りて茶一甌。
眼明かにして青山を見、耳醒めて碧流を聞く。
襪を脫して閒に足を濯ひ、巾を解きて快く頭を搔く。
此の如くにして來る幾時ぞ、已に過ぐ六七の秋。
心より百骸に至るまで、一として自由ならざるは無し。

拙退是其分。榮耀非所求。
雖被世間笑。終無身外憂。
此語君莫怪。靜思吾亦愁。
如何三伏月。楊尹謫虔州。

【字解】【一】一瓮　一個の瓶。【二】襪　靴下、足袋。【三】六七秋　六七年。【四】百骸　身體をいふ。【五】拙退　嗜慾の者の謙退すること。【六】三伏　夏至の後の第三の庚の日を初伏といひ、第四の庚の日を中伏といひ、立秋の後の第一の庚の日を末伏といふ。【七】楊尹　楊虞卿、字は師皐、京兆尹より虔州司戶參軍に貶せられ、開成元年卒す。樂天の妻は此人の從妹なり。

【題義】首句を取つて題としたのである。

【詩意】暑を避くるには林間の日に背いた樓があり、涼を納れるには池上の風に隨ふ舟がある。飢ゑては食ひ飽けば遊び、倦めば睡り覺むれば一甌の茶を啜り、眼が冴えた所で青山を眺め、耳が冴えれば碧水の流を聞き、足を濯ひ頭を搔きて快を取る。洛陽に退いて此の如き生涯を送ること既に六七年になるので、心も身も一として自由ならぬはない。愚者の退くのは固より其分であつて榮耀は吾が求むる所ではないから、たとひ世人の笑を買ふとも身外の憂は全然ない。此語を聞きて君怪む勿れ、吾は楊尹が三伏の暑中に虔州に謫せられたことを愁へてゐる。

詔下

昨日詔下去罪人。
今日詔下得賢臣。
進退者誰非我事。
世間寵辱常紛紛。
我心與世兩相忘。
時事雖聞如不聞。
但喜今年飽飯喫。
洛陽禾稼如秋雲。
更傾一樽歌一曲。
不獨忘世兼忘身。

詔下る

昨日詔下りて罪人を去り、
今日詔下りて賢臣を得たり。
進退する者は誰ぞ我が事に非ず、
世間の寵辱常に紛紛たり。
我が心と世と兩ながら相忘る、
時事聞くと雖も聞かざるが如し。
但喜ぶ今年飽くまで飯を喫ひ、
洛陽の禾稼秋雲の如くなるを。
更に一樽を傾けて一曲を歌ふ、
獨り世を忘るるのみならず兼ねて身を忘る。

【題義】詔の下れるに感じて作つた詩である。

【詩意】昨日は詔が下つて賢臣を擧げた。進められた者は誰で退けられた者は誰だか、我の關知する所ではないが、世間の寵辱は紛紛として定めなきものである。我が心は世と相忘れてゐるから世間の時事は聞いても聞かないと同じである。ただ喜ばしい事は洛陽の稻が豐熟して、飽くまで飯を食ふことが出來る。因つて更に一樽の酒を傾け一曲の歌を歌ひ、獨り世を忘るるのみならず、我が身をも忘れた。

七月一日作

七月一日天。秋生履道里。
閒居見清景。高興從此始。
林間暑雨歇。池上涼風起。
橋竹碧鮮鮮。岸莎青靡靡。
蒼然古盤石。清淺平流水。
何言中門前。便是深山裏。
雙僮侍坐臥。一杖扶行止。
飢聞麻粥香。渴覺雲湯美。

胡麻粥　雲母湯。

七月一日の作

七月一日の天、秋は履道の里に生ず。
閒居して清景を見、高興此れより始まる。
林間暑雨歇み、池上涼風起る。
橋竹碧鮮鮮、岸莎青くして靡靡。
蒼然たり古盤石、清淺なり平流水。
何ぞ中門の前と言はん、便ち是れ深山の裏。
雙僮坐臥に侍し、一杖行止を扶く。
飢ゑて麻粥の香しきを聞き、渴して雲湯の美なるを覺ゆ。

平生所レ好物。今日多在レ此。　平生好む所の物、今日多く此に在り。
此外更何思。市朝心已矣。　此外更に何ぞ思はん、市朝心已みぬ。

【字解】【一】履道里　洛陽の里の名。【二】岸莎　岸に生えてゐる細草。

【題義】七月一日に作つた詩で、初秋閑居の景況を敍した詩である。

【詩意】七月一日となり秋氣がこの履道里にもやつて來た。閑居して清澄の景を見、漸く高興を起すであらう。今や林間には雨が歇み池上には涼風が起り、橋や竹が鮮鮮として岸の細草が靡靡としてゐる。古色を帶びた巖石の横はる處を清く淺い水がさらさらと流れてゐる。まるで奥山のやうで中門の前とは思はれない。二人の僮兒が坐臥に侍し、一本の杖が行止に伴ひ、飢ゑては胡麻粥の香氣を聞き、渴しては雲母湯の美味を覺える。我が好む所のものが多く此處に存在するから、名利を棄てた今日に於ては、此外更に求むる所は何もない。

開レ襟

開レ襟何處好。竹下池邊地。　襟を開く何れの處か好き、竹下池邊の地。
餘熱體猶煩。早涼風有レ味。　餘熱體猶煩はしく、早涼風に味有り。
黄萎槐蘂結。紅破蓮芳墜。　黄萎みて槐蘂結び、紅破れて蓮芳墜つ。
無レ奈毎年秋。先來入レ衰思。　奈んともする無し毎年の秋、先づ來りて衰思に入る。

【字解】【一】槐蘂　槐の花。槐は初夏花を開く。其色黄白。【二】衰思　衰老せる心。

【題義】襟を開いて涼を納れる意。

【詩意】竹下池邊の好地を選び、襟を開いて涼を納れる。殘暑退かずして體猶煩けれども早涼の風が稍快く感ぜられる。黄色な槐の花は萎み紅蓮の花も破れて、何處を見ても秋の色ならぬはない。毎年秋になれば哀愁が先づ我が衰老せる心に食ひ入るのを奈んともすることが出來ない。

自レ賓客一遷二太子少傅分司一

頭上漸無レ髪。耳間新有レ毫。　頭上漸く髪無く、耳間新に毫有り。
形容逐レ日老。官秩隨レ年高。　形容日を逐ひて老い、官秩年に隨ひて高し。
優饒又加レ俸。閒穩仍分レ曹。　優饒又俸を加へられ、閒穩仍曹を分つ。
飲食免二藜藿一。居處非二蓬蒿一。　飲食は藜藿を免れ、居處は蓬蒿に非ず。
何言家尚貧。銀槎提綠醪。　何ぞ言はん家尚貧しと、銀槎綠醪を提ぐ。

賓客より太子少傅分司に遷る

勿謂身未貴。金章照紫袍。
誠合知止足。豈宜更貪饕。
默然心自問。於國有何勞。

【字解】【一】分曹　部を分ちて事を治むること。東都に分司するをいふ。【二】藜藿　あかざと豆の葉。【三】蓬蒿　よもぎの生えた荒地。【四】銀榼　銀の杯。絲醪は絲色の酒。【五】金章　黄金の官印。紫袍は官服なり。紫の上衣。【六】止足　老子に知足不辱、知止不殆とある。【七】貪饕　貪ること。

【題義】太子賓客（官名）から太子少傅・分司東都（官名）に轉任を命せられた時の作で、開成元年樂天年六十五の時である。

【詩意】腦天には段段毛がなくなり耳のあたりには白毛が殖えて來て、容色は日增しに衰へるが官位は年年高くなる。今年も陞進して俸祿を加へられ、東都に分司して益〻閑散になり、相當な物を食つて相當な處に住み、銀の杯で綠酒を傾け、金印が紫袍を照してゐるのだから、決して貧賤だとは謂はれない。人は止まる所を知り足ることを知るのが大事だから、自分は此上富貴にならうなどとは毛頭思はず、ただ獨り心に問うてゐる。「一體お前は國家に如何なる功勞があつたのだ。格別功勞はないではないか」と。

自在

(一)杲杲冬日光。明暖眞可愛。
移榻(二)向陽坐。擁裘仍解帶。
小奴搥我足。小婢搔我背。
自問我爲誰。胡然獨安泰。
安泰良有以。與君論梗槩。
心了事未了。飢寒迫於外。
事了心未了。念慮煎於內。
我今實多幸。事與心和會。
內外及中間。了然無一礙。
所以日陽中。向君言自在。

【字解】【一】杲杲　明なる貌。【二】榻　こしかけ。【三】與君　君は讀者を指して言ふ。與はタメニと訓す。梗槩は大略。

【題義】身心の自由な狀を述べた詩である。

【詩意】冬の日が明るく暖かで眞に愛すべきである。因つて榻を移して日當りのよい處に陣取り、

裘を擁し帶を解いてくつろぎ、小奴をして足を打たせ、小婢をして背を搔かせ、乃ち自ら問うた。「一體俺は何物であつて、此の如き安泰を得てゐるのであらうか」と。併し考へて見れば安泰を得てゐるには大に理由があるのだ。少しく君の爲に述べて見よう。「心は能く事理を悟つて安んじてゐても事物が思ふに任せぬ時は飢寒が外から迫つて來る。事物は思ふ儘になつても心に滿足を知らなければ心中に憂が絶えない。所が我は幸にも事と心とが能く和會し、內にも外にも中間にも何の礙もなく、身心ともに自由自在である。故に此の通り日なたぼつこをしながら君の爲に自在を說いてゐるのだ。」

詠史　九年十一月作。

秦磨利刀斬李斯。
齊燒沸鼎烹酈其。
可憐黃綺入商洛。
閒臥白雲歌紫芝。
彼爲菹醢机上盡。
此作鸞鳳天外飛。

詠史　九年十一月の作。

秦は利刀を磨ぎて李斯を斬り、
齊は沸鼎を燒きて酈其を烹る。
憐む可し黃綺商洛に入り、
閒に白雲に臥して紫芝を歌ふ。
彼は菹醢と爲りて机上に盡き、
此は鸞鳳と作りて天外に飛ぶ。

【字解】【一】酈其　酈食其なり。漢に仕へて齊の七十餘城を說き下した。後韓信の齊を襲ふに及び、齊は食其が以て己を賣るとなし遂に之を烹殺した。【二】可憐　あつぱれ。稱讚の語。黃綺は夏黃公・綺里季、商山四皓中の人。【三】紫芝　古今樂錄に、四皓隱居、高祖聘之、四皓仰天歎而作歌、有曰、曄曄紫芝、可以療飢、唐虞往矣、吾當安歸」とある。【四】菹醢　肉醬なり。

去者逍遙來者死。
乃知禍福非天爲。

去る者は逍遙として來る者は死す、
乃ち知る禍福は天爲に非ざるを。

【題義】太和九年十一月甘露の變について所感を述べたのである。初め文宗皇帝が宰相李訓・鄭注等と宦官を誅せんことを謀り、訓は人をして「金吾廳事の後の石榴の上に甘露が降つた」と奏せしめ、帝は宰相に命じて先づ往きて之を視しめた。訓は陽つて「眞に非ず」と言上した。帝は更に宦官仇士良をして諸の宦官を率ゐて往き視しめた。士良至り、兵を執る者無數なるを見、驚き走りて變を告げ、遂に一味の者を殺し、李訓も人の殺す所となり、かくて宦官を誅せんとの企ては失敗に終つた。此騷ぎを甘露の變といふ。

【詩意】秦は利劍を磨ぎて李斯を斬り、齊は沸湯の中に酈食其を烹殺した。勢利に溺るる者の最後は皆この通りである。夏黃公や綺里季は遁れ世を遁れて商山に隱れ、白雲に臥して紫芝曲を歌つた。彼は菹醢にせられて机上に盡き、此は鸞鳳となつて天外に飛翔し、一は逍遙として樂み一は身を亡ぼした。これを觀ても禍福は天爲ではない人爲であることがわかる。

因夢有悟

交友淪歿盡。悠悠勞夢思。
夢に因つて悟るあり
交友淪歿し盡き、悠悠として夢思を勞す。

平生所厚者。昨夜夢見之。
夢中幾許事。枕上無多時。
欸曲數杯酒。從容一局碁。

（春酒、皆夢中所見事。）

初見韋尚書。（弘景）金紫何輝輝。
中遇李侍郎。（建）笑言甚怡怡。
終爲崔常侍。（元亮）意色苦依依。
一夕三改變。夢心不驚疑。
此事人盡怪。此理誰得知。
我粗知此理。聞於竺乾師。
識行妄分別。智隱迷是非。
若轉識爲智。菩提其庶幾。

平生厚き所の者、昨夜夢に之を見る。
夢中幾許の事ぞ、枕上多時無し。
欸曲す數杯の酒、從容たり一局の碁。

初めに見る韋尚書、金紫何ぞ輝輝たる。
中ろ遇ふ李侍郎、笑言甚だ怡怡。
終りは崔常侍たり、意色苦だ依依。
一夕に三たび改變、夢心驚き疑はず。
此事人盡く怪む、此理誰か知るを得ん。
我粗ぼ此理を知る、竺乾師に聞けり。
識行妄りに分別すれば、智隱れて是非に迷ふ。
若し識を轉じて智と爲さば、菩提其れ庶幾からんと。

【字解】【一】 昨夜　死亡する。【三】 欸欸　憂ふる貌。詩經に悠悠我思とある。【四】 欸曲　うちとけて樂む。【五】 金紫　金印紫綬。【六】 依依　なつかしげなる貌。【七】 竺乾師　竺乾公ともいふ。佛の異稱。【八】 識行　識は佛語に六識・七識・八識・九識等の別あり。眼・耳・鼻・舌・身・意の六種の心識を六識といふ。行は身・口・意の三業に造作する行業をいふ。【八】 轉識爲智　成唯識論卷十に、佛果の四智を明して第八識を轉じて大圓鏡智を、第七識を轉じて平等性智を、第六識を轉じて妙觀察智を、第五識を轉じて成所作智を得となし、是を佛果の四智心品と呼べり。【九】 菩提　梵語。猶ほ正智・正覺といふが如し。

【題義】 夢に因つて感悟する所ありしことを述べた詩である。

【詩意】 友達が殆ど死亡し盡したので憂愁のあまり夢にまで見るやうになつた。昨夜も平生親しく交つた人人を夢に見た。枕上夢中、僅の時間に、俱に酒を飲んだり碁を圍んだりした。初めに見たのは韋尚書で金印紫綬がぴかぴかとしてゐた。中ごろは李侍郎に遇つた。言笑自若として生前と同じく樂んだ。終りには崔常侍を見た。彼も春戀の情が深かつた。此の如く一夜の中に三たび變改したが、夢中の心は少しも驚き怪しまなかつた。こんな事は人の盡く怪む所であるが、我は其理を知つて少しも怪まない。我嘗て佛理を聞けるに、「識行が妄りに分別すれば智が隱れて是非に迷ふものであるが、若し識を轉じて智となせば、正智を得られるであらう」といふ。誠に其通りである。

春遊

上馬臨出門。出門復逡巡。
回頭問妻子。應怪春遊頻。
誠知春遊頻。其奈老大身。

春遊

馬に上りて門を出づるに臨み、門を出でて復逡巡す。
頭を回して妻子に問ふ、應に春遊の頻なるを怪むべしと。
誠に春遊の頻なるを知れども、老大の身を其奈せん。

朱顏去復去。白髮新更新。
請君屈十指。爲我數交親。
大限年百歲。幾人及七旬。
我今六十五。走若下阪輪。
假使得七十。祇有五度春。
逢春不遊樂。但恐是癡人。

【字解】【一】朱顏　紅顏なり。わかわかしき顏色。【二】交親　交友なり。【三】七旬　七十歳。【四】癡人　愚人。

【題義】春の行樂を述べた詩である。

【詩意】馬に乘つて出かけようとしたが、復躊躇して、妻子に問うた。「お前等も俺の出遊の屢なるを怪むであらう」と。出遊の屢なるは自分でも心得てゐるが年老いた身に取つては無理はないのだ。紅顏は遠の昔に過ぎ去つて一年增しに白毛が殖えるばかりだ。指を折つて我が友を數へて見給へ。人生は百年を限とするが、七十まで生きた者が幾人あるであらう。我も今は六十五で、歳月は阪を下る車のやうに速い。たとひ七十まで生きるとしても、あと五年ではないか。だから春に逢つたら遊樂するがよいので、若し春に逢つても遊樂せぬなら、それは愚の至りである。

題天竺南院贈開元旻清四上人

天竺の南院に題し開・元・旻・清四上人に贈る

雜芳閒草合。繁綠巖樹新。
山深景候晚。四月有餘春。
竹寺過微雨。石逕無纖塵。
白衣一居士。方袍四道人。
地是佛國土。人非俗交親。
城中山下別。相送亦殷勤。

【字解】【一】閒草　名もない雜草。【二】景候　景物氣候。【三】白衣一居士　樂天自ら謂ふ。居士とは佛を奉ずる俗人の稱。【四】方袍　僧衣なり。道人は僧。【五】佛國土　佛の居る所の地。寺をいふ。江淹の詩に地是佛國土とある。【六】俗交親　俗友。【七】殷勤　ねんごろなること。

【題義】天竺寺（杭州に在る寺の名）の南院に題し、兼ねて開・元・旻・清（僧の名は一字を略するを常とす）の四僧に贈つた詩である。

【詩意】名も知らぬ雜草が茂り合ひ、巖石の間に綠樹が生ひ繁り、山奥のこととて時候も景物も晩れてゐて、四月でもまだ春色が殘つてゐる、微雨が過ぎて石逕苔滑なる處、白衣の一居士たる我は

方袍の四道人と相語らふ。場所は佛寺であり、人は俗人ではない。今我は城下に君等は山下に各〻相別るるに方り、更に殷勤に相送つた。

哭師皐

南康丹旐引魂廻。
洛陽籃輿送葬來。
北邙原邊草樹畔。
月苦烟愁夜過半。
妻孥兄弟號一聲。
十二人腸一時斷。
往者何人送者誰。
樂天哭別師皐時。
平生分義向人盡。
今日哀寃唯我知。

師皐を哭す

南康の丹旐魂を引きて廻り、
洛陽の籃輿葬を送りて來る。
北邙原邊草樹の畔、
月苦かに烟愁へて夜半を過ぐ。
妻孥兄弟號ぶこと一聲、
十二人腸一時に斷ゆ。
往く者は何人ぞ送る者は誰ぞ、
樂天師皐に哭別する時。
平生の分義人に向ひて盡き、
今日の哀寃唯我知る。

【字解】【一】南康　郡名。即ち虔州。丹旐は喪家用ふる所の銘旌。
【二】北邙原　洛陽の北に在る墓地。
【三】妻孥　妻子。

我知何益徒垂淚。
籃轝廻竿馬廻轡。
何日重聞掃市歌。
誰家收得琵琶妓。

師皐醉後、善歌二掃市詞一、又有二小妓一工二琵琶一、不レ知今幕在二何處一。

蕭蕭風樹白楊影。
蒼蒼露草青蒿氣。
更就墳邊哭一聲。
與レ君此別終天地。

我知るも何の益あらん徒に涙を垂る、
籃轝は竿を廻らし馬は轡を廻らす。
何れの日か重ねて聞かん掃市の歌、
誰が家か收め得たる琵琶の妓。

蕭蕭たる風樹白楊の影、
蒼蒼たる露草青蒿の氣。
更に墳邊に就きて哭すること一聲、
君と此に別れて天地を終ふ。

【題義】師皐とは楊虞卿の字である。虞卿の從妹は樂天の妻である。彼は京兆尹より虔州司戶參軍に貶せられ、開成元年虔州で歿した。此詩は其死を哭したのである。
【詩意】虔州から遺骸を持ち歸り、洛陽で送葬の式を擧げた。北邙山の草樹の邊は月苦え烟愁へ、妻子兄弟十二人皆腸を斷つ思がして、夜半に至るも尙去るに忍びなかつた。我も亦家族に伍して彼に哭別した。平生は彼に對して親交を盡したが、今日の哀寃は我獨り知るのみで、彼は何も知らない。

【三】籃轝　籃輿に同じ。
【四】蕭蕭　風の淋しく吹く聲。白楊は墓に植ゑる木の名。
【六】青蒿　多年生の草の名。

いくら知つても何の役にも立たず、ただ泣くばかりであつた。やがて名殘を惜んで籃輿も馬も歸ることになつた。ああ何日また彼の掃市歌を聞かれるであらう。あの琵琶の上手な小妓は誰の手に落ちたであらう。風が淋しく白楊を吹いて露深き青蒿の香が漂ふ。歸るに臨んで更に墳墓に就いて哭泣し、永久の別れを告げた。

隱几贈客

宦情本淡薄。年貌又老醜。
紫綬與金章。於予亦何有。
有時獨隱几。荅然無所偶。
臥枕一卷書。起嘗一盃酒。
書將引昏睡。酒用扶衰朽。
客到忽已酣。脫巾坐搔首。
疎頑倚老病。容恕慙交友。
忽思莊生言。亦擬鞭其後。

几に隱りて客に贈る

宦情本淡薄、年貌又老醜。
紫綬と金章と、予に於て亦何か有らん。
時有りて獨り几に隱り、荅然として偶する所無し。
臥すときは一卷の書を枕とし、起くるときは一盃の酒を嘗む。
書は將て昏睡を引き、酒は用て衰朽を扶く。
客到りて忽ち已に酣なれば、巾を脫し坐して首を搔く。
疎頑老病に倚り、容恕交友に慙づ。
忽ち莊生の言を思ひ、亦其の後れたるを鞭たんと擬す。

【字解】【一】宦情　官途を求むる心。【二】荅然　嗒然に同じ、解體の貌。莊子齊物論に南郭子綦隱几而坐、仰天而噓、嗒然似喪其耦とある。偶は耦に同じ。【三】容恕　寛容して無禮を宥すこと。【四】莊生　莊子。【五】鞭其後　莊子達生篇に、善養生者若牧羊然、視其後者而鞭之とある。既に其内を養へる者は即ち當に其外を養ふべきに喩ふ。

【題義】脇息によりかかつて客に贈つたといふ意。

【詩意】官達の念も薄く老いて醜くもなつた今日に於ては、金印紫綬も我に取つては、肯て貴ぶには足らない。ただ時時獨り脇息により自他を忘れて茫然としてゐて、寐る時は書卷を枕とし起きては一杯の酒を飲む。書卷は睡を催す爲で、酒は衰朽を扶ける爲である。客が來た時は已に酣醉し頭巾を脫いで頭を搔く。かかる無作法な事をするのも老病の爲であるから偏に交友の容恕を乞ふ次第である。忽ち莊子の言を思ひ其の後れたる者を鞭つて我が生を養はうと欲してゐる。

夏日作

葛衣疎且單。紗帽輕復寬。
一衣與一帽。可以過炎天。
止於便吾體。何必被羅紈。
宿雨林笋嫩。晨露園葵鮮。

夏日の作

葛衣疎にして且單なり、紗帽輕くして復寬し。
一衣と一帽と、以て炎天を過ごす可し。
吾が體に便するに止まる、何ぞ必ずしも羅紈を被らん。
宿雨林笋嫩かに、晨露園葵鮮かなり。

烹葵炮嫩笋。可以備朝餐。
葵を烹て嫩笋を炮にし、以て朝餐に備ふ可し。
止於適吾口。何必飫腥羶。
吾が口に適するに止まる、何ぞ必ずしも腥羶に飫かん。
飯訖盥漱已。捫腹方果然。
飯訖りて盥漱し已み、腹を捫すれば方に果然たり。
婆娑庭前步。安穩窓下眠。
婆娑として庭前に步み、安穩にして窓下に眠る。
外養物不費。內歸心不煩。
外養物費えず、內歸心煩はしからず。
不費用難盡。不煩神易安。
費えざれば用盡き難く、煩はしからざれば神安んじ易し。
庶幾無夭閼。得以終天年。
庶幾くは夭閼すること無く、以て天年を終るを得ん。

【字解】【一】羅紈　薄絹。【二】宿雨　ながあめ。林笋は竹林中の筍。【三】園葵　菜園の葵。葵は野菜の名。【四】腥羶　肥肉なり。【五】果然　腹の飽く貌。【六】婆娑　影の動く貌。【七】外養　口腹の養。【八】內歸　心が內に歸る。【九】夭閼　妨礙する。

【題義】夏日閒居の情狀を述べた詩である。

【詩意】葛衣は疎單で紗帽は輕寬である。この一衣と一帽とを以て炎天を過ごすことが出來る。要は吾が身に便するに在るのだから、敢て薄絹などを用ひる必要はない。宿雨が降つて筍が嫩かに育ち、朝露を帶びて野菜が鮮かである。この野菜を烹、筍を炮にすれば、以て朝食に供するに足りる。要は吾が口に適するに在るのだから、必ずしも肥肉を要せぬのである。食後に盥漱をして、張つてゐる腹を撫で、暫く庭前を散步して窓下に安臥する。かくの如く身の養ひにも格別の費用がかからず、心が內に落著いて煩惱がない。庶幾くは自然を妨げずに天壽を全うし得るであらう。

晚涼偶詠

日下西墻西。風來北窓北。
日は西墻の西に下り、風は北窓の北に來る。
中有逐涼人。單牀獨棲息。
中に涼を逐ふ人有り、單牀獨り棲息す。
飄蕭過雲雨。搖曳歸飛翼。
飄蕭として雲雨過ぎ、搖曳として飛翼歸る。
新葉多好陰。初筠有佳色。
新葉は好陰多く、初筠は佳色有り。
幽深小池館。優穩閒官職。
幽深なり小池館、優穩なり閒官職。
不愛勿復論。愛亦不易得。
愛せざれば復論ずる勿し、愛するも亦得易からず。

【字解】【一】單牀　ひとつの廂蓬。【二】飄蕭　雨風の音。【三】搖曳　ゆらゆら搖く貌。【四】初筠　若竹。

【題義】晚涼を追ひ得て感懷を詠じた詩である。

【詩意】日は西牆の西に傾き、風は北窓の北に吹いて來る。我は其中の一つの寢臺にねころんで涼を納れてゐる。そよそよと雨風が過ぎて塒に就く飛鳥も歸つた。あたりを見れば新葉の陰が美しく、若

竹の色も鮮かである。幽深なる小池館に起臥し、閑散な職を奉じて氣樂に暮してゐるのも決して棄てたものではない。かかる生活を好まぬ人は論外であるが、好むからとて直に得られるものではない。

酬牛相公宮城早秋寓言見示。兼呈夢得 時夢得有疾。

牛相公が宮城早秋の寓言を示されしに酬い、兼ねて夢得に呈す 時に夢得疾有り。

七月中氣後。金與火交爭。　七月中氣の後、金と火と交〻爭ふ。
一聞白雪唱。暑退清風生。　一たび白雪の唱を聞き、暑退きて清風生ず。
碧樹未搖落。寒蟬始悲鳴。　碧樹未だ搖落せず、寒蟬始めて悲鳴す。
夜涼枕簟滑。秋燥衣巾輕。　夜涼しくして枕簟滑に、秋燥きて衣巾輕し。
疏受老慵出。劉楨疾未平。　疏受老いて出づるに慵く、劉楨疾未だ平からず。
何人伴公醉。新月上宮城。　何人か公に伴ひて醉ふ、新月宮城に上る。

【字解】【一】牛相公　牛僧孺、字は思黯、文宗の朝再び相となる。寓言は寄託する所ある言なり。【二】中氣　二十四氣を以て十二個月に分配するに、當月の首を以て節氣となし、當月の中を以て中氣となす。立秋を七月節となし、處暑を七月中となす。【三】金　秋の氣。火は夏の氣。【四】白雪唱　善き詩。牛相公の詩をほめていふ。宋玉の文に、客有ㇾ歌ニ於郢中一者、其始曰ニ下里巴人一、國中屬而和者數千人、其爲ニ陽春白雪一、國中屬而和者數十人、以ㇾ是其曲彌高、其和彌寡とある。【五】疏受　漢の宣帝の時、太子少傅となる。樂天時に太子少傅たり。故に自ら疏受に比するなり。【六】劉楨　三國魏の詩人。同姓の誤を以て劉夢得を以て之に比す。

【題義】牛僧孺が「宮城早秋の寓言」と題する詩を寄せられたのに酬い、兼ねて劉禹錫（字は夢得）に呈した詩である。

【詩意】七月の中氣の後になつても金氣と火氣とが相爭ひ、まだ暑氣が退かなかつたが、一たび白雪の詩を拜誦するに及んで、忽ち暑氣が退いて清風が起つた。綠樹は未だ凋落するに至らないが寒蟬が悲しげに鳴き始め、夜は何となく枕簟が冷かで衣巾の輕きを感ずるやうになつた。我は老いて出づるに慵く、夢得は疾未だ癒えず。新月の宮城に上る時、誰が相公に伴つて明月を賞し美酒を勸めるであらう。

小臺晚坐憶夢得

小臺晚坐夢得を憶ふ

汲泉灑小臺。臺上無纖埃。　泉を汲みて小臺に灑げば、臺上に纖埃無し。
解帶面西坐。輕襟隨風開。　帶を解き西に面して坐すれば、輕襟風に隨ひて開く。
晚涼閒興動。憶同傾一杯。　晚涼閒興動き、同じく一杯を傾けんことを憶ふ。
月明候柴戶。藜杖何時來。　月明かにして柴戶を候ふ、藜杖何れの時にか來る。

【字解】【一】柴戶　木の小枝を集めて作つた戶。茅屋といふが如し。【二】藜杖　あかざの杖。

【題義】夕に小臺の上に閑坐して劉禹錫（字は夢得）を憶うた詩である。

【詩意】泉を汲んで小臺に撒いたので臺上には塵一つ立たない。帶を解いて西に向つて坐すれば、襟が風に吹かれて自然にひろがる。晩涼に遇うて閑興が湧いて來て君と一緒に一杯を傾けたくなつた。折よく月も我が柴の戸を訪うた。君は何時藜の杖を曳いて、我を訪ふであらう。早く來てくれればよい。

種桃歌

食桃種其核。一年核生芽。桃を食ひて其核を種うれば、一年にして核芽を生ず。
二年長枝葉。三年桃有花。二年にして枝葉を長じ、三年にして桃に花有り。
憶昨五六歲。灼灼盛芬華。憶ふ昨五六歲、灼灼として芬華盛なり。
迨茲八九載。有減而無加。茲に迨びて八九載、減ずる有りて加ふる無し。
去春已稀少。今春漸無多。去春已に稀少、今春漸く多き無し。
明年後年後。芳意當如何。明年後年の後、芳意當に如何なるべき。
命酒樹下飲。停盃拾餘葩。酒を命じて樹下に飲み、盃を停めて餘葩を拾ふ。
因桃忽自感。悲吒成狂歌。桃に因りて忽ち自ら感じ、悲吒して狂歌を成す。

【字解】【一】灼灼　花の盛なる貌。詩經に灼灼其華とある。【二】迨茲　今日に及ぶ。八九載は八九年。【三】悲吒　悲み怒る。

【題義】桃花の年を經て衰ふるを見て己の老衰を悲んだ詩である。

【詩意】桃を食つて其核を蒔いて置いた所が一年たつて芽が生え、二年たつて枝葉が伸び、三年たつて花が咲いた。五六年を經た昔を追想するに灼灼として見事に花が咲いたものであつたが、八九年を經た今日に於ては、花が段段減つて來て、去年の春は已に大分少かつたが、今年の春は更に少くなつた。此調子で行つたら來年再來年はどうなるであらうか。誠に心細い次第である。因つて酒を命じて樹下に飲み、杯を停めて餘葩を拾つた。桃を悲むについて己の老衰を悲み、慨嘆のあまり此詩を作つた。

狂言示諸姪

世欺不識字。我忝攻文筆。世は字を識らざるを欺く、我は忝く文筆を攻む。
世欺不得官。我忝居班秩。世は官を得ざるを欺く、我は忝く班秩に居る。
人老多病苦。我今幸無疾。人老ゆれば病苦多し、我今幸に疾無し。
人老多憂累。我今婚嫁畢。人老ゆれば憂累多し、我今婚嫁し畢る。

狂言して諸姪に示す

心安不移轉。身泰無牽率。
所以十年來。形神閑且逸。
況當垂老歲。所要無多物。
一裘煖過冬。一飯飽終日。
勿言舍宅小。不過寢一室。
何用鞍馬多。不能騎兩匹。
如我優幸身。人中十有七。
如我知足心。人中百無一。
傍觀愚亦見。當己賢多失。
不敢論他人。狂言示諸姪。

心安くして移轉せず、身泰にして牽率せらるる無し。
所以に十年來た、形神閑にして且つ逸す。
況んや垂老の歲に當り、要むる所多物無し。
一裘煖かにして冬を過し、一飯飽きて日を終る。
言ふ勿れ舍宅小なりと、一室に寢ぬるに過ぎず。
何ぞ鞍馬の多きを用ひん、兩匹に騎ること能はず。
我が優幸の身の如きは、人中十に七有り。
我が足るを知るの心の如きは、人中百に一無し。
傍觀すれば愚も亦見、己に當れば賢も多く失ふ。
敢て他人に論せず、狂言して諸姪に示す。

【字解】【一】狀　侮る意。【二】班秩　官位。【三】憂累　うれへ、わづらひ。【四】閑且逸　ひまで安樂なこと。【五】兩匹　二頭の馬。【六】傍觀愚亦見　をか目八目で傍觀する時は愚者でもよくあらが見える。

【題義】狂言（此詩を作つたことをいふ）して姪たちに示したといふ意。

【詩意】世人は字を識らない者を馬鹿にするが、俺は忝くも文筆を學んでゐる。又世人は無官の人を馬鹿にするが、俺は忝くも官職を帶びてゐる。人は年老ゆれば病苦が多いものだが、俺は幸に病氣がない。又年老ゆれば累の多いものだが、俺は子女の婚嫁も終つて累はない。心が安いから彼是と氣の移ることもなく、身が泰かで此れといふ係累もない。故に十年以來身も心も閑暇無事である。まして年老いては慾念も少くなつて、一枚の裘を以て暖かに冬を越し、一飯を喫すれば一日滿腹してゐる。舍宅は小さいが寢るには一室あれば澤山だ。馬も少いが一時に二匹の馬に乘れる譯ではないから一匹あれば澤山だ。かう考へて見ると、俺ぐらゐ惠まれた男は十人の中に七人ぐらゐあるだらう。併し俺のやうに足ることを知つてゐる男は百人の中に一人もあるまい。傍觀者となれば愚者でも人のあちが見えるが、自分の事となると賢者でも案外見えないものだ。これは敢て他人には言はぬが、我が姪たるお前等にだけ聞かせるのだ。

偶以拙詩數首寄呈裴少尹侍郎蒙以盛製四篇一時酬和重投長句美而謝之

偶〻拙詩數首を以て裴少尹侍郎に寄呈す。蒙らすに盛製四篇を以てして一時に酬和す。重ねて長句を投じ、美して之を謝す

投君之文甚荒蕪。　君に投ずるの文甚だ荒蕪、

【字解】【一】荒蕪　拙劣。

數篇價値一束芻。
報我之章何璀璨。
纍纍四貫驪龍珠。
毛詩三百篇後得。
文選六十卷中無。
一麋麗龜絶報賽。
五鹿連拄難支梧。
高興獨因秋日盡。
清吟多與好風俱。
銀鉤金錯兩殊重。
宜上屏風張座隅。

【題義】樂天が自作の詩數首を裴少尹侍郎（少尹、侍郎は官名）に寄せた所が、裴は四首の詩を作つて之に酬いたので、樂天は更に此詩を寄せて裴の詩を稱美し且つ厚意を謝したのである。

【詩意】僕が貴下に獻じた詩は極めて拙劣で數篇の値が一束の草にも當らないほどである。然るに貴下が僕に酬いられた四首の詩は珠玉の如き立派な作で、詩經三百篇の後を繼ぎ、文選六十卷の中にもないほどの傑作である。かかる立派な詩を寄せられては殆ど返報の致しやうもなく、かくも手嚴しく挑戰せられては殆ど防ぎ止めやうも御坐らぬ。秋日に因つて高興を發し、好風と俱に清吟致して居ります。殊に其詩の書體が亦誠に見事で、屏風にでも張つて座隅に置くに宜しい。

【三】芻　草。【三】璀璨　玉の光。【四】纍纍　かさなる貌。驪龍珠は莊子に、千金之珠、必在二九重之淵、而驪龍頷下一とあり、四貫驪龍珠は四篇の詩に喩ふ。【五】一麋麗龜　麋は鹿の類、龜は背。麗はツクと訓じ、著なり。左傳宣公十二年に楚の樂伯が一本の矢で麋を射て龜に著き、之を晉の鮑癸に獻ぜし事見ゆ。裴の酬詩に喩ふ。報賽は返禮の意。【六】五鹿連拄　五鹿は衛の地名。漢書朱買傳に五鹿の充宗曷を論じ、諸儒能く之と抗する者なし。朱買臣は諷刺せし事見ゆ。拄は諷刺なり。裴の酬詩に喩ふ。支梧は抵拒なり。【七】銀鉤金錯　書體の妙をいふ。

立秋夕涼風忽至。炎暑稍消。卽事詠懷。寄汴州節度使李二十尚書

立秋の夕涼風忽ち至り、炎暑稍消す。事に卽き懷を詠じて汴州節度使李二十尚書に寄す

嫋嫋檐樹動。好風西南來。
紅釭霏微滅。碧幌飄颻開。
披襟有餘涼。拂簟無纖埃。
但喜煩暑退。不惜光陰催。
河秋稍清淺。月午方徘徊。
或行或坐臥。體適心悠哉。

嫋嫋として檐樹動き、好風西南より來る。
紅釭霏微として滅し、碧幌飄颻として開く。
襟を披けば餘涼あり、簟を拂へば纖埃なし。
但煩暑の退くを喜び、光陰の催すを惜まず。
河秋にして稍清淺、月午にして方に徘徊。
或は行き或は坐臥すれば、體適して心悠なる哉。

美人在浚都。旌旗繞樓臺。
雖非滄溟阻。難見如蓬萊。
蟬吟節又換。雁送書未廻。
君位日寵重。我年日摧頹。
無因風月下。一舉平生杯。

英華作二一與共持一杯。

【字解】【一】 緡緡　風動く貌。【二】 紅　紅燈。羅帳は蔓る貌。【三】 碧幔　綠の帷幔。風飄は風に靡る貌。【四】 午　午後、夜中をいふ。【五】 悠哉　閑暇の貌。【六】 美人　賢人君子をいふ。李二十尚書を指す。【七】 滄溟　大海。【八】 蓬萊　東海中に在る仙山。其宮闕は皆黃金白銀を以て成る。【九】 雁　書信をいふ。

【題義】 立秋の夕に涼風忽ち吹き至り炎暑が稍衰へたので、感懷を賦して汴州（河南開封府）節度使李二十尚書（李紳をいふ。開成の初め、河南尹、宣武節度使に任ぜられた）に寄せた詩である。

【詩意】 そよそよと檐端の樹を動かして涼しい風が西南から吹いて來る。紅燈影暗く碧幔輕く開く處襟を披いて涼を納れ簟の塵を拂つて坐すれば、暑熱の退いたのが何よりも嬉しく歲月の移るのも敢て惜まない。銀河は秋に入りて稍清淺になり、月は眞夜中になつて中天に徘徊してゐる。或は庭中を步し或は室內に坐臥すれば身も心も伸伸として快い。君は節度使となつて汴州に居り、旌旗が樓臺を繞つてゐるであらうが、大海の隔てがあるわけではないが、幾山川を隔てて居るので蓬萊宮にも比すべき君の樓臺を望み見ることも出來ない。今や蟬が鳴いて氣節も換り、書信を送つてもまだ返事も來ない。君は益〻榮進し我は益〻老衰し、君と僕とは益〻相隔たるばかりで、この佳風月の下に俱に杯を擧げて平生の歡を盡すことの出來ないのが遺憾である。

開成二年夏聞新蟬贈夢得

十年來。常與夢得索居。同在洛下。每聞蟬多有寄答。今喜以此篇唱之。

開成二年夏、新蟬を聞きて夢得に贈る　十年このかた常に夢得と索居す。同じく洛下に在り、蟬を聞く毎に多く寄答あり。今喜んで此篇を以て之を唱ふ。

十載與君別。常感新蟬鳴。
今年共君聽。同在洛陽城。
噪處知林靜。聞時覺景淸。
涼風忽嫋嫋。秋思先秋生。
殘槿花邊立。老槐陰下行。
雖無索居恨。還動長年情。
且喜未聾耳。年年聞此聲。

十載君と別れ、常に新蟬の鳴くを感ず。
今年君と共に聽き、同じく洛陽城に在り。
噪がしき處林の靜なるを知り、聞く時景の淸きを覺ゆ。
涼風忽ち嫋嫋、秋思秋に先だちて生ず。
殘槿花邊に立ち、老槐陰下を行く。
索居の恨なしと雖も、還長年の情を動かす。
且喜ぶ未だ耳を聾せず、年年此聲を聞くを。

【字解】【一】十載　十年。【二】嫋嫋　風の動く貌。【三】索居　離居なり。【四】長年　老年なり。杜甫の玉華宮と題する詩に離是長年者とある。

【題義】開成二年の夏に新蟬の聲を聞いて夢得（劉禹錫の字）に贈つた詩である。

【詩意】十年の間別れてゐたので、常に新蟬の聲を聞いては君を思うたが、今年は同じく洛陽に於て君と共に新蟬の聲を聽くのは實に悅ばしい。噪がしい聲を聞くについても林の靜にして景の淸きを覺える。まして風さへ涼しくてまだ秋ならぬに秋の思がする。槿の花の咲き殘れる邊に立ち槐の木陰を行けば、離居の恨こそなけれ、何となく衰老の情を感ずる。併しまだ耳も達者で年年蟬の聲が聞けるのが嬉しい。

題牛相公歸仁里宅新成小灘

牛相公の歸仁里の宅に新に成せる小灘に題す

平生見流水。見此轉留連。　平生流水を見れば、此を見て轉た留連す。
況此朱門內。君家新引泉。　況んや此朱門の內、君が家新に泉を引くをや。
伊流決一帶。洛石砌千拳。　伊流一帶を決し、洛石千拳を砌す。
與君三伏月。滿耳作潺湲。　君が與に三伏の月、耳に滿ちて潺湲を作す。
深處碧磷磷。淺處淸濺濺。　深處は碧磷磷、淺處は淸濺濺。
碕岸東鳴咽。沙汀散淪漣。　碕岸鳴咽を東ね、沙汀淪漣を散ず。
翻浪雪不盡。澄波空共鮮。　翻浪雪盡きず、澄波空共に鮮かなり。
兩崖灩澦口。一泊瀟湘天。　兩崖灩澦の口、一泊瀟湘の天。
曾作天南客。漂流六七年。　曾て天南の客と作り、漂流すること六七年。
何山不倚杖。何水不停船。　何の山か杖に倚らざらん、何の水か船を停めざらん。
巴峽聲心裏。松江色眼前。　巴峽心裏に聲あり、松江眼前に色あり。
今朝小灘上。能不思悠然。　今朝小灘の上、能く思悠然たらざらんや。

【字解】【一】朱門　朱塗の門。牛相公の宅をいふ。【二】伊流　伊水の流。【三】洛石　洛水の石。千拳は千個の拳石、砌は敷くこと。【四】三伏　夏至の後の第三の庚の日を初伏といひ、第四の庚の日を中伏といひ、立秋後の第一の庚の日を末伏といふ。【五】潺湲　流水の聲。【六】磷磷　石の色。【七】濺濺　水の流るる貌。【八】碕岸　曲岸。鳴咽は水の咽ぶこと。【九】淪漣　さざなみ、【一〇】灩澦　四川省奉節縣の西南瞿唐峽の口。【一一】一泊　湖澤を泊といふ。瀟湘は二水の名、北流して洞庭湖に入る。【一二】天南　江南なり。【一三】巴峽　湖北省巴東縣の西二十里に在る。【一四】松江　太湖の支流、今の吳淞江なり。【一五】思悠然　昔を思ふ貌。

【題義】牛相公（牛僧孺）の歸仁里（洛陽の里の名）の宅に新に作りし小灘（水淺く石多く流の急な

處）に題した詩である。

【詩意】平生流水を見るのが好きで、見るたびに數日間留連するのを常とした。況んや相公の宅に新に流を引いて作つた小灘を見ては、誠に喜びに堪へない。一筋の伊水の流を通じ千個の洛石を敷きつめてあつて、三伏の暑中にも潺湲たる音を立て、深い處は石の色が磷磷として美しく、淺い處は水が清くて濺濺と流れ、曲岸は流を束ねて水が咽び、沙汀は漣を散じ、翻浪は雪の如くに湧き立ち、澄波は空と共に鮮であつて、兩岸は灩澦口の如く、一帶の流は瀟湘のやうである。予は曾て江南に謫せられ六七年間諸處に漂流したから、杖に倚つて多くの山を賞し、船を停めて流を弄したので、今でも巴峽の江聲が心裏に殘り、松江の色が眼前にちらついてゐるが、今朝この小灘の上に立ち、悠然として追懷の情を深うした。

春日閑居三首

陶云愛吾廬。吾亦愛吾屋。
屋中有琴書。聊以慰幽獨。
是時三月半。花落庭蕪綠。
舍上晨鳩鳴。窗間春睡足。

春日閑居　三首

陶は云く吾が廬を愛すと、吾も亦吾が屋を愛す。
屋中に琴書あり、聊か以て幽獨を慰す。
是時三月半、花落ちて庭蕪綠なり。
舍上晨鳩鳴き、窗間春睡足る。

睡足起閒坐。景晏方櫛沐。
今日非十齋。庖童饋魚肉。
飢來恣餐歡。冷熱隨所欲。
飽竟快搔爬。筋骸無檢束。
豈徒暢肢體。兼欲遺耳目。
便可傲松喬。何假杯中渌。

睡足りて起つて閒坐し、景晏くして方に櫛沐す。
今日十齋に非ず、庖童魚肉を饋る。
飢ゑ來りて餐歡を恣にし、冷熱欲する所に隨ふ。
飽き竟りて搔爬を快くし、筋骸檢束なし。
豈徒肢體を暢ぶるのみならんや、兼ねて耳目を遺れんと欲す。
便ち松喬に傲るべし、何ぞ杯中の渌を假らん。

【字解】〔一〕庭蕪　庭の草。〔二〕景晏　日の高く昇ること。〔三〕十齋　毎月一日、八日、十四日、十五日、十八日、二十三日、二十四日、二十八日、二十九日、三十日には肉を食はず、之を十齋といふ。〔四〕餐歡　飲食なり。〔五〕松喬　古の仙人、赤松子及び王子喬。

【題義】春日閑居の情景を敍した詩である。

【詩意】陶淵明は吾が廬を愛すと云つたが、吾も亦吾が家を愛する。家の中には琴と書とあつて孤獨の我を慰むるに足る。今や三月の半で花は落ちたが庭の草は綠色濃く、屋根の上では朝鳩が鳴き、室の中では、うとうとと春睡を貪り、睡足り日高く昇つてから起きて髮を濯つて之を梳る。今日は齋日でないので、庖童が魚肉を進めたので、冷い物でも熱い物でも好むが儘に貪つて飲食し、飽けば快く頭を搔き、身には少しの束縛もなく、手足ものびのびとして耳目をも遺れんとするばかりである。

だから酒の力を借るまでもなく、仙人赤松子や王子喬にも傲ることが出來る。

〔二〕

廣池春水平。羣魚恣游泳。
新林綠陰成。衆鳥欣相鳴。
時我亦瀟灑。適無累與病。
魚鳥人則殊。同歸於遂性。
緬思山梁雉。時哉感孔聖。
聖人不得所。慨然歎時命。
我今對鱗羽。取樂成謠詠。
得所仍得時。吾生一何幸。

【字解】〔一〕瀟灑　さつぱりとしてゐること。〔二〕山梁雉　山梁は山道に架けた橋。論語鄉黨篇に、色斯舉矣、翔而後集、曰山梁雌雉、時哉時哉とある。〔三〕孔聖　聖人孔子。〔四〕鱗羽　魚鳥。

【詩意】廣い池に春水が滿ちて魚が自由に游いで居り、新綠の林が陰を成して鳥が欣んで鳴いてゐる。時に我も亦煩累も病症もなく、身心俱に爽である。魚鳥と人とは類を異にしてはゐるが、その性を遂ぐるに至つては同じである。昔山梁の雉の時を得たる、遂に孔子をして感嘆せしめた。聖人でも所を得なければ時命を慨嘆せざるを得ないのである。然るに我は今魚鳥に對し、樂んで之を詠歌してゐる。これぞ誠に所を得且つ時を得たもので、實に幸福の至りである。

〔三〕

勞者不覺歌。歌其勞苦事。
逸者不覺歌。歌其逸樂意。
問我逸如何。閒居多興味。
問我樂如何。閒官少憂累。
又問俸厚薄。百千隨月至。
又問年幾何。七十行欠二。
所得皆過望。省躬良可媿。
馬閒無羈絆。鶴老有祿位。

〔三〕

勞する者は歌ふを覺えず、其勞苦の事を歌ふ。
逸する者は歌ふを覺えず、其逸樂の意を歌ふ。
我に問ふ逸すること如何と、閒居興味多し。
我に問ふ樂むこと如何と、閒官憂累少し。
又問ふ俸の厚薄、百千月に隨つて至る。
又問ふ年幾何、七十行二を欠く。
得る所皆望に過ぎ、躬を省るに良に媿づべし。
馬閒にして羈絆なく、鶴老いて祿位あり。

設自爲化工。優饒只如是。　設ひ自ら化工となすも、優饒只是の如し。
安得不歌詠。默默受天賜。　安んぞ歌詠せず、默默として天の賜を受くるを得ん。

【字解】【一】閑官　閑散な官職。【二】行　行年。年齢なり。杜甫の詩に甚愧丈人行とある。【三】鶴老有二祿位一　左傳に衛懿公好レ鶴、鶴有二乘レ軒者一、注に軒は大夫の車とある。【四】化工　天工を謂ふ。賈誼の賦に、且夫天地爲レ爐兮、造化爲レ工とある。【五】優饒　富貴安泰なり。

【詩意】苦勞する者は覺えず其苦勞を詠歌し、安逸する者は覺えず其安逸を詠歌するものである。我が安逸は如何にといふに閒居して興味多く、樂は如何にといふに、閑職にゐて何の憂累もなく、俸祿はといへば毎月幾百千を賜はり、年齡はといへばまだ六十八であつて、すべて己の望以上のものを得てゐる。これ躬ら省みて大に愧づる所である。謂はば羈を脫した馬の如く、祿位を得た鶴の如くである。たとひ皆天工に由るとはいへ、實に富貴安泰を得てゐること是の如くである。これを詠歌せずに默然として天の賜を受けてゐられようぞ、ゐられはせぬ。

小閣閒坐

閣前竹蕭蕭。閣下水潺潺。　閣前竹蕭蕭、閣下水潺潺。
拂簟卷簾坐。清風生其間。　簟を拂ひ簾を卷いて坐すれば、清風其間に生ず。
靜聞新蟬鳴。遠見飛鳥還。　靜に新蟬の鳴くを聞き、遠く飛鳥の還るを見る。
但有巾挂壁。而無客叩關。　但巾の壁に挂るあり、而して客の關を叩くなし。
二疏返故里。四老歸舊山。　二疏故里に返り、四老舊山に歸る。
吾亦適所願。求閑而得閑。　吾も亦願ふ所に適ひ、閑を求めて閑を得たり。

【字解】【一】蕭蕭　風の音。【二】潺潺　流水の音。【三】二疏　疏廣は漢の宣帝の時太傅となり、兄の子受は同時に少傅となる。職に在ること五年、倶に病を謝して免じ歸る。【四】四老　商山の四皓、秦の亂を避けて隱る。

【題義】小閣に閑坐する情趣を述べた詩である。

【詩意】閣前の竹は風に吹かれて蕭蕭と鳴り、閣下の流水は潺潺たる音を立ててゐる。簟の塵を拂ひ簾を卷きて清風の中に坐し、靜に新蟬の聲を聞き、遠く飛鳥の還るを見る。壁には我頭巾が挂つてゐるのみで、客の來りて門を叩く者もない。二疏の故鄕に歸り四皓の商山に歸つたと同じく、吾も我が願に適うて閑を求めて閑を得た。

遊平泉宴浥澗宿香山石樓贈座客

平泉に遊び浥澗に宴し香山の石樓に宿し座客に贈る

逸少集蘭亭。季倫宴金谷。　逸少は蘭亭に集まり、季倫は金谷に宴す。

金谷太繁華。蘭亭缺絲竹。
何如今日會。浥澗平泉曲。
杯酒與管絃。貧中隨分足。
紫鮮林筍嫩。紅潤園桃熟。
采摘助盤筵。芳滋盈口腹。
閒吟暮雲碧。醉藉春草綠。
舞妙豔流風。歌清叩寒玉。
古詩惜晝短。勸我令秉燭。
是夜勿言歸。相携石樓宿。

【字解】【一】逸少　晉の王羲之の字。羲之は永和九年春會稽山陰の蘭亭に、名士四十餘人を會し、禊事を修し、蘭亭記を作る。【二】季倫　晉の石崇の字。金谷は、河南省洛陽縣の西に在り。【三】缺絲竹　蘭亭記に、雖レ無二絲竹管絃之盛一、一觴一詠、亦足二以暢二敍幽情一とある。【四】惜晝短　古詩十九首に晝短苦二夜長一、何不二秉レ燭遊一、爲レ樂當レ及レ時、何能待二來茲一とある。

【通義】平泉（河南省洛陽縣の南に在り。唐の李德裕の別墅あり。德裕に平泉山居草木記あり）に遊び浥澗に宴し香山寺の石樓（香山寺は洛陽縣龍門山の東に在り。樂天に修香山寺記あり）に宿し、座客に贈つた詩である。

【詩意】昔王逸少は蘭亭に集會を催し、石季倫は金谷園に宴を張つたが、金谷の宴は徒に豪奢を極め、蘭亭の會には管絃の樂はなかつた。されば吾が今日の宴の杯酒と管絃と皆具はり、たとひ貧なりと雖も分に應じて足れるに比すべくもない。特に紫色をして嫩かに育つた筍があり、紅色に潤ひを帶びた桃も熟してゐて、之を採りて肴に供するに足るので、芳香滋味が口腹を盈たした。因つて閒吟して夕に至り春草を藉いて醉臥し、舞の手振が豔にして風の渡るが如く、歌の聲の清らかなことは寒玉を叩くが如くである。昔の詩にも晝の短きを惜んで燭を秉つて夜まで遊べと敎へてある。だから歸らうなどといふ者は一人もなく、相携へて香山寺の石樓に宿した。

池上幽境

池上の幽境

裊裊過水橋。微微入林路。
幽境深誰知。老身閒獨步。
行行何所愛。遇物自成趣。
平滑青盤石。低密綠陰樹。
石上一素琴。樹下雙草屨。

裊裊として水橋を過ぎ、微微として林路に入る。
幽境深うして誰か知らん、老身閒にして獨步す。
行き行きて何の愛する所ぞ、物に遇うて自ら趣を成す。
平滑なり青盤石、低密なり綠陰の樹。
石上に一素琴あり、樹下に雙草屨あり。

此是榮先生。坐禪三樂處。

【字解】【一】裊裊　しなやかなる貌。【二】微微　かすかに。【三】素琴　しらきの琴。【四】草屨　草履。【五】榮先生　列子天瑞篇に、孔子遊二泰山一、見二榮啓期鼓レ琴而歌一、問曰、先生何樂也、曰天生二萬物一、人爲レ貴、吾得レ爲レ人、一樂也、男女之別、男尊女卑、吾得レ爲レ男、二樂也。人生有レ不レ見二日月一、不レ免二襁褓一者、吾行年九十矣、三樂也とある。樂天自ら榮啓期に比して言ふ。

【題義】池邊の幽境を詠じた詩である。

【詩意】水橋を過ぎ林路に入れば一幽境あり、世人之を知る者なし。吾獨り閒歩す。行きて何の見る所ぞ、遇ふ所の物皆趣致あり。青盤石の平滑なる、綠陰樹の低密なるあり、石上に一張の素琴あり、樹下に一雙の草履あり、これ榮先生の坐禪して三樂する處なり。

夏日閒放

時暑不レ出レ門。亦無二賓客至一。
靜室深下レ簾。小庭新掃レ地。
褰レ裳復岸幘。閒傲得二自恣一。
朝景枕簟清。乘レ涼一覺睡。
午餐何所有。魚肉一兩味。

夏日の閒放

時暑くして門を出でず、亦賓客の至るなし。
靜室深く簾を下し、小庭新に地を掃ふ。
裳を褰げて復岸幘し、閒傲して自ら恣にするを得たり。
朝景枕簟清く、涼に乘じて一たび睡を覺す。
午餐何の有る所ぞ、魚肉一兩味。

夏服亦無レ多。蕉紗三五事。
資レ身既給足。長物徒煩費。
若比二簞瓢人一。吾今太富貴。

【字解】【一】岸幘　幘は額上を覆ふもの。岸は免なり、額を露して取りつくろはぬさま。【二】蕉紗　蕉布及び紗。三五事は三五種といふが如し。【三】長物　餘計な物。【四】簞瓢人　論語雍也篇に、子曰、賢哉回也、一簞食一瓢飲、在二陋巷一、人不レ堪二其憂一、賢哉回也とある。

【題義】夏日閑に任せて懶放なる狀を述べた詩である。

【詩意】暑いので外出もせず、亦來り訪ふ客もないから、靜な室に深く簾を垂れ、小庭を掃除して之に對し、裳を褰げ冠物をぬいで、誰に氣兼ねもなく歩きなどして日を送つてゐる。先づ朝は涼しいうちに目を覺まして起き、午餐には一二品の魚や肉を食ひ、著物は蕉布や紗など三四種で事足りる。衣食すでに足ればその餘の物は金錢を徒費するのみで、敢て具ふる必要はない。若し彼の顏回などに比べると、吾が生活は甚だ富貴である。

和二思黯居守獨飲偶醉見示一六韻。時夢得和篇

先成。頗爲麗絶。因添二兩韻一。繼而美之

思黯居守が獨飲偶醉、六韻を示されしに和す。時に夢得の和篇先づ成り、頗る麗絶となす。因つて兩韻を添へ、繼ぎて之を美す

宮漏滴漸闌。城烏啼復歇。
此時若不醉。爭奈千門月。
主人中夜起。妓燭前羅列。
歌袂默收聲。舞鬟低赴節。
絃吟玉柱品。酒透金杯熱。
朱顏忽已酡。清奏猶未闋。
妍詞黯先唱。逸韻劉繼發。
鏗然雙雅音。金石相磨戛。

【字解】【一】宮漏　宮中の水時計。【二】千門　宮中の多くの門。【三】主人　牛僧孺を指して言ふ。【四】赴節　緩急の調子にあはせる。【五】玉柱　琴柱。【六】朱顏　赤き顏。酡は醉ひて赤くなること。【七】逸韻　すぐれてよき詩。【八】鏗然　金石の聲。

【題義】東都留守（官名）牛僧孺（字は思黯）が獨飲偶醉して六韻（十二句）の詩を示されたのに和したのである。時に劉禹錫（字は夢得）の和詩が先づ成り、その詩が極めて麗絶であつたので、更に兩韻（四句）を添へて之を稱美した。

【詩意】夕に啼いた烏の聲も歇み、洛陽の宮中も夜が段段更けて來た。此時若し醉はなければ千門萬戸を限なく照す明月に負くといはねばならない。因つて主人が夜中に起き月を賞し酒を酌まんとした所が、妓と燭とが前にならび、敢て高聲に歌はず、緩急に應じて舞うた。絃聲は玉柱と共に變り、酒は金杯に透つて熱く、主人は忽ち醉うたが奏樂はまだ闋らない。時に主人が先づ妍しき詩を作り、劉夢得が之に和したが、二つながら金石の相擊つが如き美しき韻を發する麗詩である。

和夢得洛中早春見贈七韻

夢得が洛中早春、七韻を贈られしに和す

衆皆賞春色。君獨憐春意。
春意竟如何。老夫知此味。
燭餘減夜漏。衾暖添朝睡。
恬和臺上風。虛潤池邊地。
開遲花養豔。語嬾鶯含思。
似訝隔年齋。如勸迎春醉。

衆皆春色を賞す、君獨り春意を憐む。
春意竟に如何、老夫此味を知れり。
燭餘つて夜漏を減じ、衾暖にして朝睡を添ふ。
恬和なり臺上の風、虛潤なり池邊の地。
開くこと遲くして花豔を養ひ、語ること嬾くして「鶯思を含む。」
年を隔つる齋を訝るに似、春を迎ふる醉を勸むるが如し。

何日同宴遊。心期二月二。　何れの日か同じく宴遊せん、心に期す二月二。

【字解】【一】夜漏　漏は水時計。夜の時間。【二】鱠　魚肉を食はず精進すること。

【題義】劉禹錫（字は夢得）が洛陽の早春と題する七韻十四句の詩を贈つたのに和した詩である。

【詩意】人は皆春景色を賞するが、君は獨り春の情味を愛する。春の情味とは何かといふに我こそ能く其味を知つてゐる。燭を挑げ坐して夜を更かし、暖かな衾の中に寢て覺えず朝寢をし、臺上風穏かに池邊の地が潤ひ、花は豔を養つて未だ開かず、鶯は思を含んで未だ啼かず。これぞ春の情趣である。君は吾が年を越してもまだ精進してゐることを訝り、春を迎へて醉ふことを勸めるものの如くであるが、その中俱に宴遊したいものだ。二月二日はどうかと獨り心に期してゐる。

【餘論】唐宋詩醇に開遲花養豔、語嫩蕚含思の十字、刻畫工絶、春意を寫し虚を變じて實となす、尤も奇なりと評してある。

櫻桃花下有感而作　開成三年春季。美周寳客南池一者。

櫻桃花下感ありて作る　開成三年の春季、周寳客の南池を美する者なり。

(一)藹藹美周宅。櫻繁春日斜。　藹藹として美なる周宅、櫻繁りて春日斜なり。

一爲洛(二)下客。十見池上花。　一たび洛下の客となりてより、十たび池上の花を見る。

爛熳豈無意。爲君占年華。　爛熳として豈意なからんや、君が爲に年華を占む。

風光饒此樹。歌舞勝諸家。　風光此樹に饒に、歌舞諸家に勝る。

失盡白頭伴。長成紅粉娃。　失盡す白頭の伴、長成す紅粉の娃。

停杯兩相顧。堪喜亦堪嗟。　杯を停めて兩ながら相顧み、喜ぶに堪へ亦嗟くに堪へたり。

白頭伴。紅粉娃。皆有所屬。

【字解】【一】藹藹　草木の繁茂せる貌。【二】洛下　洛陽。

【題義】櫻桃の花の下で感ずる所あつて作つた詩である。

【詩意】藹藹と草木が茂つて周寳客の宅は誠に美しい。殊に櫻桃の花が咲き揃つた處を春日の照すさまは亦一入である。僕は一たび洛陽に移り住んでから既に十回この花を賞した。いつ見ても爛熳として君（周寳客を指す）が爲に豔華を呈して君を欣ばすものの如く、此樹が最も春色を誇り、君が家の歌舞も亦諸家に勝つてゐる。白髮の仲間は年年去り盡し、小妓は年年長成する。因つて相俱に杯を停めて一には長生を喜び一には衰老を悲んだ。

洗竹

格詩　櫻桃花下有感而作　洗竹

布裘寒擁頸。氈履溫承足。
獨立氷池前。久看洗霜竹。
先除老且病。次去纖而曲。
剪棄猶可憐。琅玕十餘束。
青青復簹簹。頗異凡草木。
依然若有情。廻頭語僮僕。
小者截魚竿。大者編茅屋。
勿作箏與箕。而令糞土辱。

布裘寒くして頸を擁し、氈履溫にして足を承く。
獨り氷池の前に立ち、久しく看て霜竹を洗す。
先づ老い且病めるを除き、次に纖くして曲れるを去る。
剪棄猶憐むべし、琅玕十餘束。
青青復簹簹、頗る凡草木に異なり。
依然として情あるが若く、頭を廻らして僮僕に語る。
小なる者は魚竿に截り、大なる者は茅屋に編め。
箏と箕とを作し、糞土をして辱めしむる勿れと。

【字解】【一】氈履　毛氈で作ったくつ。【二】可憐　愛すべしの意。【三】琅玕　石にして玉に似たるもの。竹を玉に比していふ。【四】簹簹　竹の長く鋭き貌。詩經に「簹簹竹竿、以釣二于淇一」とある。【五】依然　慕はしげなる貌。【六】箏　箒なり。箕は箕とり。

【題義】竹をすかし密生せるものを疎にしたことを詠じた詩である。

【詩意】寒いので布裘を頸に卷きつけ溫な毛氈で作った履をはき、氷のはりつめた池の前に立つて久しく霜を凌いで立つ竹を眺め、その立ち込んでゐるのを斬つてすかした。先づ年老いて病める竹を除き、次には細くて曲つてゐるのを棄てた。棄てては見たものの猶愛すべく、玉にも比すべき竹の數が十餘束に上つた。いづれも青青と長く鋭くて、平凡な草木とは趣を異にしてゐる。竹の方でも情あるが若く、慕はしさうな樣子である。因つて余は顧みて僮僕に命じた。「小なる竹は截つて釣竿にせよ。大なる竹は屋根を葺くに用ひよ。箒や塵取となして糞土の辱めを受けしめぬやうにせよ」と。

新沐浴

形適外無羨。心恬內無憂。
夜來新沐浴。肌髮舒且柔。
寬裁夾烏帽。厚絮長白裘。
裘溫裹我足。帽暖覆我頭。
先進酒一杯。次舉粥一甌。
半酣半飽時。四體春悠悠。
是月歲陰暮。慘冽天地愁。
白日冷無光。黃河凍不流。

新に沐浴す

形適して外羨なく、心恬くして內憂なし。
夜來新に沐浴し、肌髮舒びて且柔なり。
寬裁夾烏帽、厚絮長白裘。
裘溫にして我が足を裹み、帽暖にして我が頭を覆ふ。
先づ酒一杯を進め、次に粥一甌を舉ぐ。
半酣半飽の時、四體春悠悠たり。
是月歲陰暮れ、慘冽にして天地愁ふ。
白日冷にして光なく、黃河凍りて流れず。

何處征戍行。何人羈旅遊。
窮途絶糧客。寒獄無燈囚。
勞生彼何苦。遂性我何優。
撫心但自媿。孰知其所由。

【字解】【一】寬裁　ゆるく仕立てた。夾烏帽は袷の帽子。隱者のかぶる帽。【二】厚絮　綿を厚く入れた。【三】一甌　ひとかめ。【四】半醉　半酔。【五】悠悠　のびのびとしてゐる貌。

【題義】新に沐浴した時の感懷を述べた詩である。

【詩意】體にも何の故障もなく、心も恬くて憂がない。夕方新に沐浴したので肌も髪ものびのびとして柔になつた。そこでゆるく仕立ててある頭巾をかぶり、綿を厚く入れた白裘を著た。裘は長くて足まで裏み、頭巾は暖に頭を覆つてゐる。先づ一杯の酒を飲み次に一甌の粥を啜つた。その半醉半飽の時は吾が身が春のやうに伸伸とした。今月は歳の暮で天地も愁を帶び日も冷に曇り、河も凍つて流れない。こんな時節にも征戍してゐる兵士もあるであらうし、旅に出てゐる人もあらう。また窮途に飢ゑてゐる者もあるであらうし、獄中燈もない處に呻吟してゐる者もあらう。彼等は何故にかくは生を勞するのであらう。又我は何故にかく幸福に性を遂げ得るのであらう。その所由は考へてもわからず、ただ胸を撫でて自ら媿ぢた。

三年除夜

晰晰燎火光。氤氤臘酒香。
嗤嗤童穉戲。迢迢歲夜長。
堂上書帳前。長幼合成行。
以我年最長。次第來稱觴。
七十期漸近。萬緣心已忘。
不唯少歡樂。兼亦無悲傷。
素屏應居士。青衣侍孟光。
夫妻老相對。各坐一繩床。

【字解】【一】晰晰　明なる貌。【二】氤氤　氣のあがる貌。【三】嗤嗤　笑ふ貌。【四】迢迢　永き貌。歳夜は除夜。【五】素屏　白い屏風。居士は佛に事ふる人。樂天自ら謂ふ。【六】青衣　婢をいふ。孟光は後漢の賢婦。梁鴻の妻。樂天の妻に比していふ。【七】繩床　繩をはりたる腰掛。

【題義】開成三年の大晦日の晩の事を敍した詩である。

【詩意】燎火があかあかと輝き臘酒の香がむらむらと立ちのぼる。小供等は嬉嬉として笑ひさざめき

年越の永き夜を戯れて送る。やがて堂上の書帳の前に長幼殘らず行列を成し、自分が最年長者なので順順に我が前に來て觴を獻じた。自分はもう七十に近くなつて世事は總べて忘れ去り、歡樂もないかはりに悲傷もない。白い屏風（晉の顧愷之は虎頭將軍になつたので世に顧虎頭といふ。畫に巧であつた。その畫いた維摩居士の畫像は白衣を著て素屏の前に坐してゐる）は居士にふさはしく、青衣の婢は我が妻に侍してゐる。我等夫妻は老いて相對し、各一の繩床の上に坐してゐる。

自題小園

自ら小園に題す

不〻關門館華。不〻關林園大。
門館の華なるを關はず、林園の大なるを關はず。

但關爲主人。一坐十餘載。
但主人となるを關ひ、一たび坐してより十餘載。

廻看甲乙第。列在都城內。
廻つて甲乙の第を看るに、列して都城の內に在り。

素垣夾朱門。藹藹遙相對。
素垣朱門を夾み、藹藹として遙に相對す。

主人安在哉。富貴去不〻廻。
主人安くに在りや、富貴は去つて廻らず。

池乃爲魚鑿。林乃爲禽栽。
池は乃ち魚の爲に鑿ち、林は乃ち禽の爲に栽う。

何如小園主。拄杖閒卽來。
何ぞ如かん小園の主、杖に拄へられて閒に卽ち來る。

親賓有時會。琴酒連夜開。
親賓時ありて會し、琴酒夜を連ねて開く。

以此聊自足。不〻羨大池臺。
此を以て聊か自ら足れりとし、大池臺を羨まず。

【字解】【一】十餘載　十餘年。【二】甲乙第　大宅。甲乙次第あり。故に云ふ。【三】素垣　白色の垣。朱門は朱塗の門。【四】藹藹　盛關の貌。

【題義】己の小園に題した詩である。

【詩意】敢て門館の華美なることや林園の廣大なことを爭はず、ただ其主人となることを求め、此に居を卜してから既に十餘年になる。洛陽の都を廻看すれば大邸宅があちこちに散在し、白色の垣が朱塗の門を夾み遙に相對してゐる。その大邸宅の主人は今どうしたかと問へば、富貴一たび去つて復返らず、池は魚の爲に鑿たれ林は鳥の爲に栽ゑられたやうな結果になり、主人は既に沒落してしまつてゐる。それから見れば、たとひ小園にもせよ、自分が其主人となり、閒に乘じて來り遊び、親賓を會して琴酒の樂を盡す方が遙に勝つてゐる。故に予は此小園を以て自ら足れりとなし、敢て大池臺などを羨まないのだ。

病中晏坐

病中晏坐

有〻酒病不〻飲。有詩慵不〻吟。
酒あれども病んで飲まず、詩あれども慵くして吟せず。

頭眩罷垂釣。手痺休援琴。
頭眩して釣を垂るるを罷め、手痺れて琴を援くを休む。

竟日悄無事。所居閑且深。
外安支離體。中養希夷心。
窗戸納秋景。竹木澄夕陰。
宴坐小池畔。清風時動襟。

【字解】【一】竟日　終日。【二】支離體　支離は殘缺なり。やみほうけた身體。【三】希夷心　無爲にして平和な心。老子に視之不見名曰希、聽之不聞名曰夷とある。【四】宴坐　安坐なり。

【題義】晏は晩なり。病中夕に坐し、その情景を述べた詩である。

【詩意】酒はあつても病氣にさはるので飲まず、詩はあつても何となく大儀で吟じもせず、頭が重いので釣をも罷め、手が痺れるので琴を彈くこともせずに、終日悄然として閑居し、病みほうけた身を安んじ、無爲の心を養つてゐる。窓を開いて秋景を眺めると竹木が夕陰の間にすがすがしく立つてゐる。因つて池の畔に安坐すれば清風がそよそよと吹いて吾が襟を撫でる。

戒藥

促促急景中。蠢蠢微塵裏。

藥を戒む

促促たる急景の中、蠢蠢たる微塵の裏。

生涯有分限。愛戀無終已。
早夭羨中年。中年羨暮齒。
暮齒又貪生。服食求不死。
朝呑太陽精。夕吸秋石髓。
微福反成災。藥誤者多矣。
以之資嗜慾。又望延甲子。
天人陰隲間。亦恐無此理。
域中有眞道。所說不如此。
後身始身存。吾聞諸老氏。

【字解】【一】促促　急速なる貌。急景は光陰の速なるをいふ。【二】蠢蠢　うごめく貌。微塵は人の命をいふ。【三】暮齒　老年。【四】太陽精　仙藥の名。【五】秋石髓　仙藥の名。【六】甲子　年歳。【七】陰隲　隲は定なり。天が冥冥の中に在り、默して其民を安定すること。書經洪範に惟天陰隲、下民相一協厥居一とある。【八】域中　宇宙の間。【九】後身始身存　老子に聖人後二其身一而身先、外二其身一而身存とある。

【題義】不老不死を求めて仙藥を服し誤つて死する者を戒めた詩である。

【詩意】光陰は急速で人命は微薄である。人の命には限があるのに、生を戀ふる慾念は已むことがな

い。されば若死にする者は中年の人を羨み、中年の人は老年の人を羨み、老年の人は又生を貪つて仙藥を服して不死を求め、身の幸福を求めんとし藥が誤つて反つて災を招く例が世間に多くある。長生をして嗜慾を貪らうとしても、そんな道理は天地の間にはない。ただ宇宙の間に行はるる眞道に於てはそんなことは言はない。老子は我が身を棄ててこそ始めて我が身が存するのだと謂つてゐる。

贈夢得

前日君家飲。昨日王家宴。
今日過我廬。三日三會面。
當歌聊自放。對酒交相勸。
爲我盡一杯。與君發三願。
一願世清平。二願身强健。
三願臨老期。數與君相見。

夢得に贈る

前日は君が家に飲み、昨日は王家に宴し、
今日は我が廬に過り、三日三たび面を會す。
歌に當つて聊か自ら放にし、酒に對して交〻相勸む。
我が爲に一杯を盡せ、君が與に三願を發せん。
一願は世の清平、二願は身の强健。
三願は老期に臨み、數〻君と相見る。

【字解】【一】王家　王氏の家。【二】清平　泰平。

【題義】劉禹錫(字は夢得)に贈つた詩である。

【詩意】一昨日は君の家で酒を飲み、昨日は王氏の家で宴し、今日は我が家に來訪せられ、三日の中に三度君に面會した。遠慮もなく醉歌して互に酒を勸める。どうぞ我が爲にもう一杯飲み給へ。予は君の爲に三願を立てるであらう。一願は世の泰平なこと、二願は身の强健なこと、三願は身の老ゆるまで數〻君と相見ることである。

逸老

白日下駸駸。青天高浩浩。
人生在其中。適時卽爲好。
勞我以少壯。息我以衰老。
順之多吉壽。違之或凶夭。
我初五十八。息老雖非早。
一閑十三年。所得亦不少。
況加祿仕後。衣食常溫飽。
又從風疾來。女嫁男婚了。

逸老

白日は下りて駸駸たり、青天は高くして浩浩たり。
人生れて其中に在り、時に適すれば卽ち好しとなす。
我を勞するに少壯を以てし、我を息するに衰老を以てす。
之に順へば多くは吉壽、之に違へば或は凶夭。
我初め五十八、息老早きに非ずと雖も、
一閑十三年、得る所亦少からず。
況んや祿仕を加へて後、衣食常に溫飽。
又風疾より來、女は嫁し男は婚し了り、

【詩意】莊子云。勞我以生。逸我以老。息我以死也。

逸老　莊子に云く、我を勞するに生を以てし、我を逸するに老を以てし、我を息するに死を以てすと。

胷中一無事。浩氣凝襟抱。
飄若雲信風。樂於魚在藻。
桑榆坐已暮。鐘漏行將曉。
皤然七十翁。亦足稱壽考。
筋骸本非實。一束芭蕉草。
眷屬偶相依。一夕棲鳥。
去何有顧戀。住亦無憂惱。
生死尚復然。其餘安足道。
是故臨老心。冥然合玄造。

胷中一も事なく、浩氣襟抱に凝る。
飄として雲の風に信するが若く、魚の藻に在るより樂し。
桑榆坐ながら已に暮れ、鐘漏行くゆく將に曉けんとす。
皤然たる七十翁、亦壽考と稱するに足る。
筋骸本實に非ず、一束の芭蕉草。
眷屬偶〻相依り、一夕棲鳥に同じ。
去るも何ぞ顧戀することあらん、住まるも亦憂惱するなし。
生死すら尚復然り、其餘は安んぞ道ふに足らん。
是故に臨老の心、冥然として玄造に合ふ。

【字解】【一】駸駸　速なる貌。【二】浩浩　廣大なる貌。【三】風疾　中風。【四】浩氣　浩然の氣。襟抱は心。【五】桑榆　夕暮。【六】鐘漏　漏は水時計。時なり。【七】皤然　白髮の貌。【八】壽考　長命。【九】玄造　天運なり。

【題義】　莊子の大宗師篇に「大塊我を載するに形を以てし、我を勞するに生を以てし、我を逸するに老を以てし、我を息するに死を以てす。故に吾が生を善くする者は乃ち吾が死を善くする所以なり」とある旨意を述べた詩である。

【詩意】　日は駸駸として過ぎ去り、天は浩浩として廣い。人は生れて其中に在り、天命時運に順應するのが好いのである。天は少壯を以て我を苦勞せしめ、衰老を以て我を休息せしめるのである。天命に順へば吉にして壽を得、之に違へば凶にして若死する。我は五十八で息老した。早く無いやうではあるが、爾來十三年を經て今日に至り、得る所が決して少くなかつた。況んや仕官してより以來常に衣食に不自由なく、中風に罹つて後は（開成四年十一月、六十八歳の時風痺の疾を得、諸妓女を放つた。）子女の婚嫁も畢つて、心に懸る憂もなく、風のまにまに飛ぶ雲の如く藻中に樂む魚の如くである。夕を送り朝を迎へて既に七十の老翁となつたからには、先づ長命と謂つて宜しい。人の身は實あるものではなく、譬へば一束の芭蕉のやうなものだ。一家眷屬相依るも亦一夜の塒を同じうせる鳥と同じである。さう悟つて見れば去るも顧戀する所はなく、住まるも憂惱する所はない。生死すら運命に任せてゐるのだから、其他の事は勿論である。故に吾が衰老の心は天運と冥合して何等の疑惑を抱かない。

遇物感興因示子弟

聖擇狂夫言。俗信老人語。
我有老狂詞。聽之吾語汝。
吾觀器用中。劍銳鋒多傷。

物に遇ひ興を感じ因つて子弟に示す

聖も狂夫の言を擇び、俗も老人の語を信ず。
我に老狂詞あり、之を聽け吾汝に語らん。
吾器用の中を觀るに、劍銳ければ鋒多く傷つく。

吾觀形骸內。骨勁齒先亡。
寄言處世者。不可苦剛强。
龜性愚且善。鳩心鈍無惡。
人賤拾支牀。鶻欺擒煖脚。
寄言立身者。不得全柔弱。
彼固罹禍難。此未免憂患。
于何保終吉。强弱剛柔間。
上遵周孔訓。旁鑒老莊言。
不唯鞭其後。亦要軛其先。

吾形骸の内を觀るに、骨勁ければ齒先づ亡ぶ。
言を世に處する者に寄す、苦だ剛强なるべからず。
龜は性愚なるも且善なり、鳩は心鈍なるも惡なし。
人賤み拾ひて牀を支へ、鶻欺き擒へて脚を煖む。
言を身を立つる者に寄す、全く柔弱なるを得ざれ。
彼固より禍難に罹り、此未だ憂患を免れず。
何に于てか吉を保ち終へん、强弱剛柔の間なり。
上は周孔の訓に遵ひ、旁ら老莊の言に鑒み、
「唯其後れたるを鞭つのみならず、亦其先なるを軛せんこと」を要す。

【字解】【一】狂夫言　史記淮陰侯傳に廣武君の曰く、狂夫之言、聖人擇焉とある。【二】器用　器物。【三】支牀　臥榻の塞にある。史記龜策傳に、南方老人用龜支牀足云云とある。【四】彼　甚だ剛强なる者。【五】此　全く柔弱なる者。【六】周孔　周公、孔子。【七】鞭其後　莊子達生篇に、善養生者若牧羊然。視其後者而鞭之とある。【八】軛其先　短處を補ふこと。

【題義】事に遇ひて感ずる所あり、因つて賦して子弟に示した詩である。

【詩意】聖人も狂夫の言を擇び俗人も老人の言を信ずるといふ。我今老狂言を語る程に汝等は能く聽くがよい。彼の器物を觀るに鋭きものは其鋒損傷し易く、吾吾の形體を觀るに齒骨の如き堅い物は先づ挫ける。されば世に處する者に忠告するが、極端に剛强であつてはいけない。彼の龜は性は愚であるが善良であり、鳩は心は鈍いが惡心がない。だから龜は人に拾はれて寢臺の足などにされ、鳩は鶻につかまつて脚を煖める料に供せられる。されば身を立つる者に忠告するが、全然柔弱であつてもいけない。剛强な者は固より禍に遇ふが、柔弱な者も憂患を免れない。然らば如何にせば吉祥を全うするかといふに强剛柔弱の中間が宜しい。且上は周公・孔子の訓に遵ひ、傍ら老子・莊子の言を參考し、ただ其短處を補ふのみならず、その長處を抑へるやうにするがよい。

首夏南池獨酌

春盡雜英歇。夏初芳草深。
薰風自南至。吹我池上林。
綠蘋散還合。赬鯉跳復沈。
新葉有佳色。殘鶯猶好音。
依然謝家物。池酌對風琴。
慙無康樂作。秉筆思沈吟。

首夏南池に獨酌す

春盡きて雜英歇き、夏初芳草深し。
薰風南より至り、我が池上の林を吹く。
綠蘋散じて還合ひ、赬鯉跳りて復沈む。
新葉佳色あり、殘鶯猶好音。
依然たる謝家の物、池に酌んで風琴に對す。
康樂の作なきを慙ぢ、筆を秉りて思沈吟す。

境勝才思劣。詩成不稱心。　境勝りて才思劣り、詩成れども心に稱はず。

【字解】【一】華英　樓樓の花。【二】綠頸　綠色のうきぐさ。【三】赭鯉　赤い鯉。【四】依然　さも似たり。謝家は南北朝宋の謝靈運をいふ。靈運永嘉太守となり山水に遊遊し輒ち旬日歸らず、後臨川内史となる、遊放永嘉に異らず。【五】風琴　簾前の鈴なり。【六】康樂　謝靈運をいふ。康樂侯に封ぜられしを以てなり。靈運は山水遊賞の詩に巧なり。【七】沈吟　思案する。

【語義】夏の初に南池の邊で獨酌したことを詠じた詩である。

【詩意】春盡きて花もなくなり、今や夏の初で芳草が茂つてゐる。薰風が南から來て池邊の林を吹いてゐる。池には綠の蘋が散じたり集まつたりし、緋鯉が浮んだり沈んだりしてゐる。樹樹の葉は青青として殘鶯の聲も美しい。恰も謝靈運の遊賞したやうな景色を賞しながら、風琴に對して池邊に獨酌し、靈運のやうな立派な詩の出來ないのを慙ぢ、筆を持つて思案に耽つたが、あまり景色がよすぎるので詩思が壓倒せられ、どうやら詩は出來ても自分ながら氣に入らない。

官俸初罷。親故見憂。以詩諭之

官俸初めて罷められ、親故憂へらる。詩を以て之を諭す

七年爲少傅。品高俸不薄。　七年少傅となり、品高くして俸薄からず。
乘軒已多慙。況是一病鶴。　軒に乘りて已に多く慙づ、況んや是れ一病鶴をや。
又及懸車歲。筋力轉衰弱。　又懸車の歲に及び、筋力轉た衰弱す。
豈以貧是憂。尙爲名所縛。　豈貧を是れ憂へ、尙名の縛する所となるを以ひんや。
今春始病免。纓組初擺落。　今春初めて病んで免せられ、纓組初めて擺落す。
蜩甲有何知。雲心無所著。　蜩甲何の知ることあらん、雲心著く所なし。
困中殘舊穀。可備歲飢惡。　困中の殘舊穀、歲の飢惡に備ふべし。
園中多新蔬。未至食藜藿。　園中新蔬多く、未だ藜藿を食ふに至らず。
不求安師卜。不問陳生藥。　安師の卜を求めず、陳生の藥を問はず。
但對丘中琴。時開池上酌。　但丘中の琴に對し、時に池上の酌を開く。
信風舟不繫。掉尾魚方樂。　風に信せて舟繫がず、尾を掉かして魚方に樂む。
親友不我知。而憂我寂寞。　親友我を知らず、而して我の寂寞を憂ふ。

【字解】【一】少傅　官名。開成元年樂天年六十五の時、太子少傅に任ぜられた。【二】品高　位の高いこと。【三】乘軒　軒は大夫の車。左傳に衛懿公好鶴、鶴有乘軒者とある。【四】懸車歲　官を辭して隱退する年。禮記に大夫七十而致事とある。【五】纓組　冠の紐や印綬。官職に喩ふ。【六】蜩甲　蟬のぬけがら。莊子寓言篇に予蜩甲也、蛇蛻也、似之而非也云云とある。【七】雲心　雲の如き心。【八】困中　倉の中。【九】藜藿　あかざ、豆の葉。

【題義】此詩は會昌二年、樂天年七十一の時の作で、官職を辭して退き俸祿も戴かれなくなつたので、親友などが樂天の爲に憂ふる者があつた。因つて此詩を作つて諭したのである。

【詩意】既に七年間太子少傅の官に居り位も高く俸祿も厚かつた。一病鶴にも譬ふべき身を以て軒車に乘るのが慚かしく感ぜられた。況んや七十になり致仕すべき年齡に達し體力も衰へたのであるから、己の貧を憂へていつまでも名利に束縛せられてゐるべきではない。そこで今年の春始めて病を以て官を免せられたが、身は蟬の抜殼の如く心は雲の如く無慾であるから少しも心を牽かれることはない。官を罷めても倉には舊穀の殘があつて饑饉に備ふるに足り、園には野菜があつて藜や豆の葉などを食ふほどに窮してはゐない。又安師の卜を求めるほどに心の迷もなく、陳生の藥を服するほどの病氣もない。ただ琴を彈いたり酒を飲んだりして、繫がざる舟の如く水中の魚の如く自由に樂んでゐる。然るに親友は我が眞情を解せず、煩悶でもしてゐはせぬかと心配してくれる者もあるが、それは無用の心配と申すものだ。

閒居偶吟。招鄭庶子皇甫郎中

閒居偶吟、鄭庶子・皇甫郎中を招く

自晒此迂叟。少迂老更迂。　自ら晒ふ此迂叟、少くして迂に老いて更に迂なるを。

家計不一問。園林聊自娛。　家計一も問はず、園林聊か自ら娛む。

竹間琴一張。池上酒一壺。　竹間琴一張、池上酒一壺。

更無俗物到。但與秋光俱。　更に俗物の到るなく、但秋光と俱にす。

古石蒼錯落。新泉碧縈紆。　古石蒼錯落、新泉碧縈紆。

焉用車馬客。卽此是吾徒。　焉んぞ車馬の客を用ひん、卽ち此れ是れ吾が徒。

猶有所思人。各在城一隅。　猶思ふ所の人あり、各城の一隅に在り。

杳然愛不見。搔首方踟躕。　杳然として愛すれども見えず、首を搔いて方に踟躕す。

玄晏風韻遠。子眞雲貌孤。　玄晏は風韻遠く、子眞は雲貌孤なり。

誠知厭朝市。何必憶江湖。　誠に知る朝市を厭ふ、何ぞ必ずしも江湖を憶はん。

能來小澗上。一聽潺湲無。　能く小澗の上に來り、一たび潺湲を聽かんや無や。

【字解】〔一〕迂叟　樂天自ら謂ふ。〔二〕錯落　入り亂れること。〔三〕縈紆　めぐる。〔四〕杳然　遙なる貌。愛不見は詩經邶風靜女篇に靜女其姝、俟我於城隅、愛而不見、搔首踟躕とあるを。〔五〕玄晏　晉の皇甫謐自ら玄晏先生と號す。ここは皇甫郎中に比す。〔六〕子眞　漢の鄭子眞、名は樸、道を修め默を守る。谷口に家す。世に谷口子眞と號す。ここは鄭庶子に比したのである。〔七〕潺湲　流水の聲。

【題義】閒居の狀を敍し、鄭庶子（庶子は官名）と皇甫郎中（郎中は官名、皇甫湜である）とを招いた詩

である。

【詩意】吾は少い時から今日まで迂濶者で通して來たことを自ら哂はざるを得ない。家計のことには少しも頓著せず、ただ園林の娯にばかり耽つてゐる。竹林の中に琴を彈じたり池の邊で酒を飲んだりして樂み、俗物の來り問ふなく、ただ秋光と相伴つてゐる。池には古い石が青黒い色をしてごろごろして居り、泉は碧色をなして環流してゐる。車馬の客などはなくもがなで、ただ石や泉を友としてゐる。併しそれでも思ひ慕ふ所の人がないわけには行かぬ。吾が思ふ人は各〻洛陽城の一隅に居り、遠く離れてゐて見えないので首を掻いて徘徊顧望してゐる。皇甫郎中は風趣が高遠で、鄭庶子は俗氣を離れてゐる。けれども朝市を厭うた者は必ずしも江湖を憶ふものとも限らないから、我が小澗に來て水の流でも聽いて樂んではどうだ。

亭西牆下伊渠水中置石。激流潺湲成韻。頗有幽趣。以詩記之

亭西の牆下の伊渠水中に石を置きしに、流に激し潺湲として韻を成し、頗る幽趣あり。詩を以て之を記す

嵌巉嵩石峭。皎潔伊流清。嵌巉として嵩石峭ち、皎潔にして伊流清し。

立爲遠峰勢。激作寒玉聲。立つて遠峰の勢を爲し、激して寒玉の聲を作す。

夾岸羅密樹。面灘開小亭。岸を夾んで密樹を羅ね、灘に面して小亭を開く。

忽疑嚴子瀨。流入洛陽城。忽ち疑ふ嚴子瀨、流れて洛陽城に入るかと。

是時羣動息。風靜微月明。是時羣動息み、風靜にして微月明かなり。

高枕夜悄悄。滿耳秋泠泠。枕を高うして夜悄悄たり、耳に滿ちて秋泠泠たり。

終日臨大道。何人知此情。終日大道に臨む、何人か此情を知らん。

此情苟自愜。亦不要人聽。此情苟くも自ら愜ふ、亦人の聽くを要せず。

【字解】【一】嵌巉　山のけはしき貌。嵩石は嵩山の石。【二】伊流　伊水の流。【三】嚴子瀨　浙江省桐廬縣の南に在る。嚴子陵（後漢の嚴光）の居た處である。【四】羣動　すべての物音。【五】悄悄　靜かな貌。【六】泠泠　音聲の洋溢すること。陸機の賦に音泠泠而盈耳とある。

【題義】亭西の牆下の伊水を引いた渠の中に石を置いた所が、其石が流に激して潺湲と快き聲を發するので、大に幽趣を添へた。因つて此詩を作つて其事を記したといふのである。

【詩意】嵩山から持つて來た石が聳え立つて遠峰の姿をなし、伊水の流が清らかで寒玉の聲を立てている。因つて兩岸に樹を植ゑ列べ、流に面して小亭を構へた。嚴子瀨が洛陽に流れて來たかと疑はるるばかりである。一切の物音が鎮まり風もなく微月の高く升つた時、枕を高うし臥して聽けば、泠泠

として耳に快い。大道の側に在つて、こんな風情があらうとは誰も知る者はあるまいが、我獨り此風情を賞翫し得れば、敢て人の聽くことは求めない。

閒題家池寄王屋張道士

閒に家池に題し王屋の張道士に寄す

有石白磷磷。有水清潺潺。
石あり白くして磷磷たり、水あり清くして潺潺たり。
有叟頭似雪。婆娑乎其間。
叟あり頭雪に似たり、其間に婆娑す。
進不趨要路。退不入深山。
進んで要路に趨らず、退いて深山に入らず。
深山太濩落。要路多險艱。
深山は太だ濩落、要路は險艱多し。
不如家池上。樂逸無憂患。
如かず家池の上、樂逸して憂患なきに。
有食適吾口。有酒酡吾顏。
食あり吾が口に適ひ、酒あり吾が顏を酡くす。
恍惚遊醉鄉。希夷造玄關。
恍惚として醉鄉に遊び、希夷として玄關に造る。
五千言下悟。十二年來閑。
五千言下に悟り、十二年來閑なり。
富者我不顧。貴者我不攀。
富は我顧みず、貴は我攀ぢず。
唯有天壇子。時來一往還。
唯天壇子のみあり、時に來りて一たび往還す。

【字解】【一】王屋　山の名。山西省陽城縣の西南に在り、南河南省濟源縣に跨る、一名天壇山。【二】磷磷　玉石の色澤。【三】潺潺　流水の聲。【四】婆娑　徘徊する貌。【五】進路　廊落なり。空闊なり。【六】希夷　老子に視レ之不レ見、名曰レ夷、聽レ之不レ聞、名曰レ希とあり。よく道を體して靖默を守ること。玄關は玄道の門。【七】五千言　老子道德經。【八】天壇子　張道士をいふ。

【題義】閒に自家の池に題し、王屋山中の張道士（道士は道教を修むる士。張は其姓）に寄せた詩である。

【詩意】吾が家の池には白石が磷磷と輝き清水が潺潺と流れてゐる。白髮の老翁たる我は常に其間に徘徊してゐる。我は進んで權要の地位にも登らず、退いて山中に隱遁もしない。山中はあまりに寂寞であり、權要の地位は危險が多いからである。ただ吾が家の池邊は樂んで且何等の憂患もなく、食は我が口に適ひ酒は我が顏を赤くするに足りる。因つて恍惚として酣醉し陶然として道を樂み、老子を讀んで言下に眞意を悟り、十二年來ここに閑生涯を送つてゐる。富貴は吾が顧でないから富貴の人の來り訪ふ者なく、ただ天壇山中の張道士が時時來訪するのみである。

李・盧二中丞各創山居。俱誇勝絕。然去城稍遠。來往頗勞。敝居新泉。實在宇下。偶題十五韻。聊戲二君

李・盧二中丞各〻山居を創め、俱に勝絕を誇る。然れども城を去ること稍遠

格詩　閒題家池寄王屋張道士　李盧二中丞各創山居俱誇勝絕偶題十五韻聊戲二君